
東方分列録

悪来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方分列録

【Nコード】

N8548P

【作者名】

悪来

【あらすじ】

其処は幻想郷。目が覚めるとそこは雪国でした。

って……………マジですか！？な話。

1 プロローグ(前書き)

初投稿です。拙い文章ですが……読んで頂ければ幸いです。

では、どーぞ!!

1 プロローグ

目を覚ますと、其処は雪国でした。

なんで？

〈東方分列録〉

何処かで聞いたことのあるようなフレーズがつい出てしまう。それだけ唐突な状況に放り込まれたってことだ。

「……落ち着け。まず、状況整理だ。」

体を起こして周りを見渡す。

白、白、白。

「何も判んねえ。何処だココ？」

辺り一面の銀世界。いや、白いけど。

知らない場所だな。日本なのかどうかさえも怪しい。これぞ原風景という感じの平原。高層ビルもなけりゃ家すら見当たらん。

「……寒っ。」

今更ながら寒さを感じる。まあ当然と言えば当然だが。これだけ白かったらな。某洗剤もびっくりの白さだ。

「取り敢えず動きますか。」

何にせよ動かねば、凍死或いは餓死してしまうかもしれない。

白の世界に足を踏み出す。雪を踏み下す音が耳に心地よく響く。

動き易い服装で良かったな。

ああ、でもそれ故に寒いのか。

そんなことを考えながら、当てもなく歩いていく。

危機感ねえな、俺。

~~~~~

歩くこと三日間。

……いや、嘘だ。

まだ数十分しか歩いてないと思うが。

気付いたことが数点。

まず以前に比べて格段に身体が軽い。以前は一介の高校生だった俺では考えられない程だ。別段変わったところは無いんだが。

試しに雪を固めて投げてみる。

ソフトボール大の雪玉。

上段から腕を降り下ろす。投手の命は手首のスナップを如何に効かせるか、だったか。以前聞いた気がする。

「バーニング！」

アイスボールだけどな。

バシュツ！ シュバアア！！

「…………マジで？」

…………風になった。

なんか形容し難い現象になってんだけど。

スピードが出過ぎてシュバアアツて。うん、空気抵抗とか。

…………何いってんだろね、俺。

隠し芸を1つモノにしたところで遠方に洞窟らしきものを発見。

「……………ちょっと休憩するか。」

体力的には大丈夫なんだけどな。

真っ白な世界を歩いてると気が滅入るんだもんなあ。

取り敢えず中で休憩することに。

## 1 プロローグ（後書き）

いやー、小説って難しいんですねえ。  
短いし、なかなか話がまとまらないし…

……精進いたします！

## 2・四季の幼じ…いや、神。

「洞窟………だよな？」

洞窟を発見してから歩くこと数分。

小高い丘の中腹ほどにぽっかりと空いた穴にたどり着いた。

「…お邪魔しまーす。」

一応声を掛けてみる。当然の様に反応は無かったが。………いるはず無いって判ってはいるが、呼び掛けずに入るのもなんだろう？  
悲しき日本人の性かな。もしくは単に俺のみに当てはまる原理なのか。

8

まあどうでも良いが。

洞窟の中は意外と暖かく、外の寒さに堪えていた身体には有難い。  
霜焼けになりかけた手に息を吐きながら奥に進んでいく。

暫く歩いていると、開けた場所が。

ゴツゴツした岩肌を剥き出しにした壁に沿って、縄の様なものがか

かっている。

その部屋 開けた場所のことだが 中央には一段とデカイ岩が。大きな岩が乱立しているこの場所において一際目立つそれは、何と  
いうか。

……神々しい雰囲気を放っていた。

「……………おおっ」

神とか霊を信じていない俺でさえ、溜め息を吐かざるを得ない光景だ。

これは普通の、常識の範疇に在るものではない。

そんな考えが無意識下に浮かぶ。

「今までの人生の中で一番心に来たかもな。……………そうだ。」

この光景を記録に残すために携帯電話で写真を取る、という余り神  
霊を祀る場所では誉められない行為に走る。

「まあ、他に人居ねーし、大丈夫だろ。……………多分。」

そう1人ごちて携帯を構えた瞬間。

『 その手に持っているのは何じゃ？  
』  
「 うおっ！？何だ！？ 」

耳元に囁くような声が。  
瞬時に身を翻し何者かを確認する。

するとそこには。

ちっこい女の子がいた。

長い黒髪に日本人的な顔立ち。まだあどけなさは残っているが整っている。  
将来は絶世の美女、って感じの子だ。  
……ということは今は絶世の美少女か？

「 あー、君、何でこんなところに独りでののかな？迷子？ 」

なるべく優しい声で問い掛ける。だって無愛想にすると怖がられて余計なことになる。

まあ、以前の経験からの引用だが。

以前は関わらないという選択肢も有るには有ったが、こんな場所で2人きりなら無視するという方が神経を使っただろう。

よって優しいお兄さんとして話しかけるのが上策だろうと返事を待っている。こんな言葉が返ってきた。

『私が質問しているのだから貴様が先に答えるのが礼儀であろう。それとも人間はそれすらも判らぬ程に低能であるのか？』

えーと、何を言うのかなこの幼女は？？

あれか？今流行りのDS幼女ってやつか？

流行りかは知らんが。

「あー、確かに少し不躰だったな。……これは携帯電話と違ってだな、まあ簡単に言うると遠くの人と連絡を取るための媒体だな。………っていつても判らんか。」

何を俺はこんな小さい娘に真面目に説明してるんだろう。

しかもまだ小学校低学年辺りであろう子供には到底理解出来ないで

あるつ言い回しで。

……俺の悪い癖だな。

『ほお、その様な道具は初めて目にするな。どれ、少し見せてみる。』  
『そういつて少女は俺の手から携帯を引ったくつた。』

判ったのかよ。しかも偉く強気だな、この娘。  
まったく、親はどんな躰をしているのだろうか。

そんな町内会のおばさんみたいなことを考えていると、ある疑問が  
浮かぶ。

「なあ、君の親は何処にいるんだい？」

携帯を興味深そうに調べている少女に尋ねる。

そう、いくら幼くとも親が使用している携帯電話を目にすることぐ  
らいはあるはず。

しかしこの娘は『初めて』目にすると言った。  
それは何を意味しているのか。

更に、こんな所に『独りで』いるという点。

もし本当に迷子なら、この余裕の態度はそうそうできるものではな

い。ましてやこんな幼い娘に。

よくよく考えれば怪しいとこぼっかじゃねえか。  
普通に接しようとしてた自分を心配する。

楽観的にも程があるぜ、俺。

一人で脳内反省をしている俺を、少女の声が現実に戻す。

『私は此処の祭神だ。独りに決まっておろう？』

怪訝な声を出す少女。

とつか威圧感半端ねえなこの娘。  
聞かざるを得ない雰囲気だ。

……聞き慣れない単語を処理している内のどうでもいい感想は置いといて、今の話をまとめると。

……まとめきれねえ。

なんて？サイシン？最新？

私はニュータイプです宣言か？

当社比1・2倍速で動けます、みたいな。

……自分で動揺がわかるな。

「ああー、サイシンねサイシン。良いよなあね。やっぱり唐辛子とか食べると発汗効果あるもんな」

『……………何を言っておるのだ貴様は。』  
頭上にハテナを出す少女。

「まあ、それは良いとしてそろそろ携帯返してくれるかな？」

『むう。構わんが、何をするのじゃ？』

「そろそろ帰ろうかなあと」  
寒いしね。

ここが何処で有るのかは知らないが、携帯で誰かに連絡を取れるかも知れない。まあ今まで余り焦らなかつたのはそれによる安心感だったりする。

俺だって理由もなく樂觀してるわけじゃないぜ？

……………いや、ホントに。

『ほね。』

「おう。サンキュ。」

受け取った携帯を開いて見る。

まずは知り合いか…？

そう思い、電話帳を開こうとすると視界に飛び込んできた文字が。

『圏外』だとさ。

「まあ、こんな洞窟の中じゃな。」

そう思い、外に出ることを決定。

となると、問題はこの子だな。

強気で不思議ちゃんではあるがこんなに幼い子を独りにするのは気が引ける。

こんなところで会ったのも何かの縁だし、家まで送り届けやろう。

恐らくではあるが、この娘は家出少女なのであると思う。そうなれば先程の態度もある程度説明が付く。

「君、こんなところに独りでいたら危ないだろ？家にまで送りとどけようか？」

この娘がこの雪の中来たということは近くに家があるはずだ。

今まで平原を歩いて来たが丘の向こうに街があるのかもしれないし、雪で見逃しているのかもしれない。

そこである程度情報を得られれば、帰れるだろ。

そう考えていた俺。

しかし、少女の答えは俺の意図していたのとは違うものだった。

『……初めから思っていたが、貴様あの村のものではないな？見たこともない服、聞いたこともない言葉、あの村に住んでいる人間なら考えられん態度。……私を誰だか知らないのではあるまいな？』

いきなり雰囲気が変わった。

ビリビリするというか、目に見えない威圧を受けているような心なしか気温も下がっている。

「いや、君が誰かは知らないけど。……その村では結構有名なの？」

こんな娘に気圧された自分に少し情けなさを感じる。

『……はあ、最近の若者にしては私を子供扱いをして珍しき奴だと思っていたら。外来の者か。』

外来の者？

まあこの土地の人では無いかも知れんが。

『……その顔は自分の置かれている状況がわかっていないな。やれやれ、といった顔をする少女。』

『……私は四季舞<sup>ひつよはまい</sup>。名の通り四季を統べる神だ。因みにお前の何十倍も年上だ』

……マジで？

2・四季の幼じ…いや、神。(後書き)

話がなかなか進みませんねえ。

原作キャラももう少し後になりそうです (^| ^ ;)

### 3・一路、村へ。(前書き)

いやー少し長くなっちゃいました。  
まあ話しは進んでないけどなっ！

……………すみません努力します。

では、ごじゆ。

### 3・一路、村へ。

——雪の洞窟で会った少女は、神様でした。

そう、神様だったのだ、その少女は。（倒置法）

「……………は？」

そんな俺の言葉。

所謂『神様宣言』を受けて呆気に取られる俺。

……………この子なりのユーモアか？うん、そうだろうな。ははっ何を真に受けてるんだ俺。

まあ軽く乗ってやるのがお兄さんってもんだろ。

……………早く帰りたいんだが。

「へえ、そうなんだあゝ凄いなえ！」

……ちよつと適當過ぎたかな？  
小さい子の相手をした経験がないから勘弁してくれ。

『…貴様、私の言うことを信じてないな？』

はい、そりゃあ勿論。「いやいや、信じてるよ？こんな可愛らしい神様がいたら素晴らしいよね。」

何処のナンパ男だ俺は。  
なんか口を付いて出た。

『ふん、人間風情が神に可愛らしいとな。言うではないか。』  
サラリと笑みを浮かべ受け流す少女。

『これ程までに度胸のある人間は久しく見たぞ。………ならば、私が神たる所以を見せてやろう。』

そう言って両手を翳す神様（幼）。

「がおー」

適当にアフレコしてみる。

『……………黙って見とられんのか貴様は』  
此方を睨んでくる少女。

目付きは鋭いのだが、いかんせん小っちゃいもんだから自然と上目遣いなカンジに。

……………ああ、癒されるう。

『……………まあ良いわ、しかと見とけい。』

幼女が手を廻す。するとどうだろう、急激に部屋の温度が上がっていく。

「……………え？……………ちよっ、えっ！？」

雪に濡れた服から湯気が出始める。  
まだまだ上がる室温。

……サウナと良い勝負になってきたぞ。

ジュワァ〜という水が蒸発する音が聞こえる。

蒸し焼きってレベルじゃねーぞ、これ。

しかし気温はまだまだ上がっていく。

ついに、岩に架かっている縄が燻り始めた。

「ちよっタンマ！」

『たんま?』

発火する縄。着ている服も焦げ始め、焼けたような臭いが鼻を刺激する。

「止めてくれって事だ！」

『…仕方がないのう。』

幼女が手を降ろすと、次第に冷えていく室内。

燃えカスになった縄に、焦げて穴が空いた俺の服。ボヤ騒ぎの後の様な部屋になってしまった。

結構凄惨だぞ、これ。

「……………何なんだ、今のは？」

涼やかな顔をしている幼女に問うてみる。

『じゃから今のが私の能力じゃ。四季を操る程度の能力、ではあるが実質は自然に関係することならおおよそのことはできる。』

……………っていうことは何だ、このちっさいのは本当に神様で、なんか知らんがトンデモパワーを持っているのか！？

「……………ホントに、神様なのか？」

『そうであるうと言うに。なかなか頑固な奴じゃのう』

何てこったい。

如何に俺が無神論者でもあんなの見せられたら疑う余地がない。其れほどまでに先程のは衝撃的だった。

「あー、えっ……とお、か、神様？」

『四季舞つよとせ舞じゃ』

「えーと、四季さん？」

『何じゃ、急に改まりおつて。』

それはしょうがないだろう、あんな光景を見たら正常な人間なら誰だって少しはビビる。

そうじゃないなら頭か精神の病院へ行くことを是非お薦めしたい。

「神様って言うのは良く分かった。それは置いておくとして、ここはどこなのか教えて貰いたい。」

今までの体験から推測出来ることがある。

仮説としてだが、まずここは現代日本ではないのではないか、という説が浮かび上がる。

このように広大で肥沃な土地が在るにも関わらず、全くと言って良いほど都市開発がなされていない。

さらに、四季と名乗る神の言動からするに携帯も見ることがないとするればこの説は有力になる。

ここは真実を知るためにも何かしらの情報を得ねば。

『……急に態度が変わったり、場所を尋ねたり、よう判らん奴じゃのう。』

四季と名乗る神様は呆れたように口を開いた。

『特にこれと言った名前は無いが、ここら一带は「福井」と呼ばれておるな。』

……ん？福井県か？？

……現代、若しくは近代じゃん。

……長々と仮説を立てて置いて盛大に外した。

恥ずかしッ（照）

何とも言えない微妙な気分になっていると、四季の視線に気づく。

「……なんだ？」

『……相手が神だと知っても余り態度を変えんのだな。まあ良いが。』

どこかむすつとした表情で呟く様に言う四季。

「……………これは申し訳ありません。  
丁寧な言葉使いをさせて頂きます、お嬢様。」

可能な限り爽やかな笑顔で言ってみる。

しかし、

『良いわ、畏敬のない言葉など要らん。今までの様に話せ』

断られた。

まあ良いや、自分でも気持ち悪っ！て思ったし。

…っと、遊んでいる場合じゃない。

「四季が言ってた『近くの村』ってどこにあるんだ？そこでのいろいろ訊きたいんだが。」

なんとなく呼び捨てにしてしまった。

まあ良いだろ、結構心は広い神様だし。

……………器がでかいんだな。背は小っちゃいけど」

『聞こえておるぞ』

……いとやばし。

声に出してた。

『村ならこの穴を抜けた先に在る。近くにあるから歩いて行けるぞ』

スルーしてくれて有難い。

「そうか。ありがとな。んじゃその村に行ってみるわ」  
近くに有るなら有難い。

寒い中を長く歩くのは嫌だし。

「じゃ四季の神様。俺はこれで。」  
そう言っつて別れを告げようとするど、

『いや、私も着いて行こう。どうせ村にも私用があるしな。何より  
お前に興味が湧いてきた』  
そう言っつて俺の背中に飛び乗る四季。

おっ呼び方が貴様からお前に。  
少しは距離を縮められたのか。

…ていうか何で背中に乗るんだ。

「お前を背負えってか？」四季に訊ねてみる。

『この背中に乗った状態からそれ以外に如何な選択肢があるのだ？』

普通に返された。

「んじゃまあ、行きますか」

四季を背負って更に奥へ。

外に出ると雪は止んでいた。

太陽が雲の間から顔を出し陽射しが雪に反射し輝いている。

「……やっぱり寒っ」

しかし寒いもんは寒い。

何てっ たって服穴空いてるし。

『何じゃ、風情を理解せん奴じゃのお』

「どっかの誰かさんに服を燃やされましてねえ」

『……本当に遠慮せん物言いじゃの』

それでいいつつたやん。

「……ていうかお前の能力で何とか出来ないのか？自然を操るんだろ？」

『正確には四季じゃ』

「……まあどつちでもいいけど。ここら一带を春にするとかそういう事は出来ないのか。」

『……出来るが』

「……が？」

『その前に訊きたいことがある。』

「じゃあ、気温を上げてくれたら答えるぞ」

……寒くてしょうがないんだ。マジで。

『……これでいいか？』

四季が言うつとぐんぐんと気温が上がリ、暖かいと思える程に。それと同時に辺りの雪が融け出し、地面がぬかるんできた。少し歩き辛いが、寒いよりましか。

「…サンキユ。質問をどうぞ？」

『……さんきゅ？とは何だ？』

「……ああ、『有り難う』ってことだ」

……やっぱ、外来語が判んないのか？

「英語って聞いたこと無いのか？」

【Thank you.】くらいだれでも知っていると思うが。

『無いな、どこの言葉じゃ？』

「イギリス或いはアメリカ合衆国。まあだいたい世界共通語だが。」

『……聞いたこともないの。』

珍しいな、現代日本では英語教育にも力を入れていたと記憶しているが。

……ていうか雪融け水が土に染み込んで大変歩き辛い。

「ところで、四季さん。図々しいとは自覚しておりますが、この水もなんとかしていただけじゃないでしょうか？」

『何じゃ、注文の多い奴じゃな。これくらい自分でなんとかせいでいい。』

「いやいや、俺がこけたらその長い髪が汚れちゃうよー？」

ちよっと脅してみる。

『そうならないように自分でなんとかせい、外来の者じゃろ？』

またもや受け流されました。…… 四季、恐ろしい娘っ！

「……外来の者って何だ？」

洞窟でも聞いた気になるフレーズについて訊いてみる。

『極稀にはあるが、お前の様に急に現れる奴がある。それこそ何十年に1人だが。』

「……へえ。」

何ともスパンの長い、神様らしい話で。

「……外来人ってことには相違ないな。もともと福井県に住んで無かったし。」

俺は都内在住のバリバリの都会っ子だった筈だ。

にも関わらずこれだけ歩いても疲れないのは謎だが。

『……お前は外来の者であって外来人では無いぞ？』

いつの間にか謎のパワーアップを遂げていた自分の体について考察しようとしているところに神の御告げが（比喻ではない）。

「……どういう意味だ？」

『お前はヒト、つまり「人間」ではないではないか』

「……は？」

……なにそれ初耳。

『お前からは人間特有の力である霊力を感じないのう。どんな人間でも微弱ではあるが霊力がないということは無いのじゃが』

……なんか話が見えなくなってきたな。

ここに来る前は俺は生物学的観点からして確実にヒト、ホモサピエンスだった筈。

神のような特別な能力なんか持ち合わせているはずもない、一般的な高校生であった。

……まあ多少楽観的とは言われて来たが、順応性が高いと言ってもらいたい。

「………ということとは今の俺は何なんだ？」

背中に乗っている四季に訊いてみる。

………もしかしたら俺神か！？

別に矢鱈めつたら強い能力が欲しいわけではないのだが。

『そうじゃな、今のお前からは……………妖力を感じる。それも、そこそこ強大な。』

……………ヨウリヨク？

揚力？なに、俺空飛べんの？

……………いや妖力か。

「そうかー遂に妖怪デビューしたのか俺。はっはっ」

『……………でびゅー？……………よく判らんがその物言いからするとここに来る前は人間であつたのではないか？』

「まあ、人間やつてたな」  
人間やつて十数年でした。

『……………特に衝撃は受けないのだな』

「そつだなー。妖怪って言うなら凄いんだろ？結構ワクワクするな」

『……………お前は将来大器になりそつだな』

誉められました。照れる俺。

いやー妖怪になったのか俺。

まあでも水溜まりに映る自分の姿を見ても特に変わったところはないし、今まで通りの生活をするには出来る、と思う。

『ただ、妖怪と一口に言ってもいろいろな奴がおるぞ？夜行性の奴もおるし人を喰う奴もいる。私みたいに異能力を持つ奴もおるしその能力も様々じゃ。』

ほう、神じゃ無くてモトンデモパワーを使える奴もいるのか。これは良いことを聞いた。

こうやって昼間に動けてるってことはどうやら夜行性でもないみたいだし。

「俺はなんかの能力持ちなのか？」

『……さてな。能力の素質を持ちはしても切っ掛けが無いために開花しない者もいるらしい。』

「四季はどうやって能力を持ったんだ？」

『……教えるも良いが、あまりためにならんぞ？』

まあ参考程度に聞いておきたい。

『私は、最初妖精として生を受けたのじゃ。』

「…………それが今となつては神に？」

某竜を探求するゲームで言うならスライムから大魔王並の出世じゃん。

『妖精とは自然に関する能力を持つ。私は大気温を操る能力を使えてな。まあ大抵の妖精は悪戯好きで、微々たる存在なんだが、私は少々変わっていたな。』

「…………と言つと？」

『人間が好きで、自分の能力を人間のために使っていたのだ。』

農作物が育たない冷夏に気温を上げたり、冬、家のなかで凍えない様に気温を調節をしたりな。

そうして過ごし、人間の喜ぶ顔を見るのが好きだった。

そして長生きするうちに能力も強くなり、徐々に信仰という者を受けける様になつたきた。

先祖代々恩恵を受けてきた者に畏敬の念を抱くのはある意味当然ではあるが、今までのように対等に接されることが無くなり、寂しくなつたのも事実じゃな。

結果として凶らずも信仰を集め続けた私は神格化し、祭壇も作られ祀られるようになったのだ』

それがあの洞窟のやつか。……………この神、自分の祭壇を焦げさせてボロボロにしちゃいましたけど、それで良いのか？

『この地の名、「福井」も由縁は私じゃな。

「福の神」としても祀られていた私が居る、という意味で「福居」と呼ばれ始め、長い年月を経て「福井」となったのだ。』

……………なんか壮大な話だな。もしかしてこの神超凄いやつなのか？

「…因みに今何歳なんだ？」

『……………この様なつら若き乙女に年を聞くなど、不躰じゃぞ？』

柄でもないことを言う四季。多分今頃背中でニヤニヤしているに違いない。

「……………見た目は幼女でも、つら若きなんていう年でも無いんだろ？」  
『……………失礼な』

スパァン！と頭を叩かれる。

「……………チツ……………失礼致しました。」

『今舌打ちしたか「してません」……………そういうことになっておいてやる。』

聞こえてました。焦る俺。

『段々扱いが酷くなってないかの？……………まあ良いが。私は425歳じゃ』

結局言っんかい。

まあこの幼神（見た目だけ）の年は置いて、これからどうするのかを考えたい。

今の話を聞くに妖怪ともなると寿命が人間とは桁違いなわけだ。ということは必然的に成長スピードも遅いわけで。

周りからの反応を考えるに人間社会で過ごすのは難しそうだが…。

まあしばらく様子見だな。異能力が発現してから考えれば良いか。

事無かれ主義というかなんというかなあ、俺は。

『そろそろ村に着くぞ。……………あそこじゃ』

四季の言葉に遠くの方を見詰めると、小さな集落が。

……どこの田舎だ？ここまで開発されていないのは珍しいな。

まあ、村に着いてから考えをまとめることに。

~~~~~

現実には小説より奇なり、とは良くいったものだと思う。
皆もあるのではないか。

自分にいきなり未知の力が目覚めたり、朝起きたら腹筋が17つに
割れてたり。

……ないか。

まあそれは良いとして、今の俺は混乱の極みに陥っている。

Q・それは何故か？

A・タイムスリップしたからだ！（ばばーん）

村に入った俺を待つて居たのは、どうみても現代人には見えない方々だった。

まず服装が、麻のようなもので出来ている。

藁葺きの家が立ってはいるが、定住はしていないようだ。

畑が無くあるのはゴミ捨て場、所謂貝塚という様なものだ。

隣にいる四季（勿論村に入る前に背中から降りた。神様を背負ったまま入る訳には行かんだろう。）に訊ねてみる。

「……………ここは福井なのか？」

現代の福井では無いことは確かだが。

『ああ、福井で間違いない。因みにこの村の気温は私が調整しておるぞ』

………そうですか。

現代日本でないことは判った。壮大なドッキリでなければな。まあ村の様子を見るにそれはないだろう。

田畑が無いことからして、縄文時代かそれ以前の石器時代だと思う。

ならば何故四季に日本語が通じるのか？

これが石器 or 縄文時代ならまだ漢字も伝わっていない筈。外来語は判らないようだが、現代日本語を理解しているのは確かだ。

これも神の力なのだろうか。

そう思って四季を眺めていると、四季が村人に近付いていき話しかけた。

『久しいのお、長老』

………結構フランクだな。ていうか村人も日本語判るのか。

「これはこれは四季様！本日はどういった御用件で御座いませうか？」

普通に日本語を話す長老。人の良さそうな優しい笑みを浮かべる。老人だ。

……日本語の謎は深まるばかりだ。
深く考えたら負けなのかもな。

『いや、外来の者が現れたのでな。この村に連れてきたのだが』

「その方が外来の方で？少々お待ち下さい。……おーいお前等！！
四季様と外来の方がお目見えになったぞ！！挨拶しに来んか！」

『良い良い！そのまま作業を続けて良いぞ！』
四季も慌てたように叫ぶ。

……なんか気を使うなあ。

「いえいえ、そういう訳には参りません！久方ぶりにお見えになったのですから！」
意気込む長老。

次第に周りに村人が集まってくる。

……結構いるな。三桁近く居るんじゃないか？

「良くいらっしやいました四季様！どうぞお寛ぎになってください
！」
「お久しぶりです四季様！お元気そうで何よりです！」

盛大な歓迎を受け、四季はちょっと困ったような顔をしていた。対等な関係を望む四季には何とも言えないのだろう。自分を敬ってくれる人間達の厚意を無下にすることはできない。

一通り歓迎を受けたところで、長老が言う。

「……それでは四季様。外来の方。私の家にお越し下さい。歓迎致しますよござ。」

いやもう十分くらい受けたんですけど。しかし断るのも何なので甘えさせてもらうことに。

「こちらです。どうぞ。」

そう言って歩き出す長き。どう見ても年寄りなのに足腰強いなオイ。

~~~~~

家、と言っても他のより少しだけ大きいものだった。

まあこの時代ならしょうがない。

「それで、どのような御用件でしょうか？」

部屋の中には、様々な種類の土器やベッドにしているらしき藁が並んでいた。

………縄目の付いた土器ということは、縄文時代か。

『先も言った通り、この外来人を紹介しにきたのだが……。』

「でしたら、数日お待ち頂ければ新しく小屋を建てさせて頂きますが………それまでは我が家の客室でよろしいでしょうか？」

………長老めっちゃいい人やん！

激しく尊敬します。

『それで良いか？』

こっちを向いて訊ねてくる四季。

「勿論です。これ以上ないくらい有り難いです。」

これは本音だ。

タイムスリップをした以上知り合いが居るわけもなし、この提案がなければ野垂れ死んでもおかしくない。

現代日本で一般人してた俺がサバイバルを出来るとも思えないしな。

「いえいえ、四季様とそのお連れの方ですからそれくらい当然です。助け合いは大事ですしね。」

では、客室にご案内させていただきます。」

微笑みながら席を立つ長老。

いい人過ぎるぜ、惚れていいかな？

長老の優しさに感動していると、そこに四季の声が。

『いや、私はこれで帰るからこの者一人だけで良いぞ。私が居ると気を使わせてしまうだろう？』

その言葉を聞いて途端に長老が反応する。

「いえいえ、四季様！」

折角お越しになられたのですからゆっくりして行って下さい！

村の者は皆、貴女様を慕っているのですから遠慮なさる必要はございませんよ？」

『いや、しかしじゃな……』

「どうかお泊まりになって下さい！」

お連れの方も来なさったばかりで不安でしょうし、こちらから願っていたします」

懸命に訴えかける長老さん。

……これは俺ばっかり黙っている訳にはいかないな。俺のために言ってくれてもいるわけだし。

「俺からも頼むよ、四季。まだいろいろ話したいこともあるし」

『……むう、そこまで言うなら……少しくらいは泊まるかの。』  
結局は四季が折れた形に収まった。

「有り難うございます、四季様！」

四季がそう言うと、笑顔を浮かべる長老。

「では、付いてきて下さい。」

長老に促され、3人で客室へ。

~~~~~

客室に着くと、長老は丁寧に頭を下げて出ていった。

「今日の夜は歓迎する宴を開きますので、その用意をしてきます」
だそうだ。

……………恐れ入ります。

3・一路、村へ。(後書き)

以上、三話でした！

いやあやっぱり感想を貰うと嬉しくなりますねえ。

今までは読む専だったので、他の作者様の後書きとかに『感想が力になります！』ということを書かれているのを読んで、あまり理解出来なかったのですが、やはり自分の文章を人に評価してもらう、というのは嬉しいことですねえ。

身を持って体感しました！

これからも精進しますので、ピシバシと意見を貰えると喜びます。

ではこれで。

長々と失礼しました！

(^^^)

4・神懸かった

長老が去った後、気になったことを四季に訊いてみた。

「人間には異能力を持つてる人は居るのか？」

いたら人外だが。

「……人間には居ないな。基本的に異能力は人でないものしか素質を持たん。」

私が知っている範囲の話だが。」

やはり人外という言葉はなるべくしてなった者にしか送られない名誉な称号のようだ。
良かったな、人外！

……そういえば、俺も、人外だった……！

衝撃の事実ッ！この事実には、全俺が震撼したッ……！

……いや、別に良いんだけどね。

』とこころで……今さらだが、お前の名は何と言っただ？』
部屋にある土器を眺めながら言う四季。

「ああ……そういえば言っただけだったな。」

名乗っていなかったことに気付く。

「俺の名前は……」

1 ・ ジョセフィーヌ山田。

2 ・ ライオネル山田。

3 ・ エドモンド山田。

……となると、何と名乗るか。
捨てたは良いものの、変な名前を付けたら後悔するだろう。
エドモンドとか。

となると、名前だけは残そう。

呼ばれ慣れた名前の方が良いというのは確かにある。

そつだ、名字を変えよう。

「と言ついで、俺に名字を付けてくれ。」

お願いします。

『……………はっ。』

神様に は？ って言われたんだけど俺。

『何がどうお前の頭のなかで起きれば、その言葉が出てくるのじゃあ！？』

「いやー、波動拳なんていう全然『拳』じゃないものを飛ばしてくる奴等と闘う勇者な力士が出てきてさあ。」

『……………とにかく、名字を付ければ良いんじゃない？』

あっ、スルーされた。

……………俺の扱いに慣れて来たなこの幼女。

「頼むよ。なんかご利益ありそうだし」

さあ、神がかつたネーミングセンスに期待だ！

『……………むう。』

腕を組み、目を瞑って考える四季。

……………いちいち可愛いな、オイ。

……別にロリコンじゃない、信じてくれ。

なんか小動物的な可愛さってあるじゃん、アレだよアレ。
つまり俺はその可愛らしさにグツツときているだけであって、けし
て彼女を異性として可愛いとかそんな感じで

『1人で何をぶつぶつと呟いておるのじゃ?』

おお。声に出てた。

『……お前は何か能力を持っていないのか?
能力から取って名字にする、というのも多いぞ。
私の様に。』

確かに『四季を操る』から取って『四季』せいたひだよな。

「……能力つつつてもなあ。なんか特段変わった感じはしないし。
判らんな」

『……むっ。』

能力とは切っ掛けさえあれば後は自然と開花するもの。何か自分の
したいことを想像してみい。
素質があれば現れる筈じゃ。』

「…したいこと、か」

自分の今の願望を考える。

……比較的簡単に見つかった。

「誰かさんに燃やされかけた服を綺麗にしたいです！」

そう、俺の服は穴が空いたままだったのだッ！

今空かされた衝撃の真実ッ！…この真実に全俺が驚愕し！震撼し！
阿鼻叫喚の地獄絵図と化し……あっもう流石に鬱陶しい？

ごめんもうやらない。

『…っ。』

……その事については謝ったであろうっ！…？』

四季の弁解する姿が俺の隠れたS心に火をつける。

「えっそうだったけ？
記憶に無いなあ。」

『……………ぐっ。』

……………すまんかった。

『

「え、なんて？」

『きっ……………貴様はあゝ!!..!』

両手を構える四季。

やりすぎたっ。

「じゅめんじゅめん、余りにも四季が可愛かったからついつい」
咄嗟に頭を撫でる。

『……今度は許さんからな。』
膨れっ面で言う四季さん。
そんなところも可愛いです。

「……ていつか両手を構えなくても能力使えるんじゃないのか？
ほら、おぶったときに手を肩に掛けたまま使ったじゃん」

村に来る途中だ。

余りに寒かったから、気温を上げてもらったのだ。

『ああ、使おうと思えば使えるが一定の型を取った方が精度があがるのじゃ』

成る程、プロ野球選手がバッターボックスに入って決まった動きをするあれか。

ってことは何か構えを取れば能力が出るんじゃない？

安易な考えではあるが試してみる価値アリだな。

「……………しよーりゅーけん！」

構えるのは某ファイターの代名詞とも言える技。
右手を上にも構え、腰をグツと落とし、一気に相手の顎目掛け跳躍するっ！

いや、痺れるねー。

『……………お前の行動はたまに読めんのぉ』

よく言われます。

一発昇 拳をかましたところで真面目にすることに。

着席してさてどうしようかと考える。

まずイメージが大事だな。服をどのようにしたいのか。

よし、服を生成する感じでいこう。

おおかたのイメージを掴んだところで服をしてみる。

………あれ、直ってる。

………えっ？

あ、直ってる。

「えええええっ!？」

俺、驚愕。

もしかしてさっきの 龍拳で発動しちゃった!？

これから能力を使う度に昇龍 しないと駄目なのか!？

…自分でやっというてなんだが恥ずかしいではないか。

『何だ、すんなりと発動したではないか。「しょーりゅーけん」とやらで』

「やめて、なんかいたたまれなくなる」

俺の心境を知ってか知らずか昇 拳に触れてくる四季。

『今の自分の能力を感じるのじゃ。自然と頭に浮かんでくる筈じゃぞ』

四季のありがたい助言を受け、意識を集中してみる。

すると暫くして唐突にこんな言葉が浮かんで来た。

『分子を操る程度の能力』

「……分子を操る程度の能力、か」

あんまり良く判らんなあ。

『何か判ったのか？』

尋ねてくる四季。

「ああ……『分子を操る程度の能力』だそうだ」

『……………？』

首を傾げる四季。

そつだよなあ、まだそつという概念は発見されてないもんなあ。

「……まあ要するに小さな物質を操ることが出来るってことだ。」

『……そつか、ならばお前の名字は……「九条くじょう」でどうだ？』

自信有り気という幼女。

「……九条？……何故九条なんだ？」

どこにかかっているのだろうか。

『……すまん、正直思いつかんかった』

「……マジでっ。」

適当なんだけど。

しかし九条か。

へ々に自分で付けて失敗するよりも神である四季が付けたこの名前の方が良いのではないか？

……そうだな、そうしよう。

「……そうだな、九条。

九条と名乗ることにしよう。」

『……本当にそれで良いのか？』

「ああ、四季からもらった名字を大切にするよ。」

『……では、下の名は何だ？』

下の名は現代の親から貰った名だ。

「……下の名は、優ユウ。今この時より、俺の名は九条 優ユウだ。」

九条 優。

これからの人生（妖生？）で名乗る名だ。

『……九条 優か。』

ふっ、お前には勿体無い程立派な名じゃな。』
そう言って笑う四季。

「うっせ、自画自賛しやがって」
俺も自然と笑みが零れる。

『……私は四季 舞。』
四季を操る程度の能力を持つ。』

「……俺は九条 優。』
分子を操る程度の能力を持つ。』

「『これから、宜しく頼む。……ふっ、ははっ』」

お互いに笑い合う。

改めて自己紹介をし、より相手に近付けた様な気がした。

これからも、四季とは長い付き合いになりそうだ。

……何故だかそう思う自分がいた。

4・神懸かった (後書き)

以上、四話目でした！(見りゃわかるってーの)

今回、やっと名前だけですが主人公の能力を出せました。
あと本人の名前も。

……スミマセン適当に付けちゃって。
難しいっす。

『分子』とかいじりにくいし。

次は能力を明らかにしていく予定です。
あくまでも予定ですが。

以上、あとがきでした。

5・村の長老がこんなに黒いわけがない

拝啓、お父さん、お母さん。

元気ですか？

僕は元気です。

……ただし縄文時代までタイムスリップしてませんが、今日1日は、多くの事を経験した1日でした。

目覚めたら雪の中にいたり、神に会ったり、その神に蒸発させかけられたり。

本当にいろんなことがありました。

……そして、今もあっています。

俺の隣には……一糸纏わぬ姿、裸一貫でいる神がいます。

俺はどうすればいいのでしょうか？

この神、フランク過ぎるんですけど。

『何を先程からぶつぶつと。それでも男か？』

「…男だからこそこうなっとなんじゃ」

『…何か言ったかのう？』
ギロツ。

「イエ、ナンデモアリマセン」

……男とは、難儀な生き物だと、痛感しました。

~~~~~

お互いに自己紹介をしてから、暫く他愛もない話をしていると、長老が呼びに来た。

「お二方。宴の準備ができましたのでどうぞお越し下さい」

『分かった』

四季はある程度慣れてきているようだが、俺は未だ慣れない。だっつてそうだろう？

自分の祖父くらい歳の年齢の人から敬語を使われてるんだぜ？慣れるほうがスゲーよ。

「ああ、はい、今行きます」

そんな返事を返しながらか長老のもとへ。

どんな料理が出てくるんだろうか、楽しみだ。

……ゲテモノが出てきたらどうしよう。縄文時代の食文化に果たして馴染めるのか。

…………無理クサいな。

~~~~~

間もなく陽が沈む時刻。

長老の家の前には多くの人が集っていた。

俺達が小屋から出てくると自然と沸き起こる歓声。

皆本当に嬉しそうな顔をしている。

これだけでもこの村でどれだけ四季が慕われているのか判るだろう。

そこへ長老が一步前に歩み出、それに気付いた村人達が少しずつ静かになっていく。

「……………えー、おほん。」

皆、今日宴を開いたのは他でもない、久しぶりに四季様がこの村にお越しになって下さったからじゃ！

今日は日常の雑事を全て忘れ、存分に呑もうではないか！

……………では、乾杯！！」

『かんぱーい！！』

皆が一斉に杯を傾ける。

……………この頃から乾杯する風習があんのか。

「さあさあ、四季様もお連れの方も、存分に呑んで食べて行って下さい。

まだまだ料理は用意してありますので」

そう長老に促され、俺と四季は村人の輪へ加わる。

料理の皿 これも土器だが を見てみると、そこには意外と多種多様な料理が。

牛蒡や豆などを和えた菜物に栗を蒸して塩をかけた物。更には魚の刺身や酒らしき液体まである。

……………縄文料理、舐めてました。

ヤバイ、めっさ旨そうなんですけど。

これは恐らく初めて縄文料理を食べる現代人になるであろう俺がしつかり味をレポートせねば。

箸 これは木で作られていた を持って一口運んでみる。

「……………つまー！！」

とても美味しゅうございます。

……………えっ、判りにくい？もっと細やかに味を伝える？

……………。

「味の、宝石箱やーっ！」

一昔前に流行ったネタしか出てこなかった。

……………いや、今は縄文だから遙か未来のネタか？

おおう、人類には早すぎる。

「お口に合われたようで何よりですね。外来の方」
隣にいた子連れのおさんが話しかけてくる。

「ええ、とても美味しくて麻呂ってしまいました」

「……まろ、ですか？」

「いや、気にしないで下さい。
未来ネタですから。」

「ところで外来の方、お名前は何と仰るのですか？」
ご婦人が訊ねてくる。
この人も結構美人であり、気だての良さそうな感じだ。

「ああ、俺は…九条 優と言います。」

昨日名付けられました。

「あら、素敵なお名前ですわ。」

上品に微笑む奥様。
絵になってるね。

「さあさ、お呑みになってください、優様。」

「有り難うございます。」

……でも優様なんて呼ばずに、普通に呼んで下さって構わないです

よ？

そんなたいした身分じゃないですし」

どちらかと言うと目の前のご婦人の方が身分が高いだろう。細かな所作から気品が滲み出ている。

おっこの酒旨いな。果実酒だろうか。

っていつか高校生なんだけど俺。いや、『だった』か。

……皆は二十歳になるか、妖怪化してから飲酒しようね？

お薦めするのは前者だが。

「いえいえ、四季様の良き人となるお方ですから、恐れ多いですわ。ご遠慮なさらずとも結構ですよ？」

ええー、いつの間にそんな話になったんですか…？

「……俺がですか？」

四季の？

「いやーそれはないと思いますけどねえ」

「だって相手は神だし。
幼女だけだ。」

「あら、そうなのですか？」

「驚いたように聞くご婦人。」

「でも、優様と話しているときの四季様の表情、あんなに自然に笑っていらっしやるのは初めて見ましたわ。てっきり良き人であるのかと……」

「いやいや、そんなことはないです。」

「そうですねえ、まあ可愛いのは確かですけど」

「四季を可愛くないと思うのはまず地球上にはいないだろう。
宇宙人なら美的感覚の違いで判らないかもしれないが。」

『何の話をしておるのじゃ、ユウ？』

と、そこへご本人登場。

「ああ、今このご婦人とお前の話をしてたところ。俺が、お前の伴侶になるって思ってたらしいぞ」

『……………むう。』

いきなり考えこむ四季。

「……………どうした？」

なんか不味いことを言ったのだろうか？

『いや、何でもないが……
平然と伝えられたのでな、反応に困ったのじゃ』

……………？良くわからないが。

「……………お久しぶりです、四季様。お元気そうで何よりですわ」

今まで黙っていたご婦人が四季に話かける。

『……お？そなた、もしや弥生やよひか！？』

「覚えていて頂き光栄ですわ、四季様。」

『良い良い、昔のように普通に話して構わんぞ。』

「いえ、四季様は村の神であるお方。昔の幼い時分の私のようにするのは恐れ多いですわ」

そういつて頭を下げる弥生さん。

「……知り合いだったのか？」

『ああ、弥生が小さいころな、共に遊んだのじゃ』

「はい、私が幼い頃は一緒に遊んだり働いたりしていました。何年か前に四季様が村をお出になられてから、長い間姿がお見えにならなかつたので心配しておりましたが……」

四季は村から出てたのか。何かしら事情があったのだろう。

『……すまん。心配をかけた』

「いえ、ご無事で何よりですわ。」

その後も様々な人が四季のもとにやってきて挨拶をしていった。

中には四季に酒を薦める者も多く、四季も、やはり人間が好きなのかそれに笑顔で答えていった。

そんなこんなで、夜。

宴が終わり、静けさが辺りを支配する。
皆、自分の小屋に戻り、次の朝が来るのを待つ。
これが彼らの暮らし方なのである。

「四季様、九条様、お疲れ様でした。もう夜も更けますので部屋にお戻りになってください」

長老が気を使ってくれる。

「有り難うございます。……でも九条様じゃなくて普通に呼んでもらって結構ですよ？」

「いえ、九条様と呼ばせて頂きます」

……またも断られた。

「……あのー、四季と俺は別に恋人でもなんでもないですからね？
なあ、四季？」

もしやとは思うが誤解されているのか？

そう思つて四季の方を見る。

『……ああ、そうじゃな』

少し間を置いて答える四季。

……酒を呑んで酔っ払ってんのか？

「……酔ったのか？」

『……いや、……大丈夫じゃ。』

千鳥足で歩きながらそんなことをいう。

……いやもう酔ってるだろそれ。

「……はいはい、ちっとは甘えても良いんだぞ？」

四季の背中と膝に手を回し抱え上げる。

所謂お姫様抱っこだ。

『……なっ!?!?』

「酔っ払いは暴れないでねー」

『……むっ』

転んで怪我でもしたら大変なことになるだろう。
いや、四季は転んでも何ともないだろうが村の人は『四季を転ばせる程酔わせた』という自責の念にかられるだろう。

それは誰も望まない筈だ。

……暫くすると腕の中から寝息が聞こえてきた。

改めて見てみる四季の寝顔。普段の言葉遣いからはかけ離れた美しく、幼さの残る顔だ。

女の子らしい甘い香りと酒の香りが俺の鼻をくすぐる。

……酒臭いとも言っな。

「……お二人は、本当に仲がよろしいんですね。」

本人の前で言ったらひっぱたかれそうな思考をしていると、長老が静かに話を始める。

「……まあ今日会ったばかりなんですけどね。」

仲が良いというよりはお互いに興味を持っている、という表現の方が正しいだろう。

「……そういえば、久し振りに四季が村に来たって言っていましたけど、何で村から出てたんですか？」

昼間、弥生さんが言っていたこと。

村で神として崇められてるなら何故あんな洞窟にいたのか。

「……それは話すと長くなるのですが。」

長老の表情が少し曇る。

……聞いては不味いことだったか。

「いや、話したく無いことなら無理矢理聞きはしません。少し気になっただけなんで」

「……いえ、お教えします。九条様にも知って頂かねばならないことでもあるので」

……何か俺が関係あるのだろうか。

「……私は、幼い頃から四季様をずっと見て来ました」

月明かりの下、長老が静かに語り始める。

「四季様はとてもお優しい方で、村の皆を助けて下さいました。自らの能力がとても強大で、その気があれば人間を支配することも根絶やしにすることも出来ることを知っておられました。」

……知っていて尚、私達との共存を望み、私達のために能力を使って生きて来られたのです。

村の者が四季様を祀り始めたとき、余り快く思っていなかったのも存じ上げております。

しかし…四季様は神であるお方。

人間とは何もかもが違いました。

何より大きかったのが寿命が違ったこと。四季様は多くの親しかった人間との別れを経験し、その度に深い悲しみを背負われたのです。

……少しずつ、四季様は村を離れて祭壇にいらっしゃることが多くなりました。

いえ、そうせざるを得なかったのです。

私達がそうなるように振舞った。

それから、四季様は以前の様な自然な笑顔を浮かべることがなくなりました。

しかし、私達は寿命があり、別れを避ける事は出来ません。

ならば、今のままの関係を続けた方が良いのではないか。

……心苦しいですが、仕方のないことなのです」

静かに、そして心底悔しそうに話す長老。

本当に四季を敬い、また自分のことの様に考えているのだろう。

「……ですから、あなた様を連れて村に帰って来たとき私達は本当は少し警戒していたのです。」

「……俺の存在をですか」

「……はい。」

四季様と共にいるには人間では役者不足。
朗らかに笑っておられる四季様を見て、また失ったときの大きな悲しみを背負われるのではないか、と危惧しました。」

「……そうだったんですか」

そんな風に思われてたなんて判らなかつたな。

「しかし、私達の中には四季様に幸せになつてもらいたいという気持ちがあります。」

……決して村の者では成せない役目を外来人である九条様に引き受

けて頂ければ、と考えたのです」

こちらを向いて話す長老の頬に流れる一筋の涙。
身を切られる思いなのだろう、僅かに肩を震わせている。

「……ですから、九条様。四季様と添い遂げてくれとは言いません。
彼女の、とてもお優しい四季様の心を救って欲しいのです。
どうかお願いします。」

俺に頭を下げてくる。

……いきなり現れて、しかも村の神である四季を敬うような素振り
も見せない俺に頭を下げるのは勇気のいることだっただろう。

長老の、村の皆の想いをしっかりと感じた。

「……長老。」

誠意には誠意で答える。

長老や村の皆、さらに四季を助けるとまでは行かないが、支えにな
れると良いな、と思いつつ。

言葉を紡いで行く。

「……………俺は、人ではないんです。
…俺は、妖怪なんです。」

いつかは言わなければならなかったであろう事。
村の皆とは決定的に違う、という事実は長老の心を傷付ける。

しかし、それは長老の心を救う言葉でもあった。

「……………そうだったのですか」

「…疑いも驚きもしないんですね」

いくら時代が違ってても人間が妖怪を恐れない、ということはないだ
ろつ。

「…外来の方は皆、不思議な方だと昔から言われてきたので。」

ああ、何十年かに一度は来るらしいな。

「あなたが妖怪なら、私達の望みも達されます。」

……………九条様、どうかこれからも四季様をよろしくお願いします」

再び頭を下げる長老。

「……………はい」

村の皆の想いを受け取り、何故俺がこの時代に呼び出されたのか判ったような気がした。

タイムスリップも、悪くないかもな。

~~~~~

客室に着き、四季を布団に寝かせると、長老は自分の部屋に戻っていった。

……さて、今からどうするか。

妖怪になった体は思いの外酒には強いらしく、それほど酔いが回っている訳でもない。

うーん、これからのことを考えるにやはり重要なのは自分の能力について把握することだろう。

そう考えた俺は、部屋の四季が寝ている布団とは反対側の方に座り  
いろいろ試して見ることにした。

まず、俺の『分子を操る程度の能力』。

これはまあ名前からして現代では知られているであろう『分子』を  
操れる、ということなのだろう。

そして、初めて能力を使った時に起きた現象。

服が直った、ということは『分子を操った結果』として考えるなら。  
焦げた服を直した、というのは、燃焼して酸化した布から酸素を引  
つpegす、が妥当だろう。

これの特徴は、燃焼して空気中に分散した布をまた集めて直す、と  
いう所謂『不可逆反応』を可能にしている点だ。

自由自在に分子を操れるなら、分解も結合も自在なはず。

……実験してみるか。

~~~~~

「さあ、という訳でやって参りました！」

外です！」

です。

少しばかり村の外に出てきました。

途中、見張りの人に止められたが、少し散歩をして来ると言うこと
で出して貰えた。

早速、試して見ることに。

まず、能力を掴むにあたって手頃なのは恐らく水だろう。

そこら辺にいっぱいあるし。

昼に四季と雪を融かしながら来た辺りまで戻る。

まだぬかるむほどには水が残っており、良い実験が出来そうだ。

さて、まずは手に水を少々取り意識を集中する。

水を酸素分子と水素分子に分解。

イメージするのは良く教科書に乗っているようなモデル図。

酸素と水素を切り離す。

…暫くすると、感覚的に分解されていくのが判る。

更に、今此処に水素分子と酸素分子が存在していることも分かった。

……まあ例えるなら気体検知器のようなものだろう。

ならば分子自体を移動させることは出来るのか。

そう思つて分子を移動させようと試みる。

水を分解して出来た酸素分子と水素分子を少しずつ前に押し出す。

……なかなか難しいな。

しばらくそつやっていると、分子が少しずつではあるが移動するのが判る。

球形を保たせながら進ませていく。

ある程度離れたところで酸素と結合させ水分子に。

……水素は下手を打って火花でも散らせば途端に大爆発しかねないからな、今日はやめておこう。

村ごと吹っ飛んだら洒落にならんし。

能力について判ったのは、分解・結合は自在に出来るであろうこと、分子自体の移動もゆっくりだが出来ること、更にその形もある程度決められるようだ。

例えば球型に分子を集めようと思えば不可能ではない。

しかし、やはりまだ慣れていないのか不安定だったからこれからも訓練していく必要があるだろう。

もしかしたら四季の様に能力が昇華するかもしれない。

また、まだ試していないから判らないが、金属のように分子ではない物もあやつれるのだろうか。

……携帯で試すことも可能だが、なるべくならそれはしたくない。
服以外の唯一の『現代』の名残だし。

……まあ、能力についてはこのくらいだろう。
妖怪の一生はとても長いらしいし、まだまだ時間はあるはず。

「……ああ、月が綺麗だなあ」

ふとそんなことを思う。

夜空に浮かぶ月。

良く小説で使われる言い回しだ。よく『幻想的』などと形容される。

「……現代じゃ、こんなに月を眺めるなんてなかったもんなあ」

これも、空気の澄んだ時代に来たからだろうか。
月が美しく、大きい。

今頃、現代の皆はどうしているのだろうか。

そもそも、俺はどういう扱いになっているのか？
現代から消えているのか、はたまた別の俺がいて、平行世界、俗に言うパラレルワールドになっているかもしれない。

……まあ今頃考えてもどうしようもないな。

現代の事は割りきって、これからを懸命に生きていこう。

決意を新たに、長老の家へと向かう。

これから一緒に過ごすことになるであろう、四季が待つ場所へ。

~~~~~

村を歩いていると、向こうから長老が急ぎ足でやってきた。

…何かあったのだろうか。

「あつ、お帰りなさいませ九条様！  
大変です、四季様が！」

珍しく長老が平静を失っている。

「四季がどうかしたんですか!？」

「とにかく家に来てください!！」

そう言つて踵を返すように家へと向かう長老。

……やはり四季に何か大変なことがおきたらしい。

「直ぐに行きます!！」

駆け足で長老の後をついていく。

急性アルコール中毒でも起きたか！？  
……神がアル中なんか笑えんぞ。

長老の家に着き、急いで客室へと向かう。

「四季様は客室におられます！」

長老の声に焦りを感じる。  
上手く対処出来るといいが、当然のように詳しい医療知識を持って  
いるはずもなく。

……ええい、兎に角行くしかない！

現代人である分、アドバンテージは僅かだがある。

それにかけるしかない！

部屋に近付くにつれて四季の音が聞こえ始めた。

……………悲壮な声で泣き叫んでいる。

「待ってる、四季！  
今行くからな！」

以前より遥かに速くなった足で客室にたどり着き、扉を開ける。

「四季！大丈夫……………か？」

……………は？」

扉の先に見えたのは。

寒風が吹きすさび、氷漬けになった部屋と。

『ひぐっ……じゅっ……ユウ……どこに行ったのじゃあ……え  
ぐっ……ユウ……』

駄々っ子の様に泣く四季だった。

「……えーと、これはどういつ状況ですか？」

追い付いて来た長老に聞いてみる。

「四季様は、お目覚めになったとき九条様が部屋にいないと知り、寂しさで泣いてしまわれたのです!」

ゆう は あきれて しまった !

ゆう の せいしんに 50000 ポイント の  
ダメージ!

ゆう は おうちに かえりたくなつた !

……いやいや、落ち着け俺。

余りにしょうもない事態に肩透かしを喰らう。

いや、部屋自体は大惨事なんだけど。

……寂しくて泣くって、いくら酒が回ってるからって神のすること

じゃないだろ？

あれか？見た目に合わせて精神も幼児退行したのか？

… 正真正銘の幼女やん。

「九条様！このままでは家が大変なことになります！どうか四季様を止めてくだされ！」

そうだった。

ここまでお世話になった長老に恩を仇で返す訳には行かない。

ああなった四季を止めるのは骨が折れそうだが、やらねばなるまい。

気合いを込めて部屋に足を踏み入れる。

……………さむっ！

……………どっからでもかかってきんしゃい！！

『ああ！ユウだ〜！！』

ええー、目標、捕捉されました。

走り寄ってくる四季。

……あれ、意外とすんなりおさまりそうだ。

『寂しかったのじゃあ〜！！』

九条のここ、空いてますよ。

四季を受け止めるために腕を広げる。

泣き上戸なんて、可愛らしい一面もあるじゃないか。  
さあ俺の胸に、飛び込んでおいで

《ドツ！！！！ゴオオオ……………ン！！！！！！》

飛び込んで来る四季。

……は良いんだけどこいつが神なのを忘れてた

「ぐはっ……！」

体に走る凄まじい衝撃。

廊下までぶっ飛びやっとなまる。

『ユウのばかあ〜！』

黙ってどっかに行くなんてひどいのじゃ！』

胸をポカポカと叩く正真正銘の幼女。

……あらやだ可愛い。

じゃなくて。

「俺が悪かったよ。」

よしよし、もうどこにも行かないから泣き止んでくれ」

頭を撫でながら出来るだけ優しい声音で。

『……本当、か？』

「ああ、本当だ」

『……良かった』

すると、四季の動きが止まる。

「……おい、どうした？  
どこか調子悪いのか!？」

心配になって四季の顔を覗きこむ。

『……すう、すう……』

「……って、またかい……」

寝てやがる。

ホント、忙しい奴だな。

四季を抱き上げて布団に寝かせる。

……ていつかまだ部屋凍ってんだけど、どーすんのこれ？

「九条様、有り難うございました。

たった1日でこれだけ親密になれるとは、いやはや、流石でございますな。」

「いや、親密になるといっつか、なつかれるといっつか……」

「ははっ、そのようすな」

……部屋が凍ってるのに余裕の長老。

やはりこういうのが長老たるところなのだろう。

「……この凍った部屋はどうするんですか？」

「ああ、それは大丈夫です。そろそろお目覚めになるはずですので」

「……そうなんすか？」

『う……う……』

見計らったかのように四季がむくりと起きる。

『……ふう、よく寝たのお』

目を擦りながら呟く四季。

『……なんじゃこの部屋は。寒いではないか』

そう言って四季が手を掲げる。  
するとみるみる氷が融けて常温に戻っていく。

……便利すぎるだろその能力。

ていつかさっきの記憶ないのかよ。

「このように四季様は直ぐに目を覚まされますので、泣くのが収まれば大丈夫なのです」

「……もしかして前にもこういうのがあったんですか？」

「ここまでではないんですけどね。以前にも酔った時に何回かありました。」

「……ここまでひどくなるとは思わず、大分焦りましたが。」

「って確信犯なんですか!？」

こうなるのが判ってたなら酒を飲ませなければ良いじゃん？

するとこんな長老の言葉。

「……可愛いじゃないですか」

「……………ええー」

真・長老、爆誕。

今までの非の打ち所のない素晴らしい長老は何処へっ!?

はい、今回のサブタイの場所はここね。

テストに出るよ、ニヒ。

『……何の話をしておるのじゃ?』

四季様も完全復活。

「……酔いは抜けたのか?」

『当たり前じゃ。神をなんだと思つておる』

出来れば酔わない方向に神の凄さを發揮して欲しかった!

「……神は神でも幼女だけだな」

『何か言ったかのう、ユウ?』

……聞こえましたか。

幼女が凄みのある笑顔を向けてくる。

いや、矛盾してるから。

「いや、何でもない。

……ところで長老、どこかに水が湧いてるところありませんか？  
汗をかいたので流したいんですけど」

いくら寒いといえ、初めて能力を試したために集中力を使い汗をかいた。

「ああ、それでしたらこの近くに泉がありますが………水浴びには  
少しばかり寒すぎるかと」

ああ、確かにこの気温で服を脱いだりしたら凍えるだろう。

………どうしたものか。

そう思って部屋を見回すと

いるじゃん。丁度良いのが。

「というわけで、案内を頼む。場所も判るだろ？」

四季、君に決めたっ！

この村の神である四季なら泉の場所も知っているはずだし、何より温度を操れるから寒くない。

「石二鳥とはまさにこのことよのお！

一挙両得でも可。

『何が「という訳」なのかは知らんが、まあ………ついて行ってやらんでもない』

「よし、行こう！早速行こう！」

四季を小脇に抱えて走り出す。

待ってるよ天然露天温泉！

~~~~~

『その道を右じゃ』

月明かりの中、村の裏にあった山を四季の案内で進んでいく。
因みに今はまた背負ってます。

『そこを左に曲がって上じゃ』

「はいはい、左で……上、と。……上？」

『上じゃ』

眼前に広がるのは2メートルくらいの小さな崖。

……妖怪の脚力だったら跳べるか？
しかし四季を背負ってるため体勢が整え辛い。

「そうか。じゃあ四季降りてくれ」

『嫌じゃ』

「即答かよ……。
転んでも知らんぞ？」

『……何故転ぶのじゃ？』

『飛べばよいではないか』

「……ええー、お互いの会話に重大な齟齬が発生していると思われ
ますが。」

「……なに、お前飛べんの？」

初耳なんだけど。

『なに、ユウは飛べないのか？……………ふっ、そうかそうか。ユウはまだ飛べないのか』

勝ち誇ったように言う四季。

「しょうがないだろ、こちとら妖怪になってまだ1日も経ってないんだよ。」

『そうか、なら私が飛ばしてやろう。暴れるなよ？』

そう言って手を俺の胸に回してギュッとしめる。

……………このシチュエーションなら普通は背中に柔らかい感触があるはずなのだが。

……………ロリだからね。

「……………うーん、前後とも絶壁だな」

『前の絶壁にぶつけて欲しいのじゃな?』

「すみません、普通に飛ばしてください」

……胸が絶壁は自覚してるのか。

『……では行くぞ』

すると四季の体が重力から解放されたように浮き出した。

徐々にながたっていく四季に抱えられ、俺の体も地面から離れて行く。

おじいさん、浮いたわ!

九条が浮いたのよ!

某アルプスの少女のように感動していると、崖を越えて着地する。

背負われてる側が持ち上げるといふ、物理的に不可能なことをやってのけた神様に問う。

「……妖怪はだいたい跳べるのか？」

『そうじゃな、飛べないやつの方が少ないくらいじゃな』

「……マジかよ」

まあ飛ぶ練習はおいおいやっていくとしよう。

それよりも今は………目の前にある泉だ！

今日1日の疲れを癒したい。

「よし、泉の水温とこころー帯の気温を上げてくれ」

『………そうか、だから私に案内をさせたのじゃな。』

………全く、神使いがあらいのぉ』

そう言いながらも辺りを暖かくしてくれる四季。

このシンデレレさんめっ！

「よくやった。褒めてつかわす」

『……お前は本当に私に対等に接するのじゃな』

「だってそれが良いつつたじゃん」

早速服を脱いで泉ヘルパンダイブを敢行。

「はあ〜……生き返るう〜……!!」

マジ気持ちいい。
略してまきも。

丁度良い岩場があったのでそこに腰かけ、空を眺める。

妖しげに輝く月と、満点の星空。

決して東京では見ることのなかった光景だ。

「……感動ってこういう感情なんだろうなあ」

まさに圧巻。

この一言に尽きる。

今まで月をじっくり眺めるなんて無かったからなあ。

高層ビルが立ち並ぶ都会では、本当に空が狭い。

当然、月なんて見えてもそれは空の一部にしか過ぎない、程度にしか見ていなかった。

……ああ、本当に綺麗だな。

『そうじゃな、月が綺麗じゃな。』

……この湯はちと熱くないかのお？』

俺の隣に座る四季が俺の心を読んだように呟く。

「熱くはないだろ……ん？」

……俺の、隣に座る？

オーケー、今俺は何処にいる？

風呂であります、サー！

……となると、導きだされる答えは1つ。

「……何ちゃっかり入ってるんだよ？」

『暇だったのじゃ』

ああ、暇ならしょうがないよね。

ここで冒頭に戻る。

……一応、異性ではあるのだが。

自然と溜め息が出る。

『何じゃ？さっきから。』

……もしや欲情しておるのか？』

「誰がするか幼女体型め」

『……何故そう一言多いのじゃ』

むすつとしてこちらを見てくるロリ神様。

「……お前は俺に裸を見られて平気なのか？」

神様に男女間の恥じらいとかいう概念はないのだろうか。

すると四季が少し視線を外して言う。

『……平気ではないが……。……ユウなら見せても良いか、
と思つてな』

……………何これ？

デレ期到来か！？

若干頬を染めてるし。

『……………別に、他意は無いぞ？

私とて、気を許せる友が1人は欲しいのじゃ』

……………んなわけ無いか。

友が欲しいという願望を持つ四季にとって、恭しく接する村の人より、気軽に話す俺の方が良いということだろうか。

……………村の人も四季も相手と仲良くしたい、という気持ちは同じ筈なんだが。

『…………なあ、ユウ』

四季が静かに、話かけてくる。

「…………何だ」

『…………お前だけは、変わってくれるな』

「…………それは、このままの態度で接して欲しいってことか？」

『…………嫌、かのう？』

上目遣いで見詰める四季。

目が潤んでいるのは気のせいじゃないだろう。

「…………判った。

……………ていうか言われなくてもそのつもりだ。
生憎俺は無神論者なんだな」

『…………ふふっ、目の前におるといつた。』

朗らかな笑みを浮かべる四季。

「まあ、もう少し身長があったら四季を神と認めるかなあ」

『……身長は関係ないであろう？
それ以外に何かないのか？』

「後は、……………そうだなあ、胸とか？」

『……お前は、体のことばかりかあぁ！…！』

「いや、冗談だって。そんなに真に受けられても困……………え、ちよつと四季さん？
何で両手をかかっている？ねえ？降ろして？降ろして下さいお願いします
します」

『断る！』

「ええー、って俺の周りだけ温度下げないで！？寒い！凍る！」

ぎゃーぎゃー騒ぎながらも心地好いと感じるこの時。

今日会ったばかりの筈の四季にこれほど心を許している自分に気が付き、苦笑する。

タイムスリップしたときはどうなるかと思っただが、何とか新しい場所でもやっていけそうだ。

願わくば、これからの日々も安穏が続きますように。

黄金色に地を照らす月を眺めながら、柄にもなくそう思った。

…………… ああ、今夜の月は綺麗だ。

5・村の長老がこんなに黒いわけがない(後書き)

気が付いたらこんなに長くなった(^ O ^)

ちなみですが、九条君は原作知識とかはありません。

6・『愛の巢』つて死語じゃない？

「お二方のお住まいの普請が完了致しやした！」

あれから、長老の家で暮らすこと十数日。

そろそろ長老宅を自宅のように認識しはじめたころ、村の人（明らかに大工さんの見えた目）からそんな声がかかった。

「早かったですね？」

現代なら数ヶ月は最低でもかかる筈。

「村の若いもんを総動員したもんで、結構な出来栄えだと思いやす、へいー！」

それは有り難いな、自分の家が出るのは嬉しい。
長老にも迷惑をかけずにすむし。

「これから、棟上げを行いやすんでどうぞお越しくだせえ！」

威勢の良い声でそう言って走っていく大工さん。

「……………俺達も行くか」

隣で聞いていた四季にも声をかける。

「……むう、上棟式はあまり好きでは無いのじゃが……まあ新しい我が家になる家。行かねばなるまい」

少し困ったように言う四季。

はて？何か上棟式に嫌なことがあるのだろうか。

特にこれといって特別なことはない筈だが。

『……ほら、何をしておる。行くぞ？』

「ああ、悪い」

……ていつか俺と四季が一緒に住むのは確定事項なわけね。

いや、いいんだけど。

家に着くと、周囲に人だかりが出来ていた。

大工の人達だけでなく、村の女性やお年寄りの人もいる。

て言うか、家でかいな。

長老の家よりでかいかもしれん。

「あら、御早う御座います」

「あ、おはようございます弥生さん」

弥生さんも子供と一緒に来ていた。

『弥生も来ておったのか。』

「はい、四季様と優様の2人の愛の巣の完成ですから、来ないわけには参りませんわ」

………愛の巣で。

弥生さんはどうあっても俺と四季を結び付けたらしい。

『………ところでその子供の名前は何と言つたのじゃ?』

そしてスルーする四季。

いや、ツッコめよ。

「この子は弥勒みくと申しますの。まだ産まれてから1年も経っていませんので、何処へ行くにも手が離せないのでわ」

『健やかに育つと良いな』

「有り難うございます、四季様」

そう言って子供の頭を撫でる四季はちゃんと神様をしているように感じた。

……これで精一杯背伸びしなけりゃなあ。

まあ可愛らしいのだが。

「四季様ー！こちらにお越しくだせえ！」

暫くして、大工の1人から四季に声がかかる。

『判った。今行く』

四季は当たり前のように家の方に向かい、そして屋根の上に飛び乗った。

あれ、何してんの？

餅でも撒くのか？

「ええー、本日は大変お日柄も良く、お集まり頂いた皆様に感謝を。

では、今から棟上げをしたいと思います」

そう言つて大工が屋根に上つていく。

そうして棟木が上げられると、周りから拍手が起こつた。

そして一斉に四季を拝み出す村の人達。

ああ、そついや上棟式つて神に祈りを捧げるものだったな。

屋根を見てみると、四季が威厳を纏つて立っている。

ああ、この拝まれる儀式が嫌だったのか。

……しかしちゃんと神をしてるんだなあ、四季のやつ。

普段の様子からして考え難いことだが、やはり見た目はどうあれ崇められるべき存在であるということだろう。

しかし、この村の神は四季のみ、一神教というやつなのだろうか。この縄文時代は、あらゆる自然物や自然現象に魂が宿っておりそれを神として敬い崇める、一般的にアニミズムと呼ばれる思想が普及していた、との研究がなされていたはず。そこから波及して呪いや占いなどに繋がったともいう。

……まあ、この場合は四季を操る、つまり自然が具現化したといっ

て過言ではない四季が信仰を一身に集めた、ということなのだろう。

素人ながらになかなか射ていると納得できる結論を出したところで、隣の弥生さんに話しかけてみる。

「旦那さんはどちらにおられるんですか？」

いつも母子でしか見かけないが何処にいるのだろうか。

「あ、いえ、実はこの子には父親はいないのです。」

……………あれ、また地雷踏んじやった？

この頃無神経になりつつある気がする。

これも妖怪化の影響なのであろうか。

旦那さんは病か何かで亡くなってしまったのだろうか。

「あ…いえ、すみません。無神経なことを。」

「いえ、そういうことではないんです。」

全く沈んだ様子を見せない弥生さん。何か特別な事情があるらしい。

「……………実は私は祈禱師の一族ですの。」

祈禱師には少々特別なしきたりがありまして。それが男女の交わりをしてはならない、ということでした。」

「……そうだったんですか」

これまた初耳である。

彼女が祈祷師の子孫であるということは衆知の事実らしく、普段からも村の中で男と接する機会はあまりないそうだ。

……そうだよなあ、弥生さん美人だし。何かの間違いが無いとは言えない切れない。

「って俺とは話してて良いんですか？」

俺も男であるのだが。

これは男として見られていないということだろうか。

泣くぞ。

「優様は外来の方ですし、立派な妖怪なので良いのではないのでしょうか」

……この村は外来人を敬う慣習でもあるのだろうか。『外人だから』と言えば何でも許されそうないんき（何故か変換できない）である。

「……っていうか、俺が妖怪ってこと知ってたんですか!？」

ナチュラルに言われたが、結構重要な事だ。

長老は受け入れてくれたが、村の皆も受け入れてくれるとは限らない。

妖怪というのは読んで字の如く、『妖しい怪物』というもの。

さらに、元人間である俺には考えられないが、喰人妖怪も四季の話によればいるらしい。様々な点で人間とは違う妖怪は、人間社会で普通に生きて行くのは難しいであろう。

「それなら大丈夫ですわ。村の皆さんが既に知っていることですから」

「そうなんですか!？」

「はい、優様が四季様と一緒にこの村に来られた晩、長老が皆さんを集めて優様のことについてお話なさいました。

人とは違う身ではあるが村の皆の願いも叶う。どうか受け入れて欲しいと」

俺と四季が温泉に浸かりに行ったときのことだろう。

「……………それで皆は？」

「喜んで受け入れてましたよ。あんなにいい人を妖怪だからって区別するなんて馬鹿げた話だ、と。」

なんと寛容な村なのだろうか。こちらが心配してしまうほどに優しい。

「……有り難うございます」

「いえいえ、私は何もしていませんよ。皆で決めたことですから」

……自分の存在が受け入れられるというのは誰でも嬉しいものだ。自分の周りにいる人達に感謝しなければいけないな。

「……ところで弥生さんって祈祷師の子孫だったんですね。」

祈祷師の一族というからには何か特別な力をもっているのだろうか。

「はい、まあ子孫と言っても正確には血は繋がっていないのですが」

「そんなんですか？」

「はい、私は普通に両親がいますが、幼いときから少しだけですが靈感といえますか他の人とは違う力を持っていたのです。

ですから、祈祷師を受け継ぐべくその家に引き取られて祈祷師として、また四季様の巫女として育てられました」

そんな過去があったのか。この時代、豊作を願い豊かさの象徴として女性を象った土偶をつくるくらいだから、やはり巫女というのは特別なのであろう。

「ですから、今となっては考えられませんが幼いとき四季様に遊んで頂いたりしていたのです」

「……ということは、弥勒ちゃんも預かった子なんですか」

男女が交わってはいけないというからには、そういうことなのだろう。

「はい、弥勒はまだ小さいですが祈祷の才能が開花すれば私以上の子になりますわ」

我が子のように良く言えば可愛がって、悪く言えば親馬鹿に笑顔を湛えて話す弥生さん。

……いや、弥生さんにとっては弥勒ちゃんは腹を痛めて産んだ子も同然のようなものなのだろう。

「因みに、私の一族は『弥あまねの巫女』と呼ばれていまして、代々『弥』の字を名前にいれますのよ」

あ、ほんとだ。

弥生に弥勒。

どちらも『弥』で始まっている。

すると急に弥生さんが妖艶な笑みを浮かべて言う。

「という訳ですので、男女の営みに関しては例え優様に求められてもしきたりによりお応え出来ないのです。祈禱師でなければ喜んでお相手させて頂くのですが」

「いやいや、俺なんか弥生さんと男女の仲になるなんて、おこがましいですよ」

いきなり大人の色気を感じさせる立ち振舞いに動揺しながらも、平然を装って返す。

「あら、ご謙遜なさらずともよろしいですよ？
優様は外来人であり、さらに妖怪でもある身。………もしかしたら一夜の過ちも…許されるかも知れませんか？」

弥生さんが顔を近付けてくる。

……ヤバい、なんか弥生さんスイッチ入っちゃったんだけど。なんか俺の肩に手をかけてるし。
えっ、いつの間にそんなフラグ立った？来て十数日で子持ちの人に手を出しちゃうの俺？

どうする？どうするよ俺？

『何を鼻の下を伸ばしておるのじゃ、馬鹿者』

スパアン！

いつの間にか帰って来ていた四季に頭を叩かれる。

今いいとこだったのに……じゃなくて。

「痛ってえな、別に鼻の下伸ばしてはないだろ？」

『いや、下心が丸見えであった』

「お前心が読めたのか」

『この数分間だけな』

「嘘つけ」

『嘘じゃ』

……何で叩かれたの俺？

やり場のない怒りの炎が胸の中で燃え盛る。

『文句があるのかの？』
ギロリ。

「全くないであります！」
はい、鎮火しました。

『弥生も弥生じゃ、この男は調子に乗らせるとどこまでも行くぞ?』

「はい、すみませんでした。四季様の将来の夫を誘惑するなど……」

『……じゃから違つと言つに』

「そうそう、俺は断固幼女より大人なお姉さんを希望する!」

『お前は黙つとけい!』

ドゴーン。

蹴りを入れられる俺。

……遂に足まで使い始めたんだけどこの娘。

「あらあら、尻に敷かれていますわね。頑張らないと」

微笑む弥生さん。

……いや、助けられると嬉しいんだけど。

そんなこんなで、俺達の愛の巣が完成し

『愛の巣言っとなっ!』

ドローン。

「へはま」

……「冗談じゃん？」

そういつ訳で新しい家での生活が始まったのであった。

6・『愛の巢』って死語じゃない？（後書き）

はい、座右の銘は『行き当たりばったり』、悪来です。

ここで1つお願いをば。

今まで四季のセリフを『』で表記してきましたが、次話から「」にしたいと思います。

これまでに投稿したものも時間と相談して訂正したいとは思っているのですが、なにぶん忙しいもので。

……六話目なのにまだ十数日しか経っていないという罫。

いつになったら原作キャラを出せるのだろうか。

7・修行と言えば…？そうだね、山籠りだね！

家が出来てからまた数日。

棟上げの後、2人で家に入って見ると、中は十分な広さがあり縄文時代とは思えないクオリティで出来ていた。

まず、二十畳程の居間。

これだけでも凄いが更に風呂まであったときには流石に驚いた。

まあ風呂と言っても山の泉から水をひいてきただけなんだが。

それを四季の能力で沸かして入るというものだ。

しかし、ひいてきただけとはいっても相当の労力と手間がかかるはず。これだけでどんなに人手を使って作られたかが判る。

他の村人は体を水で拭くぐらいなので、なぜ風呂を作ったのか聞いたところ、最初の晩に山の泉までわざわざ風呂に入りに行ったことを長老から聞き付け、急ピッチで作ったらしい。

……なんか逆に申し訳ないレベルだ。

まあ風呂があることによって助かっているのは事実なので、村の人の厚意に甘えておく。

そして、唯一困っている点。

それは、寝室が1つしかない、ということだった。

別に幼女で神な四季を相手に間違いを起こすとは言わないが、流石

に同じ部屋で着替えたりされるのは困る。

いくら幼いと言えど女なのだから、同じ部屋で寝起きするのは如何なものか。

その点を指摘したかったが、ここまでしてもらった大工の人達に文句を言うわけには行かず。

後で四季に言ってみると、

「……おおかた村の者が要らぬ気を利かせたのであろう。裸を見ていて今さら気にすることもあるまい？」
と受け流された。

「やっぱり、中身はババ……」

「五月蠅いわ！」

「おっとそうはいかんぜよ」

飛んできた足を両手でキャッチ。

ふっ、この蹴りは予想の範囲内だ。

そう何度も同じ手は喰わんぜよ。足だけど。

「……何じゃ？そのしゃべり方？」

「龍馬格好良いよ龍馬」

「……お前の話すことは時々判らんの」

「よく言われます」

なんていうやり取りを交わしつつ。

全く男女であるということを感じさせない同棲生活が始まった訳だが。

ある日、村を歩いていると弥勒ちゃんを抱き買い物をしている弥生さんに出会った。

……普通に歩いているけど、それでいいのか巫女。

「今日は、弥生さん」

「あら、今日は優様。」

今日は四季様はどちらに？」

微笑んで返してくれる弥生さん。
とてつもなく美人です。

「今日は家で留守番です。何か体調が優れないとかで」

「あらあら、昨晚頑張りすぎたのですか？お盛んなのも良いですけど、少しは休ませてあげるのも殿方の役割というものですわ」

「いや、そういうのではなく……」

「もし四季様で満足できないというのでしたら、私がお相手して差

し上げますけど」

「いえ、結構です。ってというかそんなことしてませんし」

『体調が優れない』で何故そういう結論に至るのか。

同じ部屋で寝てはいるが間違いは起こしてはいないはずだ。

………なんか弥生さん、だんだんお色気キャラ化してきてないか？

「あら、残念ですわ」

「いや、手出したら村八分でしょ俺」

巫女に手を出すとか、自殺行為に他ならない。

まあそうじゃなくても手を出すつもりはないが。

「……………そう言えば優様」

「何ですか？」

「妖気は隠されないのですか？」

「……………え？」

俺、キョトン。

妖気ってなんだったっけ。

「他の方には判らないかも知れませんが、見る人が見れば妖怪だと判ってしまいますわよ」

ああ、祈祷師である弥生さんには妖気なるものが判るのか。

「……………すみません、妖気って何でしたっけ？」

聞いたことはあるような無いような。

「……………妖気を知らないのですか？」

途端に怪訝な顔をする弥生さん。

「すみません、新米なもので」

「……………それだけの妖気を纏いながら新米とは……………」

未恐ろしいわね。退治しちやおうかしら」

「出来れば夜の方の退治をお願いします」

「あらあら。いやですわそんな、激しいのが好きなのですね」

夜の退治って何かって？

……………安心しろ、俺にも判らん。

「夜の退治も魅力的ですが、妖気について教えてください」

「ふふ、良いですね。妖気とは字の通り妖が持つもの。妖力とも言

いますの」

……ああ、四季に言われたやつか。『お前は人では無いぞ』って言われたとき。

「人間の中には妖気に当てられただけで気分を悪くする人もいますし、なるべく妖気は出さない方がよろしいかと。」

「そうなんですか。……妖気を隠す、ねえ」

今やっと存在を思い出したくらいだ。急に言われてはい隠しますと隠せるものではない。

「……どうやって隠すんですかね？」

「そこは四季様の方がよく知っておられるかと。私には良く判りませんので」

確かに人間が妖気の隠しかたなぞ知っているはずもない。当然である。

「それもそうですね。では、これで失礼します。教えて下さってありがとうございますございました」

「はい、四季様にもよろしく。……あんまり激しくはダメですよっ。」

「だからしませんて」

早速家に帰り訓練してみることに。

……四季の体調不良は俺の妖気が原因じゃないよな？んな訳ないか。

~~~~~

「帰ったぞー」

『俺的これぞ亭主』ランキング堂々一位の科白を言いながら帰宅する。

「元気ですかー？元気があれば何でも出来る！」

四季が寝ているであろう寝室の前で一拍おいて。

「そう、元気があれば妖気を抑える修行だってでき」ガンッ！  
飛んでくる火焰土器。ほら、あの装飾が派手なやつ。

「うるさいわ」

「おー。そんなもん投げる元気があるなら大丈夫だな。」

「……頭がガンガンする」

実は昨日の夜、水と酒を間違つて口に入れてしまい、大変なことに。

……あやすのが大変だったとだけ言っておこう。

これじゃ教えてもらうのも無理っぽいな。

「神にも二日酔いとかあるんだな」

「……そうじゃな」

「幼女の分際で飲酒するからだ……だから昨晚酔った勢いで俺に無理矢理あんなことやこんなことを……」

「……つ何をしたのじゃ!??」

「言つのも憚られるようなあんなことやこんなこと」

「……言わないでくれ、そして忘れる」

「大丈夫だ、何もされてないから」

「……お前は、私を怒らせたのかつつ痛たたた」

叫んだ後に頭を抑える四季。自分の声が頭に響いたらしい。アホや、真性のアホがおるで。

「……うー、ユウよ、この哀れな病人を看病してくれないか」

「断る。という訳で修行に行つて来るから」

「……この薄情者！悪魔！」

「一応妖怪やらせてもらってます」

まあアイツは放っておいて大丈夫だろう。神だし。

彼女は新世界の神になる！

言つてみたかった。後悔はしていない。

「とりあえずちょっと出掛けてくるから。夕方頃には帰ると思うが」

「……どこへなりとも行つてこい悪魔」

だから妖怪だつて。

……さてよ、俺は本当に悪魔ではないのか。

いや、性格が悪いとかいう意味ではなく種族的な意味で。性格の面では俺ほど天使つて言葉が似合う男はいないんじゃないかと自負している。嘘だが。

それは置いといて、現在俺の種族について判っているのは『妖怪と

いうカテゴリーに入っている』ということだけだ。

見た目は人だし、特に特技があるわけでもない。ましてや妖獣みた  
く尾があるわけでもなし。食うものも人間と一緒だ。

俺を妖怪足らしめているのは持っている妖気と人間とは比べ物にな  
らない身体能力、そして未だ全容を把握出来ていない『分子を操る  
程度の能力』だけだ。

……自分は何の妖怪なのか？これについては興味がある。判らなく  
とも問題はないが、やはり知っておいた方が何かと便利であろう。

……まさか垢嘗めとかじゃないよな？

「なあ、四季。俺は悪魔だろうか」

「なんじゃ藪から棒に。お前が悪魔だったとは初耳じゃな」

「いや、ぶつちやけ自分の種族が判らんのよ。自分の知識に当ては  
まる妖怪が居なくてな」

「……一人一種族ということか？」

「多分な。型破りな男だからなー俺」

「変人ということじゃろっ」

「失礼な」

1人1種族ということはあまり種族の名に縛られては行けないのだろつ。

これからの行いによっても決まるわけだし。二つ名みたいなもんだ。

「まあいいか。じゃ出掛けてくるから」

「……おお、気を付けるのじゃぞ」

「……遂にデレが!?!」

何だかんだで心配してくれる四季さん。

こつこつデレのとこだけなら可愛いのだが。

「……あと三百年は帰って来なくて良いぞ」

やはり。デレ期はまだ遠かった。

……多分未来永劫来ないがな。

~~~~~

修行するからにはある程度の広さが無ければなるまい。……となる
と、裏の山辺りか。

という単純な思考でやって来た、裏山。

この前は泉が湧いているところで止まったが、まだまだ奥に行けば
何かあるはず。暇潰しにもなって、最適だ。

ああ、あと飛ぶ練習もしないと。どういう原理かは知らんが、飛
べたら楽だろう。舞 術に憧れる俺としては、何とかモノにしたい
技能でもある。

という訳で今日の課題。

- 1、舞 術マスター。
- 2、妖気をなんとかする。
- 3、異能力について調べ、また何の妖怪
かを出来たら知りたいなあ。

の三本です。

まあ1日やそこらじゃできないだろうが。精神と時の部屋でも無い
限り。

たっぷり時間は有るわけだしのんびり行こうか。

7・修行と言えは…？そうだね、山籠りだね！（後書き）

……そろそろ原作キャラ出さないとですね（^| ^| ^|）

すみませんm（——）m

8・修行つて良い響きだよ

妖怪。

それは現代では広く知れ渡っている存在であり、人智を越えた異常で奇怪な現象や、それらを起こす不可思議な力を持つ非日常的な存在を指す。妖あやしや物ものの怪け、魔物まものとも呼称されるそれは、それこそ古代から人間に畏怖されてきた存在である。

妖怪と一言に言っても様々な種族があり、禍をもたらすものも居れば福を招くものも存在する。

また神も広義的には妖怪に分類され、その神も「荒御魂あらいみたま」と呼ばれるものと「和御魂にぎみたま」と呼ばれるものなど様々に分かれていく。

長く生きたものや古くなるまで使われた道具に神が宿れば九十九神となるし、また人間の信仰心や恐怖心によって生じたりすることもある。

例えば、九尾の狐なんか九十九神の代表格としては有名であろう。この場合、人に禍をもたらすものであれば「九尾の狐」、福をもたらすものであれば「お狐様」と解釈される。

とまあ、長々と解説してはみたものの自分が何の妖怪なのかは未だに判明せず、また「分子を操る」という能力の全容も掴めないでいた。

~~~~~

山を登り始めてから数十分、チートボダイバー・妖怪という強い味方を得た俺は、驚異的なスピードで斜面を駆け登っていた。

「ふはははは！俺は風になる！」

若干テンションがおかしいが、いくら走っても疲れないのだからそうなるのも致し方ないだろう。

「っしやあ！裏山を完全踏破！踏破タイム、22分17秒！日本新記録確定だなこりゃ」

まだ日本という国さえ誕生していないのだから当然だが。

「……………流石に少し休憩するか」

今までずっと全力疾走を続けてきたので一応休みをとる。給水タイム。

ああ、ちなみに途中にあった崖とかは回り道をする事で回避できた。

その分大回りだったが、飛べない以上仕方のないことだ。

崖が無ければ20分を切れたと思う。それだけ妖怪って凄いなだぜ  
参ったか。

……やはり、まずは飛ぶ訓練をしなければいけないだろう。飛べ  
たら山登りも楽になる。

「うっし、やるか」

早速飛んでみることに。

「しっかし、飛ぶなんてねえ……」

何かコツがあるのだろうか？それだけでも四季に聞いてくりゃ良かったな、など思いつつ、イメージを練っていく。

重力に縛られず、大空を自由に飛び回る自分。

……。  
……。  
……。

「だああ、全然浮かばねええ！」

やはり舞 術は難しいようで。

1ミリ足りとも浮きませんとも、はい。

ていうか妖怪は皆空飛べるっておかしくないか？皆が皆空を飛んだらもともとが空を飛ぶ種族である天狗とか無意味じゃん。それなら羽は要りませんよってこと。天狗可哀想じゃん。

心の中で悪態をつきつつ、何故飛べないのか考えてみる。

何故飛べないのか、それは飛ぶ条件を満たしていないということだ。となるとまず考えられるのが物理的な揚力の不足。

勿論イメージしていただけなので、不足なんてものではなく揚力は皆無なのだが。

しかし最初の晩に四季に持ち上げられたとき、下からの風は感じなかった。

ただフワッと浮遊した、という感じ。

なので物理的な問題があるわけではない、ということになる。

「……………こうなったら後は気合いだ」

考えてもどうせ正解かどうかは判らないので思考を放棄することに。

取り敢えず舞 術は後回しにして、『分子を操る程度の能力』について。

以前、少し調べたが結合や分離は少なくとも出来ることが判った。あとは移動や形態を保つこともできる。

しかし、それが判ったからと言って今のところ役に立つ者では無いのは火を見るより明らか。精々水を生成して飲めるってくらいだろう。

使い方によってはかなりの物にすることも出来そうだし、使わない手はないだろう。

まず、試すとしたら爆薬や毒物の精製だろうか。何でも軍事目的の物を民事に転用してきたことからしてもそれが良いだろう。

「……爆薬か、何が良いだろうか」

爆薬は基本的に炭素、水素、窒素、酸素の4つで構成されている。これらは自然界にごく普通に存在しているので、集めるのは簡単なのだが。

「流石に分子構造迄は知らんな」

そう、いくら分子を集めても構造が判らなければ精製出来ない。となると、ニトログリセリンやトリニトロトルエンなどを創るのは難しそうだ。

時間をかければできるだろうが、爆薬なので失敗が怖い。

ニトログリセリンなんか作ったら即大爆発なんてことになるかもしれない。

「……いや、なんとか珪藻土を探し出してダイナマイトにするか……？」

ノーベルが最初に作り出したという簡易性のダイナマイトだ。

……いや、水素と酸素があれば充分か。  
要は爆発すればなんでも良いわけだし。

「よし、ちょっと実験すつか」

こんなこともあるつかと家から水を入れた容器を持参していたので、その水をまく。意外と用意周到な俺。

そして、ゆっくりと水素を取り出し、前方へ押しやる。すると少しずつではあるが、ちゃんと遠ざかって行くのが感覚的に判る。

……よし、この辺で。

50メートルくらい離れたところに浮遊させ、そこに石を投げ込む。すると後ろにあった岩とぶつかり、小さな火花が。

そして。

『ドオオオ……ン!!』

「おおー……！」

予想を上回る威力に驚く。意外と少量でも行けるんだなあ。  
ていうかこれ危なくね？

使い方に依っては1人で国を落とせるじゃん。  
まあしないけど。

とまあ、爆発に関しての実験が終わったところで。

「本日のメインである妖力の隠し方だが……」

実はこれについては考えがある。それは妖力を『分子』として捉えれば良いんじゃないか、ということだ。

弥生さんによれば、妖力は気体の様に大気中に浮くみたいだし、そう考えた方が合理的であろう。

という訳で妖力を制御する。……妖力を自分に留める感じ？  
一応制御は出来ているっぽいけど、今度弥生さんに見てもらおう。四季でも良いが。

……今気付いたんだが、神力とか霊力も操れるんじゃないだろうか。それならば用途は様々に広がるだろう。今後の要検証事項だ。

「……やっぱり疲れるなあ」

能力の行使は集中力がいるぶん、疲れるらしい。  
今日はこの辺にして、もう帰った方が良いだろうか。陽も傾いてきた頃合、下山するには丁度良いだろう。

……今日は結構収穫があったな。

そんなことを考えつつ。

家路を歩いて行くのだった、まる。

~~~~~

家に着いてから。

「帰ったぞー」

昼と同じ台詞を言いながら中に入る俺。
因みに飯は基本取らないでもいける。小腹が空いたなあ、程度にし
か空腹感がないので、飯は嗜好品として考えた方が良さそうだ。

「……………四季いー？」

まだ二日酔っているのだろうか。神だと言つのに懦弱なもんだ。

「おーい、治ってないのかー？」

取り敢えず寢室に向かう。治ってないなら少しは看病してやるか、
と珍しく思ったのだ。

……………別にツンデレじゃないんだからねっ！

……………しかし。

「ああ〜ユウ〜！どこに行っておったのじゃあ〜！……………ひっく」

「……………くたばれ酔っぱらい」

そこには一生瓶を手にした幼女もとい四季が。
また水と間違えて飲んだのか。

……
今夜も大変そうだ。

8・修行って良い響きだよね（後書き）

ええー原作キャラまではあと少しお待ち下さい。――…（

9・俺と一緒に闘(や)らないか？

山の中での修行を始めて一年が経過した。

……別に書くのが面倒だったのではなく、大体毎日同じような事を繰り返していたので特筆すべきこともなかったからだ。だから手抜きでは無い。信じる。

修行の方も一段落付き、ある程度意識せずとも妖力を隠すことが出来るようになってきた。弥生さんに見てもらったからまあ一応隠せてはいるだろう。

そうそう、弥生さんに妖力を見てもらったついでに、霊力や神力等も操れるのか試してみた。妖力を1つの分子として捉えられるなら、他の力も操れるんじゃないかと思って実験してみたのだが。弥生さんに霊力、四季に神力を提供してもらった。

結果から言うと、『操れはするが限定的』という解を得た。詳しく説明すると、まず2人が何もしない状態で干渉を試みたのだが、何も起こらず。

次に2人に力を少し解放してもらったところ、そこで初めて操作することが出来た。この結果からするに、相手が内包している力に直接的に干渉して操ることは現段階では不可能である、ということだろう。

今後、訓練を重ねれば或いは出来るのかも知れないが、まあ早急に必要な能力ではないので、重要度は低いと思われる。

それに関連して、有機物から分子を取り出すことは出来るのかも調べてみた。人間や、動植物から直接、炭素などを取り出すことが出来れば周りに何も無い状況でもある程度のもは造り出せるだろう。一例であるが、人の中にある癌細胞だけを意図的に取り出すことも

出来るだろうし、重大な外傷を負っても細胞を構築して傷口を塞ぐなどの応急処置くらいは出来るようになるだろう。

だが、この実験も完全な結果は得られず、取り出せるのは植物からだけであった。まあ動いているものから取り出すのは難しいということか、食用の肉なら分解出来たし。

とまあ、この1年で能力の扱いが大分マシになったと思う。

なんせ物質を1から造り出せる能力だ、扱い方に依って最強にも最弱にもなる。

このまま扱い方を学んで行くと、百年もすれば『歩く核兵器』の異名を欲しいままにすることも出来るかもしれない。

あんまり嬉しくはないが。

そんな反則級な能力を持つ俺だが、身体能力も半端ではないことが判明。いや、前から判っていたことではあるのだが、それは妖怪に成りたての頃。この身体にも成長があるらしく、100メートル走を二秒フラットで走るなどの日に日に人間離れした力が付いて行った。

風になった俺。

実話だから仕方がない。

ああ、あと空を飛ぶ訓練も一応やった。やりはしたのだが、あまり才能があるほうでは無かったようだ。

ふわ〜と浮かんでは、30秒くらいしたら落ちてしまうので自由に空を飛び回る、というのには程遠い。

俺の飛行才能の無さに四季が啞然とするくらいだ、相当苦手だということだろう。

『何をすればそんなに飛べなくなるのか判らない』って言われたんだけど。

松尾芭シヨンボリ。

そんな感じで1年が経過し、村の人とも大方打ち解けられたかな、と感じるようになってきた今日この頃。

しかして俺の中には、そんな日常とは反する感情が生まれつつあった。

それは、『旅を試してみたい』という気持ち。

実は生前、旅というものに憧れを抱いていた俺は、幸か不幸かタイムスリップという一種の旅を気付かぬ内に経験してしまい、それから言うもの『どうせ過去に来たんなら観光も含めて旅をしたい』と思い始めたのだ。

しかしそれには危険が伴うのもまた事実であり、今の實力では些か不安があるのも否定出来ない。

……………という訳で。

「舞。俺と闘ってくれ」

「……………まずお前は話に脈絡を付けてから話せ」

「いや、ちゃんと地の文で言ったから」

「……遂に気でも触れたのか？」

「大丈夫、皆は判ってるはずだ」

「……私がおかしいのだろうか」

押しきりました。

ああ、疑問に思つかもしれないが『舞』ってのは四季の下の名前だ。この1年で気が付かない内に下の名前で呼ぶようになっていたのだが、今では『四季』と呼ぶ方が違和感を覚える程定着しつつある。

まあそれは置いていて。

「……闘っても良いが、何処でするのじゃ？お前は能力が能力ゆえ、村の中でやるわけにもいかんじゃろうし」

「ああそれは大丈夫だ、山の中に広いトコがあるから」

「ほう。……では明日、その場所に行こうではないか」

「あら、意外と乗り気だな」

「いや、元々闘うのは得意では無いのだがな。久しく身体を動かしておらんで鈍ってないかと心配だったのじゃ」

まあ村にいたら何でもかんでも村の人が気を利かせてくれるし。極力自分で何でもしようとしているみたいだが、流石に労働とかはさ

せてもらえない。祭神だしな、働かせる訳にも行かないんだろつ。

「そうだな。太ったもんな」

「……………いや、そんなことは無いじゃろつ」

「ぱつと見は判らんがな、二の腕とか腹とか少しずつつ出てるぞ」

「……………いつ見たのじゃ」

「風呂で」

「……………嘘じゃろ?」

「嘘だ」

「……………そつ、そうであろうな、神である私が太るなど……」

「つていうのは嘘」

「えっ!?!」

「これも嘘だ」

「殴りたいのか貴様」

「正直スマンかった」

四季が太ったのは嘘。

つていうのが嘘つていうのも嘘。

風呂で見たのは本当。

いや、俺が入ってたら勝手に舞が入って来るんだ俺のせいじゃない。ちなみにロリコンでもないのので興奮とかはしない、一応宣言しておく。

「とにかく明日は修行に付き合ってくれ」

「良かるう。別に体重が気になるから付き合ってやるのではないぞ」

決して。勘違いするでないぞ」
「なにそのツンデレ」

という訳で、舞と闘うことに。

~~~~~

翌日。

冬なのにまだまだ元気な太陽がこれでもかと光を送り込んでくる中を俺達は山の広場までやってきた。  
まだまだ冬本番、昨晚降り積もった雪が所々に融け残り、木々に被さる白い雪が光を受けて煌めく。

尚、今日は審判をして貰おうと云うことで弥生さんにも付いてきてもらった。

「……寒いな」

誰だこんな中で闘おうとか言い出したアホは。俺か。

「じゃが、如何なる条件でも常に力を遺憾無く発揮できねば、修行の意味が無いぞ。」

そんな舞の正論を受け、まあ確かにと納得するあたり、俺も妖怪染みてきたということだろう。

「それもそうだが」

「まあ、いざとなれば四季様の能力で気温を上げれば良いのですし、大丈夫ですわ。」

「……マジで便利過ぎだろその能力。1人で地球温暖化止められるじゃん」

一家に一台四季 舞はどうですかみたいな。  
まあ俺の能力でも止められるのだが。

「それはそうと、闘いの規則は決めないのか？危険なことになるかも知れんし」

そうだな、気温上げられ過ぎてこんがり焼けましたは笑えない。

「じゃあ危ないと思ったなら止めるってことで」

「……随分と曖昧じゃな」「妖怪と神な訳だし、そうそう死にはせんだろ、多分」

「まあ、それもそうじゃな」

なんとも緩い雰囲気だな。だがそれが良い。

「……よし。じゃ始めるか」

一通り話し合ったところで、早速闘うことに。

「んじゃ、弥生さんお願いします」

「判りましたわ。……それでは四季様と優様の愛の嘗みを始めません」

「あら、失礼しました。……では、いまから決闘を行います！始め！」

そんな弥生さんの気の抜ける号令。

「……行くぞ、舞！」

「私とて負ける気はないのでな、本気でいかせてもらおうぞ」

余裕の笑みを浮かべて立っている舞。やはり神であるだけあってそのゆったりとした構えにはしかして隙がない。

……どうやって勝つのか。恐らく単純な力勝負では勝てるだろうが、そう簡単にその土俵に相手を乗せられるとも思えない。逆に力勝負ではなく、能力を用いてこちらを攻めてくるだろう。

そこで舞の『四季を操る程度の能力』だが、この能力の恐ろしいところは『四季』の対象が異様に広い、という点だ。

例えば、気温や水温を自由に上げ下げ出来るし、更には天候にもある程度の影響を及ぼす事が出来る。

これを使えば相手を焼き殺したり、雨を降らせて雷を落として感電させるなど色々なパターンを組める。

……何というチート。

「勝負の最中に考え事とは、随分余裕じゃのう」  
「しまっ」

思考に気を取られ過ぎたのか、気付くて目の前には舞が。

「フッ！」

舞が身体を捻り、腹に凄烈な前蹴りを入れてくる。

ドゴオー！！

「がっ……………！！！」

みるみる内に飛ばされて行く俺。

バシユズガドゴバキッ！！

凄まじい轟音を立てながら飛び、後ろの木にぶつかってやっと止まる。

「……………げほっ、ごほっ！」

……………ハア、ハッ、少しくらい手加減してくれても良いんじゃないかね  
ーの？」「

「そう簡単には死なぬのであろう？」

「今のが『簡単』の範疇に収まってるお前の思考回路に吃驚だ」

「照れるではないか」

「褒めてねえよバカ」

遠くから舞が声をかけてくるが、ぶつちやけそれどころではない。こんなのを何発も喰らってたら、間違いなく死ねるぞこれ。

「しかし、あれで戦闘が得意じゃないとか……なんたる詐欺」

まずあんな見た目が幼女な奴が出せる蹴りの威力じゃねえ。

……これは肉弾戦は無理だな、まだ俺は経験が浅いし、何より痛いのは御免だ。

「おい、大丈夫か、ユウ？……来ないならこちらから行くぞ？」

「それならもうちょっと手加減しろっての」

微塵も心配しているような声音ではないので、舞も本気で潰しにくるだろう。

……俺、この闘いに勝ったら舞に告白するんだ。

自ら死亡フラグを立てながらも森の中へ逃げ込み様子を窺う。

やはり、肉弾戦がダメなら遠距離から牽制しつつ奇襲強襲で攻め立てるしかないだろう。

ならば取れる作戦は……

「よし、……アイツの周りの酸素分子を此方へ」

遠距離からじわじわと体力を奪う作戦。つまり、酸素濃度を薄くして酸欠状態にしようというもの。  
これを思い付いた時には我ながらえげつないと良心が痛んだね。実行するけど。

「逃げ隠れているだけでは勝てんぞお？」

四季が森に向けて両手を掲げる。

「……風よ、凧げ、薙ぎ倒せ」

すると、先程まで俺が隠れていた辺りに一斉に突風が吹き荒れ、葉が舞い幹が唸りを上げる。

ミシッ！

バキッ！

メリメリイ……！！

「……おいおい、環境保護団体を敵に回すぞ」

ナチュラルに自然破壊をする神様に啞然とし、更に酸素濃度を薄くしていく。

「……………！……………これは、……………そうか、あやつ有能力か」  
四季も気付いたようだ。

……………ここらで決着と行くか。

そこら辺に残っている雪を酸素分子と水素分子に分解。先程集めた酸素分子と共に舞の背後へ送る。

「……………こつちだ、舞」

森から出て姿を現す。

「……………そこに居ったか、とつとつ殴られる覚悟は固まったか？」

「いいや、出来たのは……………お前を殴る覚悟だ」

「ほう、言つではないか。ならば私を見事殴つて見せよ。……………  
ただし、これをかわせたらな！」

直ぐ様両手を掲げる舞。

……………よし、このまま油断を誘え。

「押し潰せ、大地よ！」

舞が叫ぶと同時にどこからともなく大小様々な岩が飛んでくる。

「……………はっ、マジで？」

あの野郎（女だけ）、完全に俺を殺す気だろ。

「ちよっ、ちよっと待て、これは洒落にならないから！死ぬから俺  
！」

「大丈夫じゃ、ちゃんと死なぬ程度に手加減はしておる」

「いや、手加減ってどこがっ！？」

縦横無尽に空中を駆け回る無数の岩を辛うじてかわしながら、俺は舞の様子を窺っていた。

岩を操る舞、その意識は完全に岩を操ることに集中している。

……………今しかないっ！

「…………なんちゃってな。  
今だッ!!」

飛んできた小さな岩を1つ鷲掴みにし、四季へ向かって投げける。  
亜音速近い速度を出して飛ぶそれは、真っ直ぐと四季のもとへ。

「ふん、そんなものが当たると思ってたか。舐められたもんじゃのお」

しかしてその岩は当然の如く避けられ、当たることはなく。

「そろそろ終いじゃ、残念じゃったのう、勝ちは頂くぞ」

「…………そうだな、そろそろ終いだ。……………但し勝つのは俺だが」

「ふん、まだやる気か？結果は見えておるじゃろ」

その時。

ドゴオオオオオオン……………!!

「うわっ!?!」

凄まじい爆音と共に吹き荒ぶ爆風。

そう、あの時。

俺が投げた小さな岩が四季の後ろを飛んでいた岩に当たり火花を散らし。それが予め集めていた水素と酸素に引火したのだ。結果として凄まじい爆発が起きる、そういう仕組みだ。ここまでは計算通り。そう、ここまでは計算通りだったのだが。

「ちよっ!?!爆発でか過ぎ!」

思った以上に集め過ぎていたのか、予想を遥かに上回る規模の爆発が。

「あーれー!?!」

そして爆風に飛ばされて来る舞ちゃん。いや、半端ない速度で。

そして、その先には荒々しい岩が沢山。

「……おいおい、まじかよッ!」

急いで飛んでくる斜線上に回り込み、舞いを正面から抱き止める。

ドゴッ!!

「っ、止めきれんか!?!」

あまりの速度に吹っ飛ばされ、同様に吹っ飛んで行く俺。

せめて舞だけでも!!

身体全体で庇うように舞を抱き抱え、来るであろう衝撃に備える。

そして、

ズガシャアアアン……!!

背中に走る衝撃と共に、俺の意識は途絶えた。

~~~~~

舞side

「……………っ、痛たたた……」

大きな爆音と共に飛ばされた私は、ユウに抱き止められていた。

「うう……………、大丈夫か？全く、あんなことをするなら加減くらいしつかりとせんか……………」

そこまで言っつて気付く。

ユウが返事を返さない。

「……………おいっユウッ！？返事をするのじゃ…！」

……………嘘だ。ユウがそんな簡単に死ぬはずがない。

もし生きていなかったら私は……………！

「………息をしておるではないか」

良く見てみると、僅かに胸が上下している。確かに生きてはいるようだ。

………全く、心配をかけおつて。そう口に出しながらも、心の中には安堵している自分がいた。

「大丈夫ですか！？四季様！？」

そこに慌てて駆け寄ってくる弥生。自身も先の爆発で相当驚いたのであるう、息が乱れている。

「ああ、私は大丈夫じゃ。………その代わりコイツがのう」

「優様！？大丈夫ですか！？」「大丈夫、気を失っておるだけじゃ。だが念のため急いで帰った方が良さそうじゃな」

「では、私が背負いましょう」

「ああ、頼む」

弥生と共に村へと急ぐ。

次第に日が傾く中、今日のことを思い返す。

私の背後で起きた凄まじい爆発。あれには驚いたし、予想外の展開だった。正直、本当の闘いならばあの爆発をもろに当てられていただろうし、その衝撃を受けてはいくら神とはいえたただでは済まなかっただろう。

あの作戦を考えた発想力と実行する計画性に感心しつつ、ユウの顔を眺める。

そして、飛ばされる最中に見たユウの必死な顔。

私を受け止めようと走るその姿は、まあその……何だ。格好良かったとしても言うか。

まあ、凛々しく見えたのは事実だ。

そんなユウの顔を眺めながら、夕映の赤い景色の中を私達は村へと急ぐのだった。

お前の勝ちじゃな、ユウ。

~~~~~

村に着いてから。

「こつちじゃ、弥生」

「あら、ここが毎晩御二人で夜の営みをされている寝室ですか。」

……ああ、優様はさぞ激しいのでしょう。そして何回と求められてもそれに健気に応える四季様……。

ああ、なんと素晴らしき愛の成せる業なのでしょうか！」

「いや、落ち着け弥生」

急に恍惚とした表情になって艶やかな声で叫ぶ弥生。幼い頃から知っていた人間の豹変振りに若干引きながらも、ユウを担いでもらって寝室まで来ていた。

因みに、弥生は大の大人であり男であるユウを1人で背負って村まで来れるほど力があるという訳ではない。私が神力で弥生の力を補っているためだ。

まあどうでも良いか。

「そこに降ろしてくれ」

「はい、判りました。………優様、降ろしますよー」

意識がないユウに呼び掛ける弥生を見て、改めて優しさを実感する。これなら次代の『弥の巫女』もすっかりとした子に育つだろう。

そう思っただけだと。

「……………っ、うう」

ユウが声を上げる。

「気が付いたのか!?……………いや、ただ唸っただけか」

一瞬、目覚めたかと安堵しかけたが、それまでにはまだ少し時間が  
かかりそうだ。

……まあ、看病してやっても良いか。

私の油断が原因の半分くらいはあるし。そう、少しは罪悪感を感じ  
ているから看病するだけだ。

などと、自分に意味の判らない言い訳を重ねる。

『もし死んでいたら私は……！』

ふと気を失ったユウを見たときに思ったことを思い返す。

あの時私は何を言おうとしていたのだろうか？あの言葉の後に続い  
ていたのは……？

いや、態とらしく違う解をだして逃げるのは止そう。私も十代やそ  
この生娘でもあるまい、この感情がどんな類の物なのかくらいは  
判る。

まあ、要するに『そういうこと』なのだろう。

今更ながらに気付いた自分の感情に苦笑しながら、暖かい気持ちで  
ユウを見つめる。

……………これからは少し優しくしてやるか。

そんな柄にも無いことを思い、そんな自分にまた苦笑いを浮かべるのだった。

「……………うー、ん」

「……………また唸りか？」

先程から少しずつ動きが出てきているユウを見る。

するじ。

弥生の背中にいるユウの手が動き、その手が……………弥生の胸へ。

むじゅっ。

あえて擬音を付けるならそんなところであろう動きをした。

「ああん優様、まだ夜ではありませんわ、あと少し待って下さいな」

満更でも無さそうな顔で喘ぐように言う弥生。

……………  
プチッ。

「弥生、降ろせ」

「あっ…、はい」

背中から降ろそうとする弥生。

しかしなかなかユウの手が胸から離れない。

「……………う、んー？……………ふわあ、良く寝たなあ……………」

と、ユウが丁度良く目を覚ます。

「……………つて、ええー!？」

いや、弥生さんこれは違います、たまたま気持ち良い感触のものがそこにあつたから……………じゃなくて!」

「いえ、お気になさらず。むしろ喜ばしいことですし」

「いや、ははっそう言ってもらえると助かります」

「……………ほう、お前は助かるのか」

「ん?……………あつ、舞……………。いや、今のは事故だしな、落ち着け、悪かったからその両手を降ろしてくれ!？」

「いや、巫女に手を出す不届き者には神の裁きを下さねばならん!赦すまじ、九条 優!風よ唸れ!」

「ちよっこ室内だつて!危ないからそんなの止めなさつてうおお  
おお!」

ドガン!

「…………正直、でかかったです」

ガクッ。

そう言ってまた気絶するユウ。

……………さっきの感情は気のせいだったかもしれん。

9 ・俺と一緒に闘(闘)や(ら)ないか？(後書き)

せっせこ連投。

## 10・お酒は程々に

舞と闘った翌日。

前日の夜に吹っ飛ばされて強制的に眠りに付いた俺は、あまりの寒さと寝心地の悪さに目を覚ました。

「ふあゝ…良く寝れなかった、って壁にめり込んでるし」

今まで寝ていた場所を見ると、ギャグ漫画等でよくある人形の窪みが出来ているではないか。

それほど強烈にぶっ飛ばさるたってことだろう。

というかこの窪みはどうするのだろうか。大工の人達に直させるのだろうか、そんなことを頻繁に頼むわけにもいかないだろう。

「……これは力加減を覚えて貰うしかないな」

毎回毎回こんな惨事を引き起こしていたら身が持たないだろう。まあそんな状況でぐっすりと睡眠を取っていた俺も俺だが。

「……目が覚めて開口一番に何を言うかと思えば、まず自らの行いを改めようとは考えんのか」

壁を見つめ今更ながらに自分の身体の丈夫さに感謝していると、後ろから舞の声がかかる。

……俺は寝惚けていただけなのだが。

「いや、酒呑んで泣き上戸になる幼女に言われたくないから」

「………？誰の事を言っておるのじゃ」

そして記憶が無いと来た。……いや、小首を傾げても駄目な事ってあるよね。

「お前だよロリ」

「ろりとはなんじゃ？」

「……………」

「無視かの!？」

徐々に面倒臭くなってきたので取り敢えず放置することに。  
酒呑んで豹変するやつには何を言ってもしょうがないため、まあ酒は程々にと言うしかないだろう。

「……………なあ、舞」

「…何じゃ、神妙な顔をして」

「旅に出たいんだけども」

何を唐突に、と思われるかもしれないが、そう。今しがた一生に一度有るか無いかの奇特的な目覚め方をしたのも元を辿ればこの願望のためである。

人ならぬ身に生まれ変わり、なら人であった頃では出来ないような事をしようじゃないか、と次第に思いは募り。

まあそのために昨日の決闘を挑んだりしたのだが。

「…………それは、今のこの村での生活に不満があるということか？」

しかし四季は俺の言葉を聞いた途端、顔をしかめ強い口調で尋ねてきた。

「…………何で怒ってんだよ」「別に怒ってなどいない。ただ何故旅に出たいなど言うのか気になっただけじゃ」

「今の暮らしに不満が有る訳じゃない。ただ…………月並みな言葉になるが、己の見聞を広めたいってとこだ」

村の皆は本当に良くしてくれている。それこそこんな何処からやって来たとも判らない身であり、その上妖怪でもあるこの俺を受け入れてくれているのだから感謝してもしきれない。

しかし、旅に出たいというのもまた捨てきれない感情だ。どちらを取るのかと言われても選べない程。

「それを私に言ってどうするのじゃ？村の長老や皆に言えば良かる  
う」

光が差しこむ窓辺に少しずつ歩み寄り、訥々と話す舞。

「それはそうだが、まずお前に言うのが当たり前だろ？」

「…………ふん、好きにすれば良かるう。それこそ私の決めることで

はない」

「……そうか。……じゃあ、長老に言ってくる」

まだ外を見ている舞を背に、ゆっくりと外に出る。

何か呆気なかったな。もう少し反論されるかと思ったが。

いや、それよりも村の皆を説得するほうが難しいだろう。俺がこの村に馴染めたのは紛れも無く舞のお陰で、その舞を置いて旅に出ようなんて認めてくれないかも知れない。

だが、こちらでも譲れないものがある。勿論、恩を返したいとは思っているが、現実今の俺に出来ることはなく、舞の相手をしていることくらいだ。

……よし、心を決めるか。

~~~~~

舞 Side

ユウが部屋を出た後。

外を眺めながら、自分の意気地の無さに甚だ腹を立てる。

ユウに旅に出て欲しくない。自分と一緒にこの村で暮らして欲しい。

『行かないで』というたった五文字が言えず、口を衝いて出たのはぞんざいに扱うかのような素直とは到底言い切れない言葉。

あれでは本当にユウが旅に出てしまつかもしれない。

「……………はあ」

昨日漸く気付いた自分の気持ちに、素直になろうと誓ったのに。

何故私はこうなのだろう。ユウには、ユウだけには気持ちが伝えられない。

いつそ全てを吐き出して仕舞えれば楽になれるのだろうが、ユウにとって私が迷惑であったらと考えるとそれも怖くて出来ない。

「……………はあ」

私は、どうすれば良いのだろうか。

~~~~~

優side

部屋を出たあと、俺は村中を回って一件一件に旅に出ようと考えている旨を伝えた。

俺は、どんな罵倒を受けても仕方がないと考えていた。それはそうだろう、村人の願いを、期待を裏切ってしまうことになるのだから。しかし、皆は俺が予想していたのとは180度違う反応を見せた。

「……それは優様がお決めになったことなのですか？」

「……はい。……自分勝手だとは理解しています。……しかし、これだけは譲れません」

「そうですか……。判りました、優様が自らお決めになったことです、反論はいたしません。むしろ応援させて頂きますよ」

「……！本当ですか……！」

「はい、勿論四季様を心配する気持ちも有りますが、元はと言えば私共の問題ですしそれを優様に強制する権利も資格もありません。皆で送り出しましょう」

「有り難うございます！」

「いえいえ、お礼は要りませんよ。……因みに、いつ出発する予定で？」

「はい、早ければ今週中にもと考えているのですが……」

「なんと！それでは優様を見送る準備を急いでしなくては！」

「そつ、そんなの良いですよ、お忙しいてしょうし」

「いやいや、これくらいさせて下さい。たいしたおもてなしも出来なかつたので」

とまあ、こんな感じにトントン拍子に話が進んで行った。村の皆に感謝だ。

……さて、最後の1週間、少しでも恩返し出来るように頑張るか。

~~~~~

それから太陽が昇って降りてを数回繰り返し。

俺の出発前夜となった。

この1週間、村の人の作業を手伝ったり、一緒に酒を呑んだりもした。

何だか長年暮らしてきた故郷を離れるみたいだが、そう思えるのもこの村の良いところであろう。

今は、明日に出発を控えた俺のために、宴が開かれている。

「優様、呑んでおられますか!？」

以前一緒に酒を呑んだことのある男性が奥さんを連れて話しかけてくる。

「あ、はい呑んでいますよ。ここの酒は美味しくて良いですね」

「そうでしょう、此処の村は水が綺麗なのが自慢ですからね。ささ、もう一杯どうぞ」

いつも笑みを絶やさない、明るなおやつさんだ。

「こらあなた、優様は明日出発なんだから、あんまり呑ませたらいけないだろう」

「それもそうだなあ、いや、これは失礼しました。代わりに料理を楽しんでくださいませ、村の者が腕によりをかけて作りましたんで」

「はい、楽しませて貰いますよ」

色々な人から声をかけられ、また料理に舌鼓を打ちつつ。すると声をかけてくる人がまた1人。

「これでお別れなんて寂しいですわ、優様」

「弥生さん、すいません。舞を任せられたのに」

「いえいえ、私も優様を応援していますわ。………しかしいつでもまた戻って来られてよろしいですよ？必要とあらばこの弥生、この身を以て慰めさせて頂きますわ」

今日も全開な弥生さん。

それにしてもこの弥生さん、ノリノリである。

「いやいや、大丈夫ですつて」

「………そんな、先日あれだけ私の身体を弄んでらしたのに………。一夜過ぎたら、私はもうお払い箱なのですね」

よよよと泣き崩れる振りをする弥生さん。

「いや、あれは事故ですから！弄んでもないですし！」

「ふふふ、冗談ですわ」

「……勘弁してくださいよ」

この人がいうと洒落にならんからな。

弥生さんと話していると、そこに長老がやって来た。

「ああ長老、先程見張りの者から東に砂煙が見えると報告がありましたわ」

先程までアダルティーな雰囲気を出していた弥生さんが途端に真剣な表情で報告する。

…意外と真面目に巫女やってんだなあ。

「ああ、こんな時くらい務めを忘れて騒いでも良いぞ、巫女よ？」

……この老い耄れも応援させて頂きますよ、九条様」

「有り難うございます、長老。この恩は、いつか必ず」

「そうして下されば幸いです。村には若い者も多く、まだまだ未来がありますので」

「はい。発展していくと良いですね」

皆と他愛もない、されどしっかりと心のこもった会話をし、次第に酒も進んでいく。

そうして皆と呑んでいたが、暫くしてお酒で顔を赤くした弥生さんが訊ねてきた。

「今日は四季様はどちらに?」

「ああ、アイツなら……………あれ、いないですね。さっきまでは居たんですが……………」

そこまで言っふと気付く。これは舞がこの宴に参加している酔っ払う泣くのパターンではないか?

当然村の人は酒を勧めるだろうしアイツも断りはしないだろう。

……………また村の何処かで暴走してるんだろうか。

俺達の家というのが候補筆頭だが。

「……………すみません、ちょっと探して来ます」

「あ、はい判りました。宜しく願いいたします。」

気になるので少し抜けて探しに行くことに。
部屋が凍って無いことを祈ろう。寒いし。

そもそも何でアイツは酒を呑むのを止めないんだ、記憶がそこだけ
無いってなんやねんと心の中で非難しながら家の敷居をくぐる。

「おい、舞ー？」

しーん。

「出てこないと分解しちゃうよー？」

しーん。

適当に脅しをかけてみても反応が無いと言うことは、ここには居ないのか。

まあ分解云々は完全にハツタリだが。

人を分解とか出来ないし。出来てもしないけど。

それならば、と舞が行きそうな場所に思考を巡らせる。

すると、思い当たる場所が1つ。

「……………裏山か」

こんなときに何処行っただアイツ、と然したる証拠もないのに決め付ける。

まあ、多分居るだろ。勘だ。

そうと決まれば即行動、猛然とダッシュして裏山に向かう。

……………え？飛ばないのだった？

……………察しとけ。

~~~~~

雪。静寂。裏山にて。

ちらほらと雪が寒空を舞う中、搜索を続ける俺。  
舞が居るなら泉が頂上だろうと当たりを付けて探すことに。

暫くすると、泉のところ木にもたれ掛かりながら座っているのを見つけた。

「……………こんなとこで何をしてんだ？舞」

「ユウ!?!」

声をかけると驚いたように此方を向いてくる。  
その少しおかしい反応に疑問を感じ、良く良く舞の顔を見つめてみる。

「……これは泣いておるのではないぞ。汗をかいているだけじゃ」

いや、明らかに泣いてるだろそれ。速攻で墓穴を掘ったなコイツ。

取り敢えず舞の横に腰掛け、話を聞くことにする。

「……何で泣いてんだ？」

我ながら直球過ぎかもな、とも思ったが変に探りを入れるよりは良  
いだろう。

すると舞がむすっとした表情になった。

「……ユウには関係の無い事じゃ」

何時もの様に憎まれ口を叩く舞。普段は聞き流すのだが、今日は何

故だかそれが悲しく感じられた。

「……なあ、そんなに俺は頼り無いか？」

「……そういうことではないが」

「なら、お前の悩みを少しでも分けてくれよ。俺で良ければいくらでも背負ってやる」

この一年間共に過ごして来たのに、お前には関係無い、で済まされるのはこちらとしてもやりきれない。  
ならばと。少しでも悩みを共有出来るなら、それが一番ではないか。

「……そういう、お前の変に優しい所が……」

「………?」

少し赤くなりながら、呟くように話す舞。

………何だ、酔ってんのか？

「何だって?」

「……………いや、何でもない。……………お前のおかげで少し気分が晴れた、礼を言っぞ」

「……………そうか」

心なしか少し明るい顔になり、何が起きたのかは判らないが微笑みを浮かべる。良く判らんが、立ち直れたならば良いのだろう。助けになれたのかは知らんが。

207

そしてどちらともなく黙り込んだ。  
お互いの肩が触れ合う距離、俺達の間を暖かくけして不愉快ではない静寂が訪れる。

雪を受け入れて自らを波立たせる泉を眺める。  
この森も、泉も、旅に出たらば見ることが出来なくなってしまっ光景だ。

今更ながらに旅立ちを実感し、一抹の寂しさを覚える。

「……………のう、ユウ」

呼び掛けられて、舞の方を振り向く。

すると。

唇に柔らかい感触。

突然のことに驚いた俺だったが、目の前にある舞の顔を見て納得する。

ああ、キスされてんのか、と。

目を瞑って舞の背中に手を回し、優しく抱きしめる。

こつこつのは男がリードせねば、というのも込めて、優しく髪を撫で。

暫くの間そうしていた俺達だったが、不意に舞が唇を離す。

「……………私は」

潤んだ目で、しかし視線を逸らすことをせず、真っ直ぐ見詰めて来る。

「……………私は、お前が旅に出ると聞いた時、寂しかった」

「……………そうか」

「一緒に行こうかとか、どうにかして引き留めようとか考えていたが、もう止めだ。……………お互いに時間は腐るほど有るのだから、またお前と巡り合い、共に過ごせる日まで待とうと思っ……………これはその予約だ」

泣きそうになりながら、上目遣いで言う舞に、何とも可愛いらしさを覚える。

……………ここまで言われたらな。

「舞」

「……………何じゃ」

舞をしっかり見つめ、お互いの視線を絡める。

「俺は、必ずお前のところに戻る。例えいくら時間がかかろうともな。……………だから、その時まで待っていてくれると嬉しい」

「……………ふっ、当たり前じゃろう。私の唇はそれほど安くないのでな」

ふふっと笑う舞につられて俺にも笑みが零れる。

「だから、これは約束の証だ」

そう言って舞の唇に自らの唇を再び重ねる。  
そして、舌を使い舞の唇をこじ開ける。

「！？」

多少驚いたようだったが、すんなりと受け入れてくれたので舌を使うのに意識を集中する。  
歯茎まで舐めるように舌を這わせる。  
所謂ディープリキスだ。  
お互いに貪るように舌を絡み合わせる。

暫くの後、唇を離すとお互いの口に唾液の橋がかかった。

「…………お前は相変わらずいやらしいのお」

ニヤニヤしながらも、顔を真っ赤にして宣ってくる。

「でも、嬉しかっただろ？」

我ながらナルシスト気味な発言に多少恥ずかしかったが、まあそういう問題にすることもあるまい。

「……………馬鹿」

そっぽを向いて答える舞。

……狙ってやってるのか？

「舞、ありがとうな」

舞を膝に乗つけて後ろから抱きながら言う。

「何じゃ、急に」

「いや、俺の我が儘を聞いてくれて」

「……まあ、待つのも良い女と言うものだ」

「ははっ、自分で言うか？」

「異議が有るのかの？」

「……いや、無いな」

2人きり、湖畔にて話をする。

こんなのも、悪くないなと思える時間だった。



10・お酒は程々に(後書き)

10話でした。

過去の自分の文章を読み返してみると違和感を感じ。

自分の考えていることと文章から浮かび上がる情景の違いに啞然としました( ^ - ^ ; )

………もうちよい推敲したほうが良いのかな??

11・旅っていう字はゲシュタルト崩壊しやすい(前書き)

今回、繋ぎの話みたいなものです。

## 11・旅っていう字はゲシュタルト崩壊しやすい

「……皆さん、一年間本当にお世話になりました」

「また何時でも来てください、九条様！」

「こちらこそ有り難うございました！どうかお身体には気を付けて下せえ！」

「旅の安全を祈っておりますぞ！」

宴の翌日。

朝から旅の支度を済ませて荷物を持った俺は、今一度村の皆に別れの挨拶をしている。俺としては昨日挨拶を済ませたばかりなので普通に出発しても良かったのだが、是非とも見送らせて欲しいのとこのだった。

「長老。何から何まで有り難うございました。そして弥生さんも。身体には十分気を付けて下さいね」

「九条様、応援していますぞ」  
「私もですわ。優様もお達者で」

「有り難うございます。……そして舞も。色々有り難うな」

「うむ、旅に出るからには一人前になるんじゃないぞ。身体にも気を付けてな」

「ああ、有り難う。」

「……じゃ、行ってくる。」

皆、お世話になりました！」

『頑張つて下さい！』

『お気をつけてー！また何時でも来てくださいねー！』

村の皆の見送りを受けて歩き出す。

タイムスリップしてから、ずっと過ごしてきた村に別れを告げる淋しさと、これから始まる一人旅に期待を抱きながら。

雪融けの凜とした空気を感じつつ、一步一步をゆっくりと踏みしめて歩いて行くのだった。

さて、これから何処へ行こうかね。

~~~~~

さてさて、一人旅というのは普段の日常から切り離された時間を過ごすことによつて、様々な発見を得られる貴重な機会である。様々な発見と言つても、それは自然の雄大さや人の温かさだったり、はたまた自然の厳しさだったりもする。

では何故旅をすると、このような発見があるのか。普段の生活の中にも存在しているものを再発見出来るのか。

ずばり、それは周囲の環境の変化によるものである。一人で知らない土地に居ることと周囲に目を向け、細かな事でも気が付く、という事だ。これは統計的に見てもある程度の射を射ていて、だから『自分探しの旅』等と銘打った一人旅をする人がいるのかも知れない。何を発見するか、は人それぞれだが。

まあ、詰まるところ俺が言いたいの。

「俺の計画性の無さに愕然とした……………！」

そう、行き先を決めていなかったのである。

村に来た時とは逆の方角に暫く歩を進めていれば、何か視界に入るだろうという安易な考えで歩いていたのだが。蓋を開けてみれば、
というか開けるまでもなく何も無いのは明白だった。阿呆か俺。

「誰だよ旅に出ようとか言ったの。ちょっと表出るや」

……………俺である。

「俺であるじゃねーよ、その俺のせいでこちとら延々と歩いてんだよ。ふくらはぎパンパンなんだよ。」

嘘だけど。妖怪になった俺に死角は無かった。

しかし、いくら一年間縄文ライフに身を置いていたとは言え元がバリバリの現代っ子なので、精神的にはキツイ。地平線まで何も無い
ため、距離感も無くなってきた。

「空から眺めれば、何か見えるかも知れんが」

この状況を打開する方法としては、空から俯瞰して眺めることだろ
う。

ただ一つ、最大の障害としては……。

「……飛ぶの恐いなあ」

はい、飛べません。飛べませんとも。

この一年間、飛ぶ練習はしていたのだが、結局最後まで空を自由に
飛ぶことは叶わなかった。

しかし、少し弁解をさせて欲しい。そも、空を飛ぶという行為は人
間なら文明の利器に頼らない限りは不可能なものである。飛べるの
は妖怪やその他の人ならざる者達で、人外の証である、と俺は考え
る。更に、旅をするという観点でも、自分の足で歩く事こそが旅の
醍醐味であり真髄である。空を飛んではい到着、というのではそこ
に意味を見出だすことは出来ない。

大事なのは結果ではなくて過程であり、それが旅というものである。

つまり、何が言いたいかというと飛べなくとも俺は全然気にしてな
いし困ってもいない、むしろ飛ぶという選択肢を敢えて手放すこと
によって歩かざるを得ない状況を作り出しているのだから悔しくな

んてないさ。

……………いや、本当に。

「よし、奥の手を使うか」

という訳で空を飛ぶ以外の方策として、二つ目を決行する。
聞いて驚くなかれ、俺の策は108式までであるぞ。

「てれれてつてて〜ん。

木〜の〜え〜だ〜！」

某未来からやって来た青いタヌキ、自称猫型ロボットの声真似をしながら取り出しましたるは木の枝。

これを使えばだいたいのことは決められるというこの世の真理みたいなモンだ。まあどうやって決めるかと言いますと。

「そおいつ！」

突き抜ける大気圏っ！」

上に向かって全力で放り投げるだけ。簡単だね、皆も家の近くにある大草原とかでやってみよう。

暫く空を舞い、カランツと小気味良い音を立てて枝が着陸。

「……………東だな」

枝の先が東を差していたので東を目指す。適当なように見えるかも知れないがまあ偶然って必然の裏返しだから大丈夫だよな。

文句や意見がある人は「トウギャザーしようぜ！」と叫びながら夕陽の中を北に向かって突っ走って下さい。

そうと決まれば東に向かって一直線、今は昼過ぎなので徐々に太陽から逃げる形になるだろう。

少し急いだ方が良さな。

~~~~~

更に歩くこと数時間。

やはり木の枝は正しかったようで、草原の先に山が見えて来た。木の枝パネエ。

太陽が大地を紅く染め上げる時刻、その中をひたすら進んで行く。必要性は薄いかも知れないが、山に入れば身を隠せるし、大草原の只中で宿を取るよりはましだろう。

その安易な考えによって、この後の出会いが生まれることになるのは、この時誰が想像出来ただろうか、いや出来ない（反語）。

……… 兎に角この後ある妖怪と出会ったのだった。



## 12. はじめてのたたかい

夜の帳が降り、一段と冷え込んできた。

雪が音も立てず舞い落ち、すっかり葉を落として裸になった枯れ木に積もる。冬の夜というのは、深淵の闇に包まれているかのようで、木の葉のざわめきも虫の鳴き声さえも耳に入らない。しかしその静寂が何とも言えない懐かしさのような、温かさのような、そんなノスタルジックな心持ちにさせる。

さて、その雪山の中を俺は現在進行形で歩いている。何のために、と言われれば宿を取るためだと答えるのだが実はこの妖怪ボディ、睡眠もあまり必要としないようで、普段から一時間も寝れば体調は全快している。まあそれは最低限の話であって、もう少し睡眠を取るが。

という訳で、徹夜でも何ら体調的には問題無いのだが、律儀にも人間だった頃の規則正しい生活を心掛けているのだ。

当然この身体になってから睡眠欲に襲われたことは一度としてなく、また食欲も殆ど無いに等しいものであった。今携行している荷物も、普段から使う日用品ばかりで、食料は軽食程度と水しか入っていない。

所謂永久機関だ。

……ハイブリッドとか低燃費どころの話じゃないな。  
葉緑素でも持ってたのか？

「しっかし、何もねえな。せめて雪を凌げるところが欲しいんだが」

長時間雪の中を歩いているせいで、身体の芯まで冷えてきている。  
このまま夜通し歩くのは、流石に回避したい。

「……しょうがないか」

取り敢えず寝床だけでも確保するため、力づくで穴を作る事に。

雪を分解して酸素と水素を集め、毎度の如く爆破する。

地を揺らすような轟音の後、出来ていたのは山の斜面にぽっかり空いている穴。

この頃は加減も判って来たので、丁度いい塩梅の爆発を起こせるようになった。まあ使う機会は少ないんだけども。

そんなところで初日の旅はこれくらいにして。

「……取り敢えずはこの中で寝ますか」

優 は今夜の寢床を手に入れた！

優 は歩くのが嫌いになった！

……飛ぶ訓練を頑張ろうと心に誓った……。

「……お休み」

誰にともなく呟いて、ゆっくりと瞼を閉じるのだった。

~~~~~

翌朝。

「…………ふわ、…………ああ〜」

瞼越しに目に入る朝日と小鳥の鳴き声で目を覚ます。入り口から雪を照らして入ってくる光に目を細めながら、身体を起こして洞穴の中を見渡す。

昨日の穴を開けたままの状態で、今日も変わらず寒い。

旅の荷物、見知らぬ美しい女性、壁から少しずつ沁み出している雪融けの水。昨日通りだ。

「…………小鳥の囀りで目が覚めるのってなんか憧れるよな。目覚ましの嫌がらせの如き叫び声なら幾らでも聞いたけど」

いつも思っただが、あの朝という一定の時間における目覚まし時計のウザさは何なんなのだろう？何度力任せに叩き割ったことか。前日の夜にすっかり自分でセットしておきながら、翌朝に鳴ると奇について仕方がないという矛盾。しかもそれで起きれないと意識が完全に覚醒してからまた後悔するという悪循環。

いや、どうでも良いんだけど。

「…………あっ」

と、ここである事を思い出す。

あれやってねえ。

こつこつ場面では必ずと言って良いほどのあれを。

早速寝っ転がって、もう一度瞼を閉じる。

「テイク２行きまーす」

……………ゆっくりと瞼を開ける。

「……………知らない天井だ。」

一回で良いから言ってみたかったんだよねコソ。
やっぱこれだろ寝起きと言ったら。まあちょっと違うけど。

「……………お前は先程から一人で何をやっておるのだ？」

「いや、テンプレだから」

見知らぬ女性から疑問の声が上がる。

この時代にはまだ早すぎたな、うん。人類には早すぎるって奴だ。そこの見知らぬ女性が疑問に思うのも至極当然のことであり……………

「……………ん？」

ふと違和感を感じる。

……………俺は先程から誰と会話しているんだ？

見知らぬ女性とだ。何らおかしい点は……………ん？見知らぬ女性？なんだそれ、昨晚そんなのいたか？いやいや、さっき確認したからそんな訳が……………ん？あれ？

……………

「えーと、どちら様で？」

結論。誰だコイツ。

「ふん、鬼を恐れぬ妖など珍しい奴だ。だが、人に名を聞くときは先ず自分から、ではないか？」

いかにも正論で返してくる女性。確かに正論なのだが、その高圧的とも言える態度の為に何かと反論したくなるような、そんな雰囲気。つていうか彼女の種族は鬼なのか。確かに頭の右側から一本、曲がりくねった角が生えている。

「ああ、俺は九条 優。

只の妖怪には興味がありません。もし、危険な妖怪、幼女な神様、大人なお姉さん巫女がいたら俺の所に来ないで下さい」

「……………何だそれは？」

「禁則事項ですっ」

某非日常を求める少女から引用したのだが、これも今からすると未
来のことだから通じた方が吃驚だ。何かと問われても答えようがな
い。

……只、禁則事項のくだりは永遠に使わない。自分で言ってみて吐
きそうになった。『』の表現が意外と巧いなと思った自分を殴り
たい。

「で、あんたは誰？実はここ、俺の寝床なんだけど」

俺が寝ていた間に勝手に居座っていた鬼に対して、少しばかり非難
をこめた声を投げ掛ける。

名乗る時の礼儀について言う割りには、人が寝てる所に無断で入り
込むとか矛盾しているだろう。

「勝手に入ったのは謝るが、そう邪険にせんでも良かるう？同じ妖
ではないか」

そう言つて笑う女鬼。彼女もまた和服を着ていて、その表情、仕草
からは妖艶さを感じる。

寿命が長いらしい鬼でこれだけ成熟しているということは、それな
りに長生きしているという事だろう。

「実はな、向こう山の頂に居を構えて居るのだが昨晚この辺りで凄まじい爆発を聞いて見に来た訳だ。そしたら……中で男が一人寝ておるではないか。しかも、その穴の中は、稀に見る濃い妖気で満たされておった」

ああ、詰まりは俺が穴を空けるために起こした爆発を何事かと調べに来た訳だな。そしたら俺発見と。というか俺の妖気の制御はまだまだらしい。寝ている時などにはまだ隠しきれしていない様だ。

「……………お前は、鬼の性格を知っておるか？」

鬼が唐突に聞いてくる。

何だろうか、急に神妙な表情で。

「さあ、知らんな。何せ初めて会うもんで」

「……………ほう。ならば私が教えてやろう。」

壁にもたれ掛かっていた鬼が急に立ち上がる。

刹那、鬼の目付きが様を変えた。

能力で感じ取る事が出来る鬼の妖気が、凄まじい速度で膨らんでいく。

大気がビリビリと震え、威圧と緊張で心臓が激しく鼓動を打つ。

何だ！？何か気に障る様な事を言ったか俺！？そんなモン隠し持ってるなんて反則だ！第一お前が悪いだろう！？

頭の中に警鐘が鳴り響く。いくら俺が他の妖怪と初めて会ったからと言っても、流石にこれだけ濃密で膨大な質量を持つ妖気を浴びせかけられたら馬鹿でも判る。

こいつ、ヤバイ。

「そんなに警戒せずとも良いではないか、お主も相当腕が立つのであるっ？」

盛大に焦る俺を尻目に、妖しげな笑みを浮かべ、此方に歩みを寄せてくる女鬼。此の場の雰囲気とは完全にそぐわないそれは、何処までも美しく。

凜猛な光を浮かべる瞳だけが、その感情を体現しているようだった。

「……おいおい、バトルジャンキーかよ勘弁してくれ。そういうのは漫画の中だけで充分だ」

しかしてこれは紛う事無き現実、このままだと最悪命を刈られる。それで無くとも只では済まないのは火を見るより明らかだ。分子を操っている暇はないし、第一その程度ではこいつには通用しないだろう。

くそっ、逃げるしかねえ！

「我等鬼はな、お主の様な強い者を見ると、死合いたくなるのだ。それこそ己の全てを懸けてな。」

だから……………」

キラキラとした笑みを浮かべ此方に向かって一瞬で跳躍してくる。それを見て直ぐ様大きく右に跳ぶ。この際着地を考えるのは後だ。

「私と手合わせ願おうかッッ！！」

眼前まで迫る鬼の拳。

くそっ避けきれるか！？

『ズドオオオオン……………！！！！』

辛うじて直撃を回避し、直ぐ横で鬼の拳と固い岩壁がぶつかる轟音を聞く。

しかし固い筈の岩壁は一瞬の内に脆くも崩れ去り、鬼の怪力の前に成す術も無いようだった。

避けきれたと判った俺は急いで体勢を整え、一直線に出口から逃げ

出す。

後ろを振り返ってみると、山が丸ごと崩れて行くのが見えた。あれ喰らってたら死んだだろ俺。

何だあの化けモンは!?

今の俺のレベルどころか、はぐれメタルを刈りまくっても勝てねーだろアレ!?

ていうか荷物を持って来る余裕も無かったし。どうしてくれんだあの中には携帯も入ってたんだぞ。電池切れだったけど。

一目散に走りながら、割りとどうでも良いことを考えている自分に呆れる。

既に未練は無かったが、唯一無二の現代の名残を失い少し落胆するのは仕方がないだろう。

「どうしたのだ、そんなに慌てて。正々堂々と戦おうではないか」
回り込まれた!?

聞こえた声に顔を上げると先刻の鬼が。

どんだけ足早いんだよ鬼。

「くっ、いきなり殴りかかって来るのは正々堂々とは言わないだろ！？そんなモン卑怯だ」

少しでも時間を稼ぐために反論する。何か策は無いか！？

「……………確かにそれは否定出来んな。合い判った、私にも一つ条件を課すが良からう。私とて卑怯と呼ばれるのは本意では無いのでな」

……………あれ？意外にこの鬼良い奴か？
いや、いきなり殴りかかって来る奴に良いも悪いも無いだろうが、
そういう律儀さは持っているようだ。

予期せぬ展開に冷静さを取り戻し、少しの間思考を重ねる。
せっかく見えた生き残りの目を無駄には出来ない。

出来れば闘わずに穏便に済ませたい所だが、相手の方が実力が上だ
ろうしそれは無理だろう。

「……………なら、遠距離攻撃をしないでくれ」

ならば、なるべく俺が有利になるであろう条件を取る。近接攻撃しか出来ないのであれば、相手の動きだけに注意していれば良いだろうし、最悪逃げ回りながら戦えば勝てるかも知れない。

「良かろう。では、今から十数えたら再開だ」

女鬼があっさりと承諾する。それ程までに自信が有るのだろう。確かに、先程の威力を見せ付けられたら大抵の奴は戦意が砕かれそう

だ。
いち、にい、と数え始める鬼。少しでも距離を置かなければ直ぐに詰められてしまうだろう。速度も相手の方が速い。経験の量も相手が多い。

ならば、勝機は能力にしか無い。

恐らく、『分子を操る程度の能力』のことは鬼にはバレていない。穴を空けるために使ったことは使ったが、あれだけでは特定されていないはずだ。

リーチの外から少しずつ、というのが上策だろう。

先程崩れた山まで走って来た頃、鬼の「十！」と叫ぶ声が聞こえた。

さあ、死ぬ気で行こうか。

12. はじめてのたたかい（後書き）

受験前なのに小説執筆中。

・・・大丈夫か俺？

13 東方の二次小説です

今は、夜。

それは草木も眠る丑三つ時、というように静寂に包まれている時間。今の季節なら、空から静かに舞うように落ちてくる雪を見ながら熱燗で雪見酒、と洒落込む人も少なく無いかも知れない。

そういう穏やかな時間が個人的には好ましいと思える。それは単に性格故なのか、何か切っ掛けがあってそうなったのかは覚えていないが兎に角、夜は静かに過ごすべきであるというのが俺の持論だ。

しかし。しかしである。

「ねーねー優ー。そこの酒取ってよー」

「呑んでるかい？やっぱ男は呑みっぷりが良くないとねえ」

「ほら、もう杯が空いて居るでは無いか。遠慮せずにどんどん呑めい」

俺の周りには角がいつぱい、もとい鬼がいつぱい。彼等、彼女等に静かに風流を感じながら呑むという習慣、さらには発想も無い様で。

各々が好き勝手に呑みながら、夜通し騒いでいるのだ。

近所迷惑も甚だしいが、幸か不幸かこの近辺は鬼のテリトリーらしく他の人間はおろか、妖怪さえも見かけない。

まあ、単に鬼という強大な種族が幅を利かせているあたりに好き好んで居を構えよう等と考える勇者な妖怪が居ないだけかも知れないが。

そんな騒音の塊のような宴会場で鬼に囲まれて酒を無理矢理注ぎこまれている若者が一人。

無論、俺なのだが。

さて、何故俺がこの様な場所で呑気に酒盛りをしているのか疑問に思われる方もいるかもしれないが、否。

これは呑気な酒盛りなどではない。

戦争、というべきものである。

この状況になるまでの経緯を話そう。

~~~~~

その日の昼間。

俺はほうぼうの体で、岩場から岩場へ逃げ回っていた。

言うまでも無いとは思いが、先刻衝撃的な出会い方をした女鬼との戦闘中だ。

口から血を流し、左足を引きずる様にして走る俺は、その痛々しい体と反比例するように闘志を滾らせていた。

「くそっ、やっぱり実力が違いすぎたか」

やはり経験値の差は簡単には覆らなかつた様で、絶賛苦戦中だ。

いくら相手が近接戦闘しかなないとと言っても、それは此方が遠距離で相手を翻弄できるときに初めて意味を持つ。しかし、近接戦闘に持ち込まれたら完全に相手のペースに嵌ってしまうのが現状だった。

「・・・何とか打開する手だてはないものか」

最初の方こそ相手と良い勝負をしていた。

まずは相手の周囲の気体分子を全て無くし、真空状態を作りあげ、大気圧で動きを制限。流石にこれだけでは通用しないと考え、そこからさらに遠距離から水素で爆撃。

真空による重圧、酸素欠乏による制限、超質量の物理的圧力の三コソボだ。

先ず初めの二つだけでも相当あげつないが、相手は鬼。手加減などしていたら負けるので、短期決戦で勝つつもりだった。

そう、勝つつもりだったのだが。

爆撃を終えた俺は、完全に油断していた。あれだけの攻撃を耐えきれようなやつは有り得ないだろうと。確かに、自分でも流石にこれはやりすぎたかな、というレベルだったし。

しかし、死んでたらどうしよう、まあそれも自業自得かと呑気に考えていた俺の予想に反して爆発によって巻き起こった砂塵から現れたのは。

「くくっ……はははっ！良い！良いぞお主！これ程までに昂らされたのはいつ以来か！……さあ、二人きりで存分に楽しもうではないか！」

服はボロボロ、肌も煤けてはいるが確りと地を踏み、ほぼ無傷と言っ  
って良い姿だった。

「……マジで化けモンじゃねーか……！」

啞然としている俺をその目が捉え、こちらを見据えて来る。

・・・マズイ、逃げなければ。

近接戦闘の不利さを理解している俺は、失敗したと知って急いで逃避しようとする向きを変えた。

しかし、その一瞬。

凄烈な号音と共に俺の体が宙に浮いた。

・・・は？

余りのスピードに一瞬思考が止まる。

しかし、その思考も次に腹から伝わる凄烈な衝撃によって引き戻される。

「がっ・・・はっ・・・？」

ズドオオオオン・・・！

今までに聞いたこともない様な音と共に吹っ飛んで行く俺の体。視界が反転し、宙に浮く感覚が体を駆け巡る。

・・・は？今何をされた？

何も見えなかったとかいう次元ではない。＜何も感じなかった。＞その衝撃すら置いていくスピードに着いていけなかったのだ。

なんだそれ、さっきのとは格が違うじゃねーか！？  
山に空けた寝床での一件、あの時は辛うじて眼で追うことができた。しかし今度は見ることにすら、感じることにすらもできなかった。あの距離を詰めた上に更に更に知覚できない速度で殴ってく相手にどうやって勝てと言っんだ。

空中で体勢を立て直し、追撃に備えつつ相手の様子を窺う。

しかし、あの鬼がない。辺りを見渡せどもどこにもいない。

「くそつ、何処だ？」

「私は此処にいるぞ？」

直ぐ耳元で囁く声。

・・・まさか。

ゆっくりと振り返るとそこには笑みを浮かべた女鬼が。そのボロボロになって肌蹴た着物がいやに扇情的だ、とか思った俺は死んだ方が良いのかも知れない。

いや、今まさに死にそうだが。

「・・・何なんだよその身体能力。反則にもほどがあるぞ」

「おや、私は何もズルなどしておらぬぞ？ただ単に殴っただけだ。」

「殴るとかいうレベルじゃねーだろアレ。歩く核爆弾の称号をお前に譲るよもつ」

まだ手にしてはいないがな。

「ふん、随分と余裕そうだな。私の拳を受けてそこまでとは……。まだまだいけるらしいな」

あれ？何か両手を組んで頭の上で構えてますけど何すんの？

「全ての鬼の母の拳、しかとその身で受け止めよ！」

ですよー！。

音速を超えるんじゃないのって速度で両手を振り降ろしてくる。当然空中なので、自由に動けない俺に避けるという選択肢はない訳で。

ドゴオオオオオオオオンン……！！！！

二度目の衝撃。いや、爆撃といっても差支えない。

高速で地面に向かって一直線に吹っ飛んでいく。

そして地面とぶつかる衝撃。能力を行使する暇も時間さえも無い。

爆音と共に地面に打ち付けられる。それだけでは止まらず、周囲にクレーターを作りながら大地を抉っていく。

「……痛つてえな」

まだ意識があるというのが不思議なくらいだが、ここで今更引くわけにもいかないので、身体をゆっくりと起こす。どうやら骨に異常

はない様だ。

なんと強靱なのだろうか、この身体。しかし、そこまで甘くはなかった様で立ち上がると左足に痛みが。力も入らない。

「・・・もってかれたな」

しかし、ゆっくりしていると追撃が来るのもたまたまするわけにはいかない。砂煙が舞っているうちに急いで山陰に身を隠す。正直、勝てる見込みはゼロだ。元々が違いすぎる上にこっちは重症。相手は無傷同然。結果を見るまでもなく、俺が負けるのは決定したようなものだろう。

しかし、それでは気に入らない。

こちらら寝込みを襲われていきなり理不尽な要求を飲まされてんだ。少しくらい反撃しないと割に合わないではないか。

「・・・よし、これで最後だ。どうせなら派手に行くか」

隠し持っていた最後の水の器を取り出し、水素、酸素を生成。俺の後ろに配置して、山陰から身を晒す。

「こっちだ、鬼よ」

「・・・目が据わっているな。何を思ったのだ」

「いや、今からやっと本気を出そうと思ってな。お前みたいな美しい女性を殴るのは気が引けてたんだが、遠慮は要らんと判った」

「……ふん、あまり軽い口を開くと後悔するぞ？原形を留めたいであるじ？」

「……この鬼め」

「まさしく、な」

こんな絶体絶命な状況でお喋りが出来る程には、この一年成長していたのだろう。それとも精神が妖怪に引っ張られ始めているのか。

まあどっちでも良い。あいつを一発殴るのが先だ。

「お喋りはここまでにして、再開しようか。ほら、かかって来いよ」  
なるべく相手を挑発して距離を詰めさせる。

すると思惑通り、相手が乗ってきてくれた。挑発と判ってはいるのだろうが、自尊心が高いのか途端に怒りの表情を見せる。

「……もう言うことはないな？妖よ」

「これからくたばる奴に言うことなんてねーよ」

「……ふん、後悔するなよっ！」

言うが早いか、突っ込んで来る構えを見せる鬼。今までのパターンからして、やはり見えない速度で飛んでくるのだろう。とすれば、こちらに残された機会はたった一つ。あいつが俺を殴り飛ばす瞬間だ。どんなに移動が速く、捕えられなくとも動いていない俺を殴るためには一度減速する必要がある。その瞬間を狙ってクロスカウン

ターしかない。しかし、この作戦には大きな穴が。相手の攻撃を喰らうと、こちらが飛ばされてしまう点だ。だから、ここで俺の能力が出てくる。後ろに水素を配置したのはこのためだ。

「・・・さらばだ、名も知らぬ妖よ。お前とは違う形で出会いたかったものだ」

目の前で、女鬼の声が聞こえる。相変わらず反則じみた動きだ。

・・・今だ！

後ろに石を投げ、火花を起こさせる。それと同時に、腹に凄絶なインパクトが伝わる。

・・・計画通り。

痛みに耐えながらも、目の前の女鬼の顔をしっかりと見つめて言う。

「ふっ、早くも勝った気かよ？」

その瞬間。

ドゴオオオオオオオオオオ！！

「なっっっ！？」

俺の後ろで大規模な爆発が起きる。その爆風で殴られた衝撃を相殺、という寸法だ。一気に気圧が下がり、背中にも大火傷を負うが、ここは気合。

「油断した結果がこれだ。お前は俺に殴られる。」

「・・・だが、それだけのためにそれほどの犠牲を払っていては意味が無いのでは無いか？」

「うるせーな。これは俺の最後の抵抗だ」

右拳をグッと引く。そして女鬼の顔面に俺の拳が・・・

入らなかった。

俺の拳は、顔の目の前で止まり、それ以上進むことはなかった。眼

前で寸止めされた拳を見て、鬼の目が見開かれる。

「お前の顔を殴ることは出来な・・・かつ・・・」

膝を折り崩れ落ちゆく俺。いや、ホントは殴れなかつたとかではなく、単純に力尽きただけなのだが。流石にこんな満身創痕の状態で殴ったところで意味は無いだろうし。ただちょっと格好が付くか、ぐらいの言葉だ。負けた方に恰好も何もあるのか、というのは置いといて。

ああ、これ程までに健闘したんだからもういいよな。

もう限界だ。

後は野となれ山となれ。

薄れゆく意識の中で、女鬼の微笑みを見た気がした。

~~~~~

「……い。起き……って」

誰かに呼ばれているような気がする。幼い様な、それでいて何処か余裕を持っている様な。兎に角今までに一度も聞いたことがない様な声音だった。

「……」

しかし、身体は金縛りにあったように重く、まるでここだけ重力が万倍になったかのようだ。到底起き上がることなどできないし、まですしたくない。後三日位寝かせてくれ。三百円あげるから。

「……もう眠り続けて三日かぁ。この妖が目覚めるまで母様が我慢出来れば良いけど……無理だろなぁ」

そんな声を聞いてうつすらと目を開けてみる。するとそこには頭に二本の曲がりくねった角が生えている幼女がいた。どうやら彼女も鬼らしい。

「お？目が覚めたかい？いやー良かったよ、これでやっと酒に集中できる」

………寝るか。

「え？ちよつと、何でまた寝ちゃうのさ？せつかく目が覚めたんだから一緒に酒呑もうよー」

ぶつちやけうるさい。こちらら鬼に殴られたせいで消耗してんだ、少しくらい寝かせてくれたって良いじゃないか。

「あと二時間……」

せめてもの情けとしてそれくらいは許して欲しい。そんな気怠げな声で告げると途端に鬼（幼女）がその顔を耳元に寄せて呟いてくる。

「……早く起きないと母様に食べられちゃうかもよお？」

「かかってこいや、五万年後に相手してやる」

そう言い放ち、再度布団に潜り込む。……この布団の肌触りは良いな。この時代の物とは思えないほどさらさらとしていていつまでも眠っていたくなるような代物だ。

「はあ、意地でもおきないんだねえ。母様はその強い意志に惹かれたって言ってたけどほんとにこいつがそうなのか……」

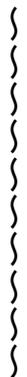
隣でなんかごちゃごちゃ言ってるが、眠いもんは眠い。脳内ではそろそろ大魔王スリーマに白旗を上げようとしている。

………やつは無理。おやすみなさい。

「………つてあらら。ほんとに寝ちゃったよ。鬼の横で爆睡するとは、中々肝の据わってるやつだねえ。それとも単に考えなしなのかな？まあおいおいわかるだろうさ」

そう言つて幼鬼は部屋から出ていく。見張りが云々言っていた割には呆気なくその任を放棄したが、この寝ている男に害は無さそうだという判断の元だろう。例えこの男が暴れ回ったとしても、軽く取り押さえる事も出来るから、というのもある。

そんな訳で、自分も酒盛りに加わるべく襖の向こう、鬼達が酒を酌み交わしている大宴会場へと足を踏み入れるのだった。



「・・・・・・・・知らない天井だ」

遠くから聞こえる賑やかな笑い声に起こされて、目を開けて見るとそこには天国でも地獄でもなく、普通の天井があった。

「・・・・・・・・何？生きてんの俺？」

どうやらあの鬼に殺された訳では無さそうだ。天国がこんなに生活感に溢れているわけがない。もしそうだとしたら神様御免なさい。舞じゃない方の。

「なにこの布団寝心地良い。持って帰って良いかな？」

横になりながら布団の模様を見てみると、豪華な刺繍があしらわれているのが見えた。これは・・・・・・・・百合の花だろうか、何にせよ身分の高い人が使ってそうな高級感溢れる布団だ。

部屋の中を見渡してみると、そこにはよく判らない骨董品らしき物や様々な宝飾品など豪華絢爛とも言える作りになっていた。どうやらこの部屋の持ち主は相当身分が高いらしい。しかもこんな部屋に

見知らぬであろう男を一人で寝かせておくなど相当腕に自信があるか、若しくは只の阿呆だろう。でなければこんな品物を盗られやしないか不安で見張りの一人くらい付ける筈だ。

一つくらいパクってもバレないんじゃないや、持ち主があつた鬼だったら殺されるし助けてくれたのが関係ない人だったらそれは恩を仇で返すような事になるし止めとこう、くらいまで思考を重ねたところで後ろにあつた部屋の襖が開いた。

「・・・おっ！？やっと目が覚めたねえ。もう4日も寝てたんだから心配したよー」

振り向いて見ると、そこには幼鬼がいた。あれ、何処かで見たような・・・。

ああ、確か一回覚醒しかけてまた寝たんだっけか。その時に見た様な気がする。

「寝起きのとこ悪いけど、母様が呼んでるから着いて来なよ。いや大丈夫、取って食ったりはしないさ、母様はあんたのこと気に入ってるみたいだし」

「……此処何処だ？」

「まあそれも向こうで説明するよ」

どうやら母様なる人物が此処を取り仕切っているらしい。まあ人物と言っても鬼なのだろうが、危害を加えられる事は無さそうなので大人しく着いていった方が良さだろう。

そう思つて重い腰を上げる。やはりまだ全快してはいないようで歩き方がぎこちない。生まれたての子馬の如く歩きながら幼鬼についていく。

こんな歩き方をしている俺が言うのもなんだが、この鬼大丈夫なんだろうか。酒に酔つ払っているのか前後にフラフラしながら歩いているんだけど。横を歩かれたら角がうっかり刺さりそうで気が気でない。

「そう言えばあんた母様に一発入れかけたんだって？」

廊下を歩きながら、幼鬼が訊ねてくる。酔つ払っているのに呂律は回るんだな。

「……母様つてもしかしてあの鬼の事か？」

「あの鬼がどの鬼なのかは知らないけど、まあ多分その鬼だよ」

「・・・何、あいつ鬼を仕切ってるの？」

「そうだけど・・・って、母様をあいつ呼ばわりなんて、やるねえあんだ。名は何て言うんだい？」

「・・・九条 優だ」

「ふーん、私は伊吹 萃香って言うんだ、よろしくね」

伊吹・・・酒吞童子しゅくたんどうじか、これまた中々の有名処だな。

何故幼女なのか、という疑問はスルーする。

「ほら、この中で待ってるよ」

一番奥にあつた豪華な扉の前で足を止め、先に入れと促してくる。ぶつちやけた話、この前殴り合つた相手と顔を合わせるといふのは少々気まずいが仕方がない。というか一方的に殴られた訳だし俺悪く無いよね？怒られないよね？

そんな自己擁護を並び立てて襖を開けて見ると。

「おお！漸く目が覚めたか！いやー、このまま目が覚めぬなら無理矢理にでも起こしに行こうと考えていた所だ」

一番上座に座っている、この間俺をフルボッコにしゃがった、誰もが見惚れてしまいそんな妖艶な姿をした鬼と。

「母様が行くと大抵の男は干からびてしまっじゃあないか」

なんか体操服みたいのを着た、一本角が特徴的な姉御な感じの鬼。

その他大勢の鬼が酒を浴びる様に呑んでいる真っ最中だった。

「・・・此処に入らなきゃいかんのか？」

隣にいる伊吹に出来るだけ嫌そうな表情で問いかける。なんだこの状況。一升瓶らしき物体が山積みになっているとこなんて入りたくない。入ったら最後、アル中コースまっしぐらだ。

264

「どうして嫌なの？」

「いや、これは酒盛りじゃないもの。我慢大会だもの」

「これくらい鬼の宴会では普通だって。ほら、男ならドンと構えな
」！」

「いや、人間だもの」

せめてもの抵抗を見せたが、あっさりと流されて敗北。いつまでも

入り口に突っ立っているわけにも行かないので、ゆっくりと部屋に足を踏み入れると噎せ返るような酒の匂い。良くこんな中で呼吸出来るな、と思つて周りを見回すと、多くの鬼が好奇に満ちた目で此方を見てくる。やはりその殆どが顔を赤くし、酔っ払いであることが判つたのであまり怖くはないが、それでもいい気分はしない。

「・・・なあ伊吹、俺の顔に何か付いてんのか？」

「萃香で良いよ？・・・そうだねえ、みんな母様に一目置かれた妖に興味津々つて感じじゃないかな。気を悪くしないでね」

多くの目に晒されながら中央を歩いて行き、遂に『母様』の前に。先日見た服とはまた違う美しい着物を来ている。いや、モデルが良からなのか高そうに見えるだけなのかもしれない、着物の価値とが良く判らんし。しかもそれを大分肌蹴て着崩しているもんだから目のやり場に困る。

・・・正直、堪りません。

「取り敢えず腰を降ろすが良い」

威厳たっぷりと言う母様。舞の当社比五割増ですつて感じ。まあ母

様、と呼ばれるくらいなのだからそれくらいで無くてはダメなのだろう。

ゆっくりと頭を下げ、腰を降ろす。一応、鬼の集団の中に居るのだから敬意は見せておかねばなるまい。

「そう畏まらんでも良い、気にせぬ」

「・・・そうか、それは有り難い」

使い慣れない敬語を話すのは俺に取っては労苦なのでその申し出はありがたかった。

「それで・・・何故俺は此处に居るんだ？」

まず最初に疑問をぶつける。何故俺は生きているのか、どうして彼処で寝ていたのか、あの後戦いはどうなったのか。全ての意味合いをこめて質問したのだが。

「お主を気に入ったからじゃ」

以上です。

「いや、意味判らん」

「・・・何か不服があるのか？」

「不服しかねーよ」

「気にするな、それで万事解決じゃ」

どうやらその事について議論する気はないらしい。さっさとこの話題を終わらせたいという魂胆が見え見えだ。

「じゃ、これから俺はどうなるんだ？やっぱ強制労働的な何かをせねばなんのか？」

鬼の総本山にこんな若い妖怪がいて対等に付き合っていけるわけはないだろう。精々僕が良いところだろう、勿論そうになったら逃げる気は満々だが。

「いや、此処に留まるもよし。出ていくもよし。お主に労役を課すなんて事はせん」

「・・・良いのか？」

「良いも何も、鬼はどこまでも正直で、素直な種族。その様な卑怯なことはせんぞ」

・・・これはこれで困った。これからどうするのかを明確に決めて

いなかったもので、いざ放り出されると何処に行けば良いのか判らない。しかも、あの戦いで少なかったとは言え旅荷物を失ったのだから旅もし辛いだろう。

「……じゃあ、此処で暮して良いか？」

すると、周りにいた鬼が啞然とした表情になる。

ん？何かおかしかったか？

「……お主、鬼を恐れんのか？」

こちらにも例に漏れず驚いている母様が、ゆっくりとした調子で聞いてくる。

「……何処に恐れる要素があるんだ？」

確かに、鬼の身体能力は半端ではないし、好戦的であるというのも否めない。だが、実際に触れてみると何とも陽気な奴らで戦闘中は全然違うことが判った。その戦闘も、あまりにも強大な力を持つ鬼という忌避されがちな種族故の行為であろう。まあ多少当てつけに近いところはあるかも知れないが、本質的には悪い奴らではない。これが俺が感じた鬼という種族だ。

「……くくっ……くはははっっっ！！」

するといきなり母様が笑い出す。え？何？酒の呑み過ぎで遂に壊れた？
怪訝な視線を向けるとそれに気づいたのか、笑いを止めてしっかりと視線を合わせて来る。

「いや、これ程までに腹の据わった妖を見るのは久しぶりと思つてな、
済まんの」

良く判らんが俺の返答に笑いを見出したらしい。

「よし、お主を我が一族の一員として認めよう。……名は何と言
う」

「ああ、九条 優だ」

「そうか、私は姫百合ひめゆめ 紅べに。一族の頭としてお主を歓迎しようぞ」

……そんなこんなで、俺の生活 with 愉快的な鬼達が始まった訳だ。

~~~~~

そして、冒頭へと戻る。

鬼達と一緒に暮らし始めたは良い物の、特に仕事もなく、その日その日を楽しく過ごすことが仕事、と言わんばかりの宴会の連続だった。

ここで知り合いになったのが、初日、紅と一緒に呑んでいた体操着の鬼。名を星熊ほしくま勇儀ゆうぎという。

恐らく、伊吹翠香もとい酒吞童子の部下だったと言われる星熊童子であろう。こちらは何故お姉さん系なのか、という疑問は投げ捨てておく。何と言うか、気にしたら負けだ。

さて、宴会を毎日の様に開いている、と言ったが、その宴会。

鬼の社会な訳であり、当然鬼が基準の宴会な訳である。つまり、何が言いたいのかという点。

「なに！あたしの酒が呑めないって言うのかい!？」  
やたら絡み酒な勇儀と。

「ねえねえ、お酒頂戴よ。その杯に入ってるのでいいからさあ  
」  
俺の酒を横取りしようと絡み付いて来る翠香と。

「・・・今宵は二人きりで朝まで飲み明かそうぞ?・・・..  
あに、部屋には誰も入れん、酒を味わうも、私を味わうも好きにす  
るが良い・・・」

耳元で囁くように挑発してくる紅の存在が、この上ない悩みの種  
です。

いや、この状況、けして笑えない。羨ましいとか思っただ奴は挙手し  
なさい。そしてそのまま頭に振り降ろせ。

なぜ笑えないのかというと、まず周りの目が痛い。

ここで補足だが、実は紅、鬼子母神と呼ばれるもので、まあすべての  
の鬼の母の様な存在だ。現代には、こういう話が伝わっている。そ  
の子供の数は500とも1000とも10000とも言われていて、  
しかして他人の子供、特に幼児を取って食うような悪逆をしていた  
という。それを見かねた釈迦が、彼女が最も愛していた末子を隠し、

それによって親の心を知った彼女は仏教に帰依したという。安産や育児の神とされ、また法華経護持の神ともされる。別名かりていも詞梨帝母。

……とか何とかいう、妖怪界でも屈指のビッグネームだった訳だ。そんな彼女に絡まれている妖、となれば注目が集まるのは必至で、この頃の鬼の間ではいつ俺が理性を失うかの賭けまでおこなわれているらしい。しかも、紅もそれを知って自重するどころか更に過激なことをするように、収拾が付かなくなってきた。翠香や勇儀に助けを求めようとも、どちらかというところ側なの  
で、トリプルで仕掛けられてる訳だ。これぞホントの三重苦。

「ほら、遠慮せずにどんどん呑め。私が注いでやるうか?」

苦役はそれだけでなく、更に根本的なところにも。

「おい馬鹿勇儀やめろなにをす……………ぐぼっ!」

酒が……………怖いです。

なんなのアレ。キツ過ぎ。いくら俺が妖怪になって酒に強くなったからと言って、火をかざしたら引火して轟々と燃え盛る液体をそんなに一気に飲める訳がない。

「ちよっ!……………ぶはっおい勇ぐぼっ!……………おい勇儀!い

い加減に・・・」

「アア！？口移しじゃないと呑めないってかぁ！？上等だア口開けるオ！」

「誰もそんなこと言ってねーよ阿呆！」

「今阿呆っていったろ！。ううゝ母様ゝ優がいじめるゝ！」

「何！？お前はこんな幼気な子に意地悪をするというのか？よし、私はその性根を叩き直してやる！今晚私の部屋に来い！」

「いや、その子俺より何百倍も年上だから！とっくに幼気の範疇から出てるから！」

・・・苦難はまだまだ続きそつだ。

### 13 東方の二次小説です（後書き）

久しぶりの更新。

ウチの鬼子母神は弱すぎたかもしれませんが、まあ大昔なのでこれくらいかなと。

#### 14・織田さんパネエ

鬼の中で暮らし始めてから数日。鬼という種族は気さくというか誰にでもフレンドリー過ぎるくらいのアプローチをかけてくるので、大体の鬼とは知り合いになった。実際、酒の席で酔っ払って絡んでくるというのが多かった気もするが、それが鬼という種族なのだろうということも割り切った。そうしないとやっていけないという事情もあつたのだが。彼等は非常に情に厚く、また友好的であるのでとても親しみやすくこちらとしても気が楽だ。

また、悩みの種となっていた宴会だが、酒については解決した。酒の中のエチルアルコールを抜いてから呑むという裏ワザを見出したのでそう簡単に酔っぱらうことはなくなった。まあ、アルコール無しの酒はあまり美味しくはないが、酔いつぶれて大変なことになるよりは随分とましだろう。ここで言う「大変なこと」というのが、もう一つの悩みに当たる。如何にして、鬼達の誘惑を受け流すかという事だ。酔っ払ってしまったが最後、何をされるか判らない。一度、紅の部屋に連れ込まれかけたところで意識を取り戻し、危ないところだった。それ以後酒は分解してから呑んでいる。襲われたくないし。

皆さんは覚えているだろうか？初日に勇儀が紅に諫めていたのを。俺は確かに覚えている。

「男の所に行ったら、男が干からびてしまつ」と。

やはりそれは、そういうことなのだろう。まさか「男を干からびさせる程度の能力」を持っている、とかのオチではあるまいし、まだこの年で腹上死などしたくないので、今のところ受け流しつつ逃げているところだ。

「ところでさー優。何歳ぐらいなの？」

「俺か？……そうだな、今18というところか」

ある日の昼下がりに。この日もこの日とて変わらず真つ昼間から酒臭い翠香が何故か俺の膝を陣取っている。何故ここなのか、と聞いてみると、居心地がいいから。だそうだ。俺の居心地は無視か。まあ次第にどうでも良くなってきたし、まあ絡まれるよりは相当マシか、と諦めが入ってきてるあたりが絡まれやすい所以なのかもしれない。

「またまたあゝ。そんなウソ、流石に判るよ。私だって伊達に長生きしてるわけじゃないんだからね！」

膝の上で無い胸を張られても困る。取り敢えず角を持って持ち上げてみる。

「えっ？ちょっと何すんのさ、降ろしてよー！」

「何って、ナニだが」

「……えっ、ちょっと待ってそういつ事は心の準備をしてから」

空中で腕をブンブン振り回しながら真っ赤になる翠香。なにこれ可愛い。

「翠香」

「……何？」

「……なんちゃって」

ゴパン！

腹に良い蹴りを貰った。

「人の乙女心を弄ぶ様な男には制裁があつて然るべきだよ」

「乙女とかいう年齢じゃないのは気のせいだろうか」

「気のせいだ」

「そうかい」

ゆうは あまりふかくつつこんではいけないわだいを まなんだ  
!!!

「ところで、ホントに18なのかい？0もつかないの？」

「ああ、まだピチピチの学生だっ！」

「・・・すつごく殴りたくなった」

「気のせいだ」

「気のせいか」

便利な言葉だね、気のせいって！

二人でこんな感じにグダグダしていると、部屋の襖があいて勇儀が入ってきた。

「おい、二人とも遊んでないで宴会の準備手伝ってくれよ」

「・・・また宴会か？昨日もやっただろ」

「何言ってるんだ、宴会はいくらやっても楽しいだろ？」

「そうだそうだー」と翠香も続く。未だ角を掴んでいるので、宙ぶらりんのままだが。

しかし鬼達の元気と俺の気力は反比例しているので、俺としてはそう樂觀視してもらえない。何と言っても貞操の危機なのだ。

「お前等が絡んで来なかつたら楽しいんだけどな」

「私は知っているぞー母様や勇儀に抱き着かれて鼻の下を伸ばして  
るじゃないか」

「あらそうだったのかい、言ってくれりゃどれだけでもしたげるの  
に」

「この痴女め」

「心に正直なだけさ」

「そうだそうだー」

「萃香は当てる胸無いだろ」

「ひどいっ……!」

三人で比較的どうでもいい話題を交わしながら宴会場に向かう。鬼  
の中でも特に仲良くなったこの二人。何でも、『四天王』とか言わ  
れる存在らしく鬼の中でも特段強大無比な力を保有しているらしい  
が、普段のこいつらを眺めていると到底そうは思えないのは致し方  
ないのだろう。だって常に酔っ払いだし。

さて、宴会場に向かっていった俺達だったが勇儀がふと思い出したか  
のように俺に言葉をかけてくる。

「そう言えば優。母様が呼んでたぞ。何でも今日の酒の席で話が、それも比較的真面目な話らしいが」

「・・・決闘のお誘いなら20年先まで予定が」

「違うよ。何かまた別の事だって」

「激しく行きたくねえ」

あのバトルジャンキー&ウルトラ痴女の鬼子母神からの呼び付けとなれば、マトモなものではないことが容易に想像される。何なのだろうか。

「ほら、ぼけっとしてないでさっさと瓶を片付ける」

まだ片付けもしてなかったのかよ。

~~~~~

その日の夜。

相も変わらずこの日も宴会。こう毎夜毎夜盛大な宴を開いて何故酒が無くならないのか、という疑問を持った俺に、親切な若い鬼が『酒虫』なるものの存在を教えてくれた。何でも、その虫の特殊な体液によって少量の水を大量の酒に変えることが出来るらしい。全国の酒豪歓喜。でも現代には存在しません。涙目になつとけ。

しかし、『酒虫』の生態には少し興味が沸いた。水分子からどうやってアルコールを作り出しているのかは謎だが、もし解明出来れば俺の能力も大分発展を遂げることだろう。分子を分解、結合する作用を持っているのか？はたまた原子自体を変化させる事ができるのか？要研究だ。

さて、小難しい話はこれまでにして、目の前の惨状への対策を立てたいと思う。何が惨状か、と問われてもはつきりとは答えられない俺の語彙力の欠乏を許してくれ。強いて言うならば………全部、だ。

そこいら中に転がる酒瓶。部屋全体にこれでもかと充滿した酒気に酔っ払って殴りあい始める鬼達。それが冗談で済むのなら良いが、

そこは流石というか不幸なことというか強大な力を持つ鬼同士。当然の如く周りに衝撃の余波が及びその度に周りの鬼から鉄拳制裁を受ける。多分あれ凄く痛い。鬼だから耐えられてるけど、俺が喰らったら地球の核まで掘り下げていく自信があるね。それはもう凄まじい衝撃で、これだけでも鬼の宴会というものがどれだけでも過激か判るだろう。

更にここから俺には、何故か三人分の絡み酒の重荷が加わるのだが。理不尽だ。

「……………で？話って何なんだ？」

目の前に座っているのは紅。その名の如く、赤を基調としたこれまた高そうな着物を着て優美に構えている。腰まで伸びた長く美しい黒髪が神聖さすら感じさせる居住まいだ。

「…………いや、大したことはない。これから私の部屋で呑まないか」

「丁重にお断りします」

早速腰を上げて帰る。

「ちよつと待て」

帰ろうと思ったが、制止の声がかかったのでその場で立ち止まる。

.....

そして五秒程の沈黙。

「.....ちよつと待ったぞ」

再び踵を返す。嘘は言っていないだぜ。

「お主は舐めとるのか」

首筋を掴まれて引き戻される。

「いや、まだ死にたく無いから」

紅の部屋で呑むだと？そんなことしたら喰われるに決まってるじゃん。こいつがわざわざ賑やかな宴会場を離れる理由はそんなくらいしか思い浮かばない。

「なに、喰いなどせん。少しゆっくりと話がしたいだけの事。この名に誓おう」

「本当か？」

「本当だ」

鬼という種族は基本的に嘘をつかない。言いたい事を言いたい様に言う、という訳でもないがはっきりと物を申す場合が多いため、こついつときは信用に値するだろう。もしそう言う事をするなら、普段の様に直接来る筈だ。

「……じゃあ良いぞ」

俺だって男。こんな美人とサシで飲めるとあらば少々の危険を犯すのも吝かではない。問題は中身なのだが、まあ気を付けて入れれば何事もなく朝を迎えられるだろう。アルコールを分解するというチートを身に付けた俺に敵はないぜ。

「うむ、それは重畳。では参ろうか」

杯を持って立ち上がる紅。まだあまり呑んでいないのか足取りはしつかりとしたもので、歩く度にその美しい髪が揺れる。成程これなら女神として崇められることになる訳だ、と一人納得し、共に歩き出す。

「ああー！母様が優と抜け駆けし……ぶっ！！」

騒ぎ立てる萃香に取り敢えず瓶を投げ付けておく。変な噂を立てられたら困るしな、ぶーたれている萃香はガン無視で。

~~~~~

紅の部屋にて。

やはりというか当然の様に、俺が一番最初に寝かせられていた部屋は紅の部屋であり、相変わらずの豪華さに舌を巻くほどの部屋であった。月明かりが窓から差し込み、蝋燭の煌々と照らす光と相まって何とも言えない雰囲気を出している。そんな中で紅と二人きり、静かに酒を酌み交わす。紅はこの雰囲気を感じているのか全く喋らず、俺はと言えば元来から静かに呑むことを理想としていたのでこの誰にも邪魔されない時間を存分に堪能していた。鬼の頂点に君

臨している鬼子母神が、こんな酒の楽しみ方することに新鮮な驚きを感じつつも、月を見ながら酒を嗜む美女、という何とも様になる光景を眺めながら俺も自然と酒がすすむのだった。

「……………」

「……………」

しかし本当に喋らない。いつもの紅を知っている側としては、そりやもう天地が引つ繰り返つても有り得ない様なことが目の前で起きているのだから、逆に心配になってくるくらいだ。明日は空から核爆弾でも降ってくるんじゃないか？

「……………何だ、さつきからジロジロと。遂に私を押し倒す決心が付いたのか？」

俺の視線に気づいてニヤニヤしながら問いかけてくる紅。こちらの気を知ってか知らずか肩を大きく露出させ、誘うかの様な動きで酒を呑む。何故酒を呑むだけで斯様に妖艶に映るのか、それは紅自身から伝わる雰囲気依るものだろう。

「ちげーよ、鬼の頂点のお前がこんな風に酒を呑むこともあるんだ

な、と認識を改めてたところだ。」

「そうだな、鬼の母たるもの、酒に知らぬものなどあるわけがないだろう。月見酒から鬮酒まで何でも御座れだ」

「・・・マジか」

因みにここで言う鬮酒、というのはかの第六天魔王、織田信長が浅井久政・長政父子、朝倉義景の頭蓋に金箔を貼り、酒宴の際に杯として家臣に吞ませたというアレである。実際には使用していないらしいが、薄濃はくだみにするというのは死者への敬意を表す儀式でもあったというので、それを尾ひれを付けられて噂を流された信長が如何に大きな存在であつたかというのが窺い知れるだろう。

閑話休題。

そのような酒の呑み方をするとはいやいや魔王か、いやいや鬼であつたと意味もない思考をしているとそれがどんな風に映つたのかは知らないが、紅が顔を寄せてきて、なに、お前でしょう等とは考えておらん、と言ってきた。そりゃ良かった。

「ところで、お前は何と言う種族なのだ？」

「いや、それが俺にも判らん」

実は、未だに種族について何も分かっていない。しかしそれほど困るといふ訳でもなし、追々何か判るだろ、程度に考えていたので知ろうともしていなかったのだが。

「聞いたぞ、お前はまだ十数年しか生きとらんらしいな。普通の妖であれば、その様な月日でそこまで強大な力をつけることは無い筈だ」

どうやら俺の場合はかなり特殊らしい。以前弥生さんにも言われたが、まだ妖怪化してから何年も経っていないというのに、そこそこ強大な妖力を持ち、更に種族さえも不明。特に特徴があるわけでもなし、日の光の下を歩き、人間の様に夜は眠る。

「……あれ？もう人間でいいんじゃない？」

「鬼のように種族の利を得ているわけでもなし、それで私に拳を迫らせるなど……お前はほんに不思議な奴だ」

先ほどとは打って違って純然たる美しい微笑みを浮かべている紅。その慈愛に満ちた女神の様な笑みは、それだけで酒の味も霞むほどクラクラするものであった。

「……………ん？クラクラする？」

「……………どうしたのだ？」

俺の変化に気づいて紅が眉を寄せる。

「……………酔っ払った」

ここで自らの大失態に気づく。酒のアルコール分を分解し切れなかったのだ。ここのところ、酒を呑むときには勝手に分解するという癖のようなものが付いていたので少し油断していたのかもしれない。ここで理性を失ってしまったら今までの苦勞が水泡に帰すので何とかして正気を保たねば。

「何だ、近頃急に酒に強くなりおったと思えば、もう出来上がりか？」

そう笑いながら言う紅の傍には一升瓶が三本ほど転がっている。とんでもないウワバミだ。

「……………残念ながらただの妖怪なんでな、お前らのペースにはついていけないわ」

「それは残念だ。……………私が朝まで介抱してやろうか。それ

「こぞじっくり、ねっとり」と

こぞとばかりにすり寄って絡みついてくる。その豊富な胸が俺の腕で形を変える度、その柔らかい感触で理性が吹き飛びそうになる。必死に動揺を隠しながら抜け出そうと腕を動かすもそこは鬼、まったく抜け出す隙を与えてくれない。

「……………おい、そういうのは無いんじゃないのか？」

このままではいつ理性を持ってかれるかわからないので、酒が回って上手く回らない頭を必死に働かせて抗議の声を上げる。

「私は喰ったりはせんと言ったが……それは喰われるのならば仕方のないことであろう？」

こいつ、このまま俺から押し倒すまで誘い続ける気だ。確かに嘘はついていないが、ちよつと卑怯じゃないか？

そして頭がもう殆ど回らなくなってきた。抱きついてくる紅の成熟した体からは女性特有の仄かに甘い香りが漂い、俺の残り少ない理性を削ぎ落とす。頭を胸に抱えられ、舐める様に俺の身体を這っている手さえもが淫美に感じ、少しずつ本能の波が頭を支配して行くのが判った。

まずい、このままでは……………。

理性をかき集め、今にも飛びかかろうとする本能に蓋をし、辛うじ

て抵抗を続ける。顔を上気させ、撫で回してくる紅が視界に入るたびに脳が警鐘を鳴らし、本能に負けてなるものと意識を取り戻させる。

その時。

「……………私と交わうのがそんなに嫌なのか？」

耳元で聞こえた微かな声。少し切なさを含んだその声音は、俺の残った理性を悉く消し去った。誘うために態と囁いた、という可能性もあり、どちらかということその可能性の方が高いだろう。しかし最早そんなことは考えられない。俺の視線は紅のその身体から離れることはなく、本能のままにそれを渴望していた。

……………ふっ、何を迷うことがあるうか、据え膳喰わねば武士の恥、だ。

「……………紅」

「・・・優」

紅の瞳をしつかりと捉え、頭を優しくなでる。さらさらと手をすべる髪をすいて、その手を顎の下へ。

「・・・お前が鬼の母と呼ばれる理由が判った。これだけの女、男が放って置く訳ないな」

「・・・ふん、気づくのが遅いわ、ヒヨっ子め」

互いの視線が絡み合う。改めてみる紅の顔は、月明かりに艶やかに染まっていて、どこまでも魅力的だった。

お互いを求めあうようにどちらともなく顔を近づけ、唇が触れ合うとしたその時。

ボガアアアアアアアン!!!!!!!!!!

「やつほー！呑んでるかい・・・ってアレ？母様だけ？優は？」



「ちょっと、しつかり!?!母様も呆れてるよ!」

「お前の……せいだ、……がくつ」

「優!?!」

何か気を失うオチ多すぎないか?とか思いつつ、まともや気を失うのだった……。

「……翠香よ、お前は一週間宴会の片づけをせい」

「そんなあ!?!」

鬼プラスの夜はこうして今日も更けていく……。

14・織田さんパネエ（後書き）

感想・指摘が有れば宜しくお願いします

.....あれ？萃香ってこんなだったっけ（^| ^ ;）？

15・酒は呑んでも呑まれるな(前書き)

姉御のターン!!!

ドローカード!!

これで終わりだ!バーサーカーソウル!

バ、バー(ry

## 15・酒は呑んでも呑まれるな

鬼達と共に過ごし始めて数年後のある日のこと。

暖かい春の風が薫る季節。

この年は近年稀に見る暖冬で、遂にこの冬の間空から降りてくる雪を見かけることは無かった。これは珍しいことも有るもんだと、何時もに比べて少し過ごしやすい冬の時を享受していたのだが。

しかしそこまで地球は生物に対して甘くなく、冬が終わり春へと変わる境目の季節に思い出した様に寒さが襲い始め、これまた中々珍しいと、鬼達が宴会に精を出していた。

そんな結局酒が呑めれば何でも良い奴らに呆れていた頃。

この日、俺は前日に呑まされた酒が残ってしまい、二日酔いに悩まされていた。何時もならそんなことは無いのだが、それは今思い出しても後悔が残る昨晚のこと。皆と話に花を咲かせていた俺は、少しばかり油断してしまいうつらうつらとしてしまった。当然そんなに早く潰れる事を許さない鬼は、酔い潰れたのだと勘違いして俺の口に酒瓶を突っ込んだのだ。それはもう凄い勢いで。

当然俺は行動を起こす暇もなく、大量にアルコールを摂取してしまったのだらう。

それからの記憶がなく、その間にも吞まされていたのか翌朝起きてみたら頭ガンガン、身体フラフラのバツチリ二日酔いだった訳だ。酒瓶を笑顔で突っ込んできた勇儀はあとで覚えてるよ。

取り敢えず隣で俺に抱き着いて寝ていた萃香と勇儀をどけて、さらに上に乗っかっていた紅を退け、起き上がったは良いものの動けそうにない。

くそ、二日酔いがこんなにも辛いとは。

「・・・・・・・・水」

そこら中に置いてある瓶から水を注ぎ、しっかりと酒ではないことを確かめてから口をつける。鬼が呑む酒は度数の高いものばかりなので、少し香りを嗅げば鼻を刺激するアルコールの香りで判断できる。

ごくごく、と喉を通って行く水の清涼感を感じながら、よたよたと宴会場から部屋へ向かう。

「……………視界クラクラでも余裕で部屋までたどり着ける程馴染んでいるとは。」

俺旅人だったよね？

絶賛職務放棄中です。

「…………オラに元気を分けてくれ…………布団」

押入れ的な収納から布団を引っ張り出し、床にぶちまけてダイブする。少し寝づらいが、綺麗にしき直すヤル気も元気もないのでこのまま夢の世界へさぁ行こう。

「……………ZZZZ」

今日は特別休業日、だ。

……「ら、どつせ何時も働いてないくせにとか言っな。

~~~~~

「……んむ、ふ？……ふわぁー……」

右半身に伝わる畳の感触で目を覚ます。昨日酒を飲んだ後、そのまま寝てしまったようだ。

「……ん………っ、おい翠香、角が刺さる。ほら、母様も起きて起きて。もう優はどっかに行っちゃったよ」

私の記憶が確かなら、昨晚は酔いつぶれて寝てしまった優に抱きついて寝ていたはず。はっきりとはしていないが、ぼんやりとその場面だけ思い出すことができる。ということは、この翠香と私と母様が山積みになって放置されているのは優の仕業だ。

畳みに寝っ転がって、幸せそうな顔で情眼を貪っている萃香。一応服を着てはいるのだが、わざとなのかどうなのか、肌蹴てしまっていてその身体を朝の清々しい空気に晒している母様。

「……私とこの2人に抱き着かれていた優は相当寝辛かっただろう。母様に至っては上に乗っかってたし。」

「……ん、あと五年……」

翠香が寝ぼけた声でそんなことを言う。こいつはほっといて良いだろう、どうせしばらくしたら勝手に起きてくる筈だ。

「……くあ……おや、勇儀だけか」

「いや、翠香もそこで寝てるよ。優はとっくに起きてどっかに行きたみたいだ」

母様が瞼を開き、その身体をゆっくりと起こす。肌蹴ていた服を綺麗に着直し、何時ものような威厳を漂わせる。正直、ついさっきまでの寝ていたのと同じ鬼だとは思えない。

「・・・それにしても昨日は彼奴、瞬く間に酔いつぶれのう。珍しく酔ったと思っただら誘う暇もなく一人で寝おって・・・」

どこか憂いを含んだ表情で話す母様。余程優のことを気に入っているのだろう、最近はより一層激しい接触をしている。それこそ口に出すのも憚られるようなことばかりなのだが、鉄の心の持ち主なアイツにはなかなか通用していないようだ。

かく言う私も、酒が入ると優に密着してしまう癖のようなものがあり、しかも怒鳴ったりしてしまふ。自分でも少し理不尽かな、と思うことはあるがそれでも翌朝にはまた何時もの顔で接してくれる優に甘えてしまっているのが現状だ。

「・・・ねえ、母様。アイツのどこを気に入ったんだい？」

それは前々から気になっていたこと。何故どこの誰かも知らない優にいきなり決闘を仕掛け、ボコボコにした拳句半ば拉致するようにウチに運び込んできた。

あの日、遠くの山で何か爆発するような大きな音が聞こえたなーと思っただら、普段は下の鬼に行かせる母様が「私が行く」なんていうもんだから、その時は何か大変なことに成るんじゃないかと驚いたものだ。

そして翌朝帰ってきた母様が肩に抱えている男を見てさらにびっく

り。母様が鬼以外の男に興味を持つなんて前代未聞だったから、それは当然の反応かも知れないが、兎に角まあ驚いた。どんなに強い妖怪なんだろうと、とりあえず翠香に見張りをさせたものの、数日間ぐっすりと眠った上に鬼達の中にも堂々としている。これで母様にボコボコにされた後なんて言うからさらに驚きだった。

「……いきなりなんだ。遂にお前も惹かれたか？」

「そんなんじゃないけど……母様が情けをかけるなんて珍しいなあって」

まあ確かに、見た目は良い方だと思えるし、性格も当たりやすくていい奴だとは思う。しかしそれだけで鬼の母たる者が惚れ込む要因にはなるまい。流石に決闘をして生き延びて鬼に馴染むまでになるとは思っていなかっただろう。

「私は彼奴に情けをかけたわけでも、ただ単に何となしで気に入った訳でもない。

……優のあの眼差しに心を掴まれたのだ。自らの芯を持った強い眼差しにな」

「……眼差し、ねえ。アイツがそんなに強いとは思えないけど」

妖怪であり、人間とは一線を画した存在である優。身体能力も比べ物にならないし、寿命だって永い。しかし、それは人間をものさし

にしたに過ぎないのであって、我等鬼と比べては見劣りしてしまうものだ。如何に意志が強かろうとも、実が伴っていないければそれは只の幻想と成り果ててしまう。力を伴わない理想は、いずれ朽ち果てて行くのだから。

「強いとは思えん、か。」

「……勇儀よ、私はそのようなことを言っているのでは無いぞ」

「……じゃあ何だって言うのさ?」

「ふっ、いずれ判るだろうよ。何せお前はまだ若い。これから如何様にも変わることが出来る」

「若いって、これでも経験は積んでる方だと自負しているんだけど……」

「ふん、それでもまだまだ足りないということだ。まあ焦ることはない、我等には長い永い時が残されているのだから」

「……ふふ、そうだね、焦る必要はない、か。確かにそうだね。私はまだ若いんだし」

「・・・現金な奴だな」

「それが鬼の良いところ、じゃないか」

自分の言葉に僅かな笑みを漏らし、母様も小さく笑う。

私はそんなに若い方では無いが、母様にとってはまだまだ手が放せない子供ってところか。

少し気恥ずかしさを感じるそんな距離感。

それは四天王と呼ばれるようになってから久しく感じていなかったもので、とても心地好いものだった。

~~~~~

「……………ここに居たのか」

その後、暫く母様と話していたのだが昨晚私が優に酒を無理矢理吞ませてから急に酔い潰れてしまった件を聞いた。恐らく二日酔いかなんかで寝ているだろうから様子を見てきてやれと言われ、酔い潰れた責任の一端を担っているらしい私はその言葉に従って優を探していたのだが……………。

「……………よりもよって母様の部屋で寝てるとは。もう相思相愛で良いんじゃないかい」

赤を基調に豪華に装飾された部屋に襖を開けたまま、恐らく優であろう物体が倒れている。確かに二日酔いらしく、顔色が悪い。着物も昨日のまんまだし、敷いてある布団も乱雑極まりない。

……………まったく、この男は。

「ほんと、しょうがないねえ」

せめて綺麗な格好で寝かせてやろう。これで酔わせたのはおあいこだ。

優の上着に手をかけ、ゆっくりと脱がせて行く。寝ている優を起さないように、慎重に丁寧に。

「……………おお」

腕を袖から抜くと、男特有の鍛えぬかれた厚い胸板が見えてきた。腹筋も引き締まっていて、しなやかながらも力強いことが見て取れる。

「意外に鍛えているんだな、てつきり遊んではかりだと思ってたから、これ程とは……………いかん、変態か私は」

寝ている男の裸身（上）を眺める女。いかん、変な噂が立ちそうだ。

皺が寄っていた布団も真っ直ぐに敷き直し、また優しく寝かせる。仄かに香ってくる酒の香りに顔が綻び、同時に少しの罪悪感を感じながら上半身を拭いていく。

……改めて見ると、中々良い男じゃないか。顔立ちも整ってるし、寝癖がついている以外は清潔感も満ちている。

成る程これなら母様が気に入るのも無理は無い、と一人で勝手に納得したところで問題発生。

「下はどうするか……」

流石に寝ている所を下を脱がせて着替えさせるなんてのは、あまりに恥ずかしい。いくら長生きしているとは言え所詮一人の女鬼。男の裸を目にするのを躊躇わなくなるほど女を捨てちゃいない。

「いや、私はただ着替えさせているだけだ。そこには何も他意などないしましてや見たいとかそんな気持ちはいっぼつちもないからそうだ大丈夫だ」

しかし上を脱がせてしまった以上、途中で中途半端に終わるのも後味が悪いような気がする。そう思って、自分に言い聞かせるように言い訳をしておく。

緊張で顔に少しずつ熱がこもるのを感じながら、そつと優の服に手をかける。因みに優は最近、『和服に目覚めた』らしく、ここに来て来た時に履いていた服ではなく私達が着ているような袴を着けている。黒主体に纏められたその服はとても似合っていて、大人びた雰囲気を感じさせる。

私達が着ている服を優は『和服』と呼んでいるのだが、和服以外の服を見たことがないので、いまいち良く判らないけど。

「よし、脱がそう……頼むから起きるなよ」

腰を結わえていた紐をほどき、これは優が起きたら間違いなく襲わ

れていると思うだろうね、とか考えながら腕に力を込める。  
しかしこの作業、とてもやり辛い。上半身なら身体を起こしてやれば良かったのだが、下半身となると腰を浮かせてやらなければ脱がせられないので、自然と時間がかかってしまう。

そんな風に拙い手付きでしているのが不味かったのか、優が顔をしかめる。

まずい、このままでは優に痴女認定される！

そう思ったのも束の間、次第に優の瞼が開いていき、空中をさま迷っていたその視線が私を捉える。

「・・・・・・・・・・勇儀？」

「そっ、そっだよ勇儀だ。目が覚めたかい？」

出来るだけ平静を取り繕おうとしたのだが、声の上擦ってしまった。多分顔も真っ赤だろう。

しかし今頃焦っても後の祭り。なるようにしかならないだろう。優

に嫌われてしまうかも知れないがそれは私がすると決めてやったことだ、後悔はしないぞ。

そんな思考をしていた私とは裏腹に、優は未だに寝惚けているのか、むすっとした寝起き特有の無表情でこっちを見ている。

自分の服が上半身は脱げていて、下半身も脱げかけていることに気が付いていないらしく布団に寝転がったままだ。寒くないのか？

「……………寒っ」

あ、やっぱり寒いんだ。

「……………お前、」

「……………え、私かい？」

おもむろに腕を上げて指を差してくる。

やっぱり襲われたと思ったのだろうか。私は目を瞑って覚悟を決め

る。優のことだからいきなり暴力に訴えることは無いだろうが辛辣な言葉をかけるぐらいは有りそうだ。優に言われるのは正直辛い、悪いのは私、堪えることしかできないだろう。

「・・・俺の抱き枕になれ」

「・・・は？・・・って、わわっ！」

予想だにしていなかった言葉に一瞬動きを止めていたところを肩を掴まれて引き倒される。

「おい、ちょっと！？寝惚けてんのか!？」

「うるさい・・・黙って抱かれてる・・・」

「そっ、その台詞は色々とマズインじゃないのかい!？」

「・・・ZZZZ」

「って寝てるし!？」

あまりに近い距離に面食らって離れようとするが、体勢が体勢だけに力が入らない。私の方が力では強いはずなのだが、これではどうすることも出来ない。それに本気で抜け出そうと思えばいつでも抜けられるが、今さら起こしてしまうのも忍びない。

「……か、顔が……近い……」

今は背中に手を回されて優の上に乗せられているため、頭から伸びている角以外に優との間に入るものはない。そしてその角も刺さらないように顔を横に向けているので、優の胸に直接顔を埋めている。そして何より自分の胸がつかえて苦しい。萃香くらいならそんなことはないのだろうが、私は比較的大きい方なので、俯せになると潰れてしまうのだ。

「……駄目だ、やっぱり顔を上げよう」

首を持ち上げて胸の下に空間をつくり、呼吸を整える。すると自然と寝ている優の顔が視界に入った。

来た時より少し伸びた髪。凜々しく整った目元に、優しそうな表情。恐らく男前の部類に入るだろう、均整のとれた顔立ちだ。

「………って、母様が変なコト言うから変に意識しちゃったじゃないか。」

部屋を静寂が包む。聞こえてくるのは優の寝息と、何故か高鳴っている私の心音だけ。未だ顔の火照りは取れず、まるで恋人の様に抱き合って寝ている。

私はこういう甘過ぎて見てる方が恥ずかしくなるような雰囲気は苦手だ。何故か寒気のようなものを覚えて、いたたまれなくなるような感情を抱くのだが。

それでも。

何の音もない部屋の中で、優の腕に抱かれて寄り添っている自分は、決して嫌悪するわけでもなく、むしろこの状況を喜ぶかの様に胸の鼓動を速めていた。

「………幸せそうな顔でねてるねえ」

私を抱いている優はそういう私とは対照的に、そりゃもう緩みきつ

た表情で眠っている。私を何だと思っているのか小一時間問い正してやりたいところだが、それはそれで恥ずかしいから止めておこう。からかいで恥ずかしいことを言ってくるのが目にみえてるし。

そうだよ、こいつは時々歯が浮くような恥ずかしいセリフを恥ずかしげもなく口にする。優としてはそんなつもりはないらしく、無自覚に言ってくるのだからなおさら性質が悪い。毎回毎回動揺しているこっちの身にもなってくれないかねえ。

「……………これじゃまるで母様だねえ。ホントにどうしてくれるんだい」

それは鬼子母神と呼ばれる鬼に向けての言葉なのか、それとも寝ぼけて私を抱き枕としている妖怪へのものなのか。そんなどうでもいい疑問を捨て去り、優の顔を覗き込む。

「……………ゆっ、ぎ……………」

寝言なのか、私の名前を呼ぶ目の前の男に愛しさを感じ、少しずつ顔を近づける。

……………ちゅっ。

軽い口づけ。

それだけで私の心は優に惹かれ、思いを寄せていく。

「……ふふっ、私も母様と同じみたいだ。お前が愛しい。今頃になって気づくとはな」

もしかすると私は随分と前から優を好いていたのかもしれない。ただ、気恥ずかしさと照れが心を隠し。そんな考えにいたりもしなかったのだらう。

「……おやすみ、優」

これからはもう少し積極的に。母様までとはいかないけど、私も頑張ってみるか、と決意し優の胸に顔を埋める。

・  
・  
・  
・  
・  
ふぶつ、  
あつ  
たかいな。

15・酒は呑んでも呑まれるな（後書き）

勇儀姉さんのターンでした。

いやあ、難産でしたねえ。文章もどこかおかしかったし。

・・・まあ俺だからしょうがない（泣）。

16・モンハンじよつぜー！（前書き）

会話中心に書いてみました。まあ今までもそうだったかも知れませんが。

つるぺたのターンです。

## 16・モンハンしようぜ！

夏本番。

太陽が一年の中で最もヤル気を出し、どこぞの松岡さんよろしく地面から突き上げる熱気が陽炎を生み出すこの季節。蝉が日がな一日中、その短い生をを謳歌するようにこれでもかと声を合わせて鳴き続け、生き物は涼を求めて木陰に集う。

そんなある日、屋内で過ごすには勿体ないというように思える晴れ渡った空の下。俺、もとい九条 優はというと、何故か短パンチツクなズボンを履き、見るからに動きやすそうな服で近くの中をダラダラと歩いていた。

「おいウォーターメロン。そろそろこの状況を説明してくれても良いんじゃないの」

「・・・へっ？私かい？それは着いてからの楽しみさ。因みに私の名前は萃香と言っ」

「おい西瓜。そろそろ俺は休憩を所望する」

「何言ってるんだい、さっき休んだばかりじゃないか。あとそれは

なんか字が違う気がする」

「・・・イントネーションだけで何故判ったし。なあ南瓜、せめて目的だけでも教えてくれ」

「それもまた後でね。ていうかそれはカボチャだ。・・・まあ頑張っておくれよ、これは優のためにもなることなんだからさあ」

「そ、そうだったのか・・・」

「まあ嘘だけどね」

「よし頭貸せ。その頭から生えてるアンテナへし折ってやる」

「これは角だよ！っていうか嘘の代償大きすぎっ」

「・・・鬼は嘘つかないんじゃないのか？」

とまあ、そんな具合で茹だるような暑さの中を何故か萃香と二人きり、延々と歩いているわけだ。まさか妖怪になってまでこんな遠足紛いのことをすることになるとは、誰が予想しただろうか。反語だ。



「少なくともお前よりは」

「ふふん、私に勝てるだけでも？」

「………よろしい、ならば戦争だ」

「なにで闘うのさ？」

「どっちが先に相手の頭に生えてる角をへし折れるか」

「私勝ち目無いっ」

こんな風に朝イチで特攻を仕掛けて来た萃香と取り敢えず遊んでいたら、いつの間にか俺は外へ連れ出されて旅のお供にさせられた訳だ。なんとというキングダムゾーン。『朝起きてからの諸々』を飛ばし、『出掛けた』という結果だけが残るッ！

以上、海藻でした、間違えた回想。

萃香の扱いに慣れてきた今日この頃。いくら暑いとは言え、久し振りのアウトドアに少しだけ心が昂ってることも否定はしない。これで暑く無かつたら最高なんだが、気温を操るとか何処かの四季の口り神様じゃないので出来ないのである。ああ無情。

「……あれ？俺の周りの口り率、結構高くない？舞といい、目の前の萃香といい。」

「……」

「大丈夫だ、見た目は幼女、中身は老人、その名も口り鬼さんだからな。合法だ」

「何か言ったかい？」

「いや、何も」

「……なら良いけど」

良かった。年齢はババアでも頭の出来は見た目相当だった。

「何か釈然としないけど。まあ良いや、着いたよ。此処だ」

あっという間、ではないが喋っている内にどうやら目的地に着いたらしい。

「……おお」

思わず、口を突いて出た溜息。

そこに広がっていたのは、砂漠の中にあるオアシスのような、そう形容するに相応しい光景だった。

濠々と音を立てて流れ落ち行く滝。その滝壺はかなり深く、また澄んでいて青々とした水を湛えている。周囲には草木が生い茂っており、夏の炎天下を忘れさせるだけの雰囲気があるにはあった。

「……まるで別天地だな」

ひんやりとした滝飛沫をその身に感じながら、今までの疲れが吹っ飛んだかのように眺める。こんな場所があるとは。こいつぁ驚きだぜ、とつつあん！

「ほら、呆けている暇はないよ。こっからが本番なんだから」

「ん？此処で何かするの？」

綺麗な滝を見せるために来たのかと。

「そう言えばまだ説明してなかったねえ。驚くが良い！今日は何と、酒虫の捕獲に来たのだ！」

ドーン！という効果音が付きそんな程胸を張って宣言する萃香。

「………よし、萃香ちゃん、頑張つて。お疲れ様でした。私はこれで帰らせて頂きます、終電の時間が有るんで」

「いや、何言ってるのさ。優も手伝うんだよ」

「いや、私は優じゃないんで。マイケルジャクソンって言います。ポウウ！」

「いや、いきなり踊られても知らないから！っていつかその歩き方凄い！前向きなのに後ろに進んでる！……って誤魔化されないよ」

「興味津々なくせに」

「くっ、否定できない・・・でも、手伝って貰うからね!」

「萃香、一人で酒虫を捕まえようと奮闘する、そんな可愛い萃香が大好きだ。愛してる。だから俺はこれで帰っても良いよね?」

「そっ、それならしょうがな・・・って駄目だよ!」  
顔を真っ赤に叫ぶ萃香。ヤッベ、怒らせたか?

「というか優は第一帰り道判ないだろう!?!」

「はっ!とんだ盲点!」

「ふふん、お前は既に私を手伝うしかない」

「あべしっ!」

萃香に論議で敗北する日が来るとは。悔しいっ!でも感)ry

「・・・でっとうやって捕まえるんだ?まさか釣り糸を垂らすとか  
じゃないだろうな」

「違つよ、酒虫は魚じゃないんだから。実は酒虫はとってもデリケートでね、捕まえるのには並々ならぬ努力が要るって言われてるんだけど」

そこはかたなく面倒臭そうだな。

「……はあ。何でまたそんなことを四天王たる萃香にやらせるんだ？下の奴等に行かせりゃ良いだろうが」

「それがね、下の奴等じゃ手も足も出なかつたらしくて。それで私が呼ばれたんだよ」

……手も足も出ないって。何者だよ酒虫。

「それは酒虫が強いつてことか？」

「私も良く判らないんだよ、何せ初めてだし。現物を見たこともなけりゃ、体液さえもね。今までは母様が一人で取ってたらしいけど、何か用事があるとかで」

「……そんで補佐として俺を連れてけっつか」

「ご明察。何か矢鱈とニヤニヤしてたけどねえ」

「・・・それはこの上なく嫌な予感しかしないな」

『あの』紅のことだ。何か途轍もない裏があるに違いない。

「というか第一に見たこともない虫をどうやって探すんだよ？」

「チツチツ。私を誰だと思ってるんだい？その点に抜かりは無いさ。母様に絵を書いて来てもらったよ」

「おお、流石迷探偵だ。」

萃香が何やら絵が描かれた紙を取り出す。

「じゃじゃーん！これが『酒虫』さー！」

そこに描かれていたのは良く判らない物体。蛇の様に細長い胴体に羽が生えていて、更には足のようなものまで付いている。羽が生えた蜥蜴、のような。爬虫類なのか？

・・・いやいや、アバウト過ぎですぜ。

「これを元に酒虫の搜索をするのだ、優よ！」

「……はあ、しょうがない。此処まで来たらやるしかないしな。やってやんよ！」

最終的には手伝うことに落ち着いた。そうせざるを得なかったただけだが。

実際のところ、酒虫の捕獲に成功したところで、俺に取って何か良いことが有るわけではない。むしろ酒がより多くキツく作られるようになるかもしれないのでデメリットばかりな気もしないでも無いが。

しかし、隣でニコニコと笑う萃香を見ると、そんなことはどうでも良いかなーと思えて来てしまうのだ。天真爛漫、とはこのようなことを言うのだろうか。兎に角、何だかんだ言っても手伝うことになるのは避けられないのですよ、アンダーソン君。

……だからロリコンじゃねーよ。

16・モンハンしよっぜ！（後書き）

感想・指摘を待ってます。

ターンとか言っておきながら話を分けてしまったという罫（笑）

次回、纏められるといいなあ。

17・嘘だっ！（前書き）

取り敢えず劉備：間違えた投下。

17・嘘だっ！

「おっ、いたぞっ！あれじゃないか!？」

「本当かい!？」

「……と、思ったら見間違いでした。あれはどう見ても違います。本当にありがとうございます」

「もう、優。しっかりしてよねー」

「……にしても暑っいな。何か寒いギャグを1つ」

「えっ!？そんな急に言われても……ふ、布団が吹っ飛んだ」

「……恥ずかしっ」

「お前が言わせただろっ!？」

~~~~~

「あっ、あれじゃないかい!？」

「遂に発見か!？……苦節一時間、漸くこの終わりの見えない採集ライフも最終段階に入って……あ、いや、今のは駄洒落じゃな

い
「

「誰に言ってるんだい……。あ、良く見たら違ったよ。期待して損したー、要らないや」ポイツ

「はっはっは。何だよ見間違いかよー。角へし折るぞー?」

「なにその異様なまでの角に対する執着心!?!?!。全く、誰だいまこんなところに金塊なんて捨てたのは」

「角を折ること、それはこの世の真理なりつてえええ!?!金塊とか落ちてたの!?!今それを捨てたの!?!」

「そうだけど?」

「お前の価値観が怖いわ」

「いや、それほどでも」

「誉めてねえ。むしろ貶してる」

~~~~~

「あ、あれは!?!」

「何だよ?次も違ったら角の先端から二ミリおきに細切れに切り刻んで行くけど」

「いや、あれは間違いないよ！絶対に捕まえてみせる！」

「おい、そんな急に走ったらコロブチカ」

「採ったどー！」

「何故その台詞を知っている？」

「ほら、見てよ優。これじゃないかい!？」

「………待て、萃香、それを持って俺に近付くな、それは酒虫じゃなくて一般的にGと呼ばれるものだっ！」

「嘘っ!?!………ってキヤーー！」

「キヤーーじゃねえよお前!こっち投げんな!飛んできただろうがっつてっのおおー!?!」

「ゴメン、優!犠牲になつて！」

「今決めた!お前後でへし折る!」

「また角!?!」

「本体だ!」

「本体なの!?!」

~~~~~

酒虫の搜索を開始してから早くも数時間が経過している。太陽がジリジリと照り付ける中を、俺達は上のようなやり取りをしながらも辺り一帯を隈無く調べ、それこそ岩の裏から滝壺の底まで調べたのだが、一向にそれらしき生物は見つからず。ぶっちゃけ有効な手立を見付けることも出来ずに、暗礁に乗り上げているのである。決して遊んでいる訳じゃない。

「………ああ、暑っちい。溶けてしまいそうだ」

滝壺の淵に腰掛け、暫しの休憩を取る。ああ、顔にかかる飛沫が気持ち良いな。それにしても、真夏の太陽がこんなにも恐ろしかったとは。

「いやー中々見付からないもんだねえ」

隣に座る萃香が愚痴を溢す。しかしそう語るその表情はけしてネガティブなものでなく、未だに姿を見ることがかなわない酒虫に期待を膨らませているかのようだった。

「それにしても、滝壺の水ごと全部持ち上げるとはねえ。いやはや、何とも便利な能力を持つてるじゃん」

滝壺の底の搜索をするとき、滝壺の中の水分子ごと全て移動させた。まさか手当たり次第に潜って探す訳にも行かないだろう。空中に浮かぶでっかい水の玉を見てちよつと興奮した。

「ふむ、そうだな、萃香の能力で何とか出来ないのか？ほら、なんとらを操るっていう」

「『密と疎を操る程度の能力』だよ、優」

実は萃香は能力持ちである。その名も『密と疎を操る程度の能力』。これは読んで字の如く、物体の密度を操るというものだ。その用途は広く、例えば自分自身の体の密度を操って巨大化、霧のように気体化や、更に小さく分裂したりも出来るらしい。ぶつちやけ、そのような能力を使わなくとも上位種である鬼の中で、そのまた上位である萃香ならば、そこら辺の妖怪などではお話にならないくらい強い。恐らく本気でやっても、肉弾戦では俺でも勝てないだろう。経験の差が有りすぎる。

因みに。

『分子を操る程度の能力』を持つ俺には萃香の能力はあまり意味を持たない。

気体化したり、巨大化したりしても萃香自体の分子を弄ることで元

に戻すことが出来る。まあこちらから萃香を巨大化させたりということは出来ないで、能力にも相性があるということだろう。

「そうだねえ、気体化でもしたらもしかすると見付けられるかもね」

「試してみる価値は有るんじゃないか？」

「よし、やってみようじゃないか。ほいつ」

なんとも軽い掛け声と共に霧となって四散する萃香。辺り一面が霧に覆われ、その中に濃密な妖力を感じる。鬼が持つ強大な妖気が溢れ出ているのだろう。

「どうだ？何か判ったか？」

「……うーん。ここら辺には動くモノは見当たらないねえ」

霧になっていた萃香が目の前に現れる。

「……ホントに此处にいんのか？酒虫は」

「鬼は嘘は付かないんだよ、その頂点たる母様からの情報だ。間違ってる筈は無い……と思う」

「……いや、紅だぜ？」

「……ちよつと不安になつちやつたじゃないか」

おいおい。

「まあ、ここら辺には居ないって判つただけでも収穫じゃないか」

「……そうだな、いつまでも無闇矢鱈に探すよりはマシか。ふう、
そんじゃ酒虫は発見出来なかつたということ、今日の採集は

」

「何いつてんの？探し出すまで帰らない……帰れないよ？」

「いやいやそれは無いだろ常識的に考えて」

「本当なんだねこれが」

「ウソダンドドコドーン！」

……どうやらリタイア出来ない採集クエストらしい。

~~~~~

それからまたまた数時間。

先程のような過ちを繰り返すことの無いように、今度は最初から萃香が霧に成って探索を続けている。少しずつ範囲を拡げて見落とさないように慎重に探しているのだが、芳しい結果は得られず、時間を無駄に費やしている感が否めなくなってきた。

「ぶつちやけ飽きた」

「誰と喋ってるんだい？」

そしてそんなことを続けるのにも飽きてきた。ていうか酒虫がそんなに大事ならもっと大勢で探しに来れば良いだろうに。

「なあ、日を改めて又探しに来ないか？結構日が傾いて来たし、一旦帰って紅からもう少し情報をもらって来ればいいだろ？」

「そしたら優は今度は来ないよね？」

「・・・別に俺じゃなくて他の鬼とかで良くね？」

「いや、それは何か負けた気がするじゃないか」

何にだよ。

「ほら、次行くよ」

そう言っすたすたと歩いて行く萃香。

「・・・はあ」

まあ、主導権は萃香に有るわけだしな。従つ他無いだろう。

いつになったら帰れるのやら。

17・嘘だっ！（後書き）

・・・更新が遅い上にこの短さとは。

反省／（――）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8548p/>

---

東方分列録

2011年2月13日21時29分発行